

昭和 57 年度

# 都 倫 研 紀 要

第 21 集

東京都高等学校倫理・社会研究会



## この一年を顧て

会長 佐藤 勇夫

現代社会が実施されて、一年を経過した。その間、多くの実践研究や研究発表がおこなわれ、目を見張らせるものも少くなかった。

主として、具体的な指導方法・技術などを模索した一年間であったともいえるが、なおいくつかの大きな課題が、残されていることも明らかにされた。

私たちの指導の対象は、能力・適性が多様であり、感受性が鋭く傷つき易い心情の持主であり、複雑な存在というほかない。それに、学ばせる教科は、領域からみても、これまでの学問のどのような領域とかわるのか微妙であり、しかも多岐に亘るようである。これが教えるとなると、現実の高校生一人ひとりをも的確に把握、人間や社会のあり方について、理解だけでなく主体的に生きる力を身につけるように導くのである。教師の優れた力量と技術に俟つところが極めて大きい。

生徒たちにとって、現代社会が充実した授業であったということは、生き方を知的に、客観的に教わるだけではなくて、学んだことが、生徒の誤りない判断・決断としてはたらくまで浸透させることなのである。現代社会のねらいの独自さをこのように考えるのなら、教材や資料も、その生徒にとっての教材や資料となる視点と吟味とが加えられなければならないだろう。さらに、課題が、人間の存在や価値についてになると、生徒に理解と思索とを深めさせるための指導者の役割には刮目すべきものがあるようにおもわれる。

先哲の思想を素材にするにしても、その素材である思想内容は、教師という個別者を通して、生徒に伝えられ、学ばれていくのである。よく生徒は教師の後姿から学ぶものともいわれる。先哲の思想をとりあげる教師のあり方が、生徒の自立への意欲をかきたて、学びながら自ら悟る源動力ともなるとおもわれる。

私たちの志している教科は、人間がどう生きるかを考えさせ、自らの決断で生きていく人間の形成を願いとしている。その意味で、常に教育の根本に連り、学校教育の核となる位置を占めるものである。現代社会の目指すところを、どのように教室に活かしてゆくか、私たちの任は甚だ重いようである。

紀要をお送りする。大方のご助言ご教示をいただければ幸いである。

# 目 次

## はじめに

I 研究主題と研究体制および紀要の編集方法 .....	4	
研究分科会参加者名簿 .....	7	
II 研究会の全般的活動の概要 .....	8	
III 研究例会報告		
第一回・公開授業 現代社会初年度の戸惑い		
日野台高校 菊地 堯 .....	11	
第二回・公開授業 「物価とインフレ」をおこなって		
江北高校 及川 良一 .....	12	
第三回・講演(要旨)		
私の体験から	鷺宮高校 佐々木誠明 .....	14
読書と私	豊多摩高校 吉田 道雄 .....	15
倫社の教師として	府中高校 佐藤 勇夫 .....	16
IV 研究経過報告		
〔第1分科会…高校生の意識と現代社会〕		
活動報告	砧工業高校 三宅 幸夫 .....	17
現代社会の文化の課題	大森東高校 木村 正雄 .....	19
小論文テストについて	秋川高校 水谷 禎憲 .....	22
思想の原典に挑戦させて—グループの学習の可能性を探る		
国立高校 国府田貫一 .....	28	
〔第2分科会…現代社会の内容構成と教材化〕		
活動報告	三鷹高校 工藤 文三 .....	39
倫社の「現代社会」の展開例	城北高校 沼田 俊一 .....	41
「現社」授業にひきつくこと	松原高校 斉藤 規 .....	48
倫社グループ研究、発表学習の実践例	九段高校 蕪木 潔 .....	50
〔第3分科会…「現代社会」の授業展開と課題		
活動報告	玉川聖学院 幸田 雅夫 .....	59

ルネサンス時代の理想人——万能人レオナルド・ダ・ビンチ

玉川聖学院 幸田 雅夫 …… 61

「現代社会」の授業へのパーソナル・コンピュータ導入の試み

四谷商業高校 和田 倫明 …… 66

「倫社」を通しての授業観

田無工業高校 辻 勇一郎 …… 71

「汝自身を知る」授業——本年度の「現代社会の授業から」

豊島高校 葦名 次夫 …… 75

……特集 現代社会への試み、倫社への想い……

神の問題

鷺宮高校 佐々木誠明 …………… 85

倫社の授業と倫社を語る喜び

小岩高校 小川 一郎 …………… 87

倫社への思い——倫社の精神で生かし続けたいもの

葛飾商業高校 浅香 育弘 …………… 90

今年最後の試み

府中高校 永上 肆朗 …………… 94

江北生と歩んだ「倫社」15年

江北高校 宮崎 宏一 …………… 97

倫社への思い

野津田高校 河野 速男 …………… 99

教えることも学ぶこともできないものへ

足立工業高校 亀田 文保 …………… 104

V 東京都高等学校 倫理 社会 研究会規約

事務局だより …………… 108

あとがき …………… 109

# I 研究主題と研究体制および 紀要の編集方法

研究部長 葦名次夫（豊島）  
研究副部長 渡辺 潔（青山） 小嶋 孝（東）  
和田倫明（四谷商）

## 〔本年度の研究主題〕

「現代社会」の理念と授業展開の研究

## 〔研究主題設定の趣旨〕

今年度から、新科目としての「現代社会」が実施されている。新しい科目でもあり、さまざまな期待や戸惑いなどがみられる。しかし、本研究会がめざしてきた目標と大きく異なっているわけでもなく、その目標を社会科の基礎的な科目としての「現代社会」においても、新たな形で生かしていくことが求められているともいえる。そこで、今までの本研究会での活動やその成果を受けつぎながら、「生徒が今後の人生を生きていく上で自ら考え、判断し、自分自身の人生と社会生活を充実したものにするのできる力を育てること」（『学習指導要領』解説）などを、あらためてめざしていきたい。

昨年度の研究部においては、「倫理社会」や「倫理」との関連において、「現代社会」の内容構成と教材化の研究をすすめてきた。本年度は、それを受けつぎながら、実際に「現代社会」の授業を行なっていくなかで、「現代社会」の理念やあり方を考え、「現代社会」の理念を生かす授業展開を研究・工夫・創造していきたい。

そのために、本年度の研究活動は、次の三つを柱として進めていくこととする。

(1) 「現代社会」は、学習する生徒の立場に立って積極的に工夫することが求められている。そこで、現代の高校生が、どのような状況の中で何を考え、何を求めているのか、また、高校生の現状における問題点や課題をあらためてとらえなおしていきたい。

(2) 次に、生徒の実態をふまえて、「現代社会」の教材化に鋭意取りくむこととする。すなわち、「現代社会」の指導内容、内容構成、資料の取り扱い方などを吟味し、「現代社会」の目標を生かす教材づくりを研究・工夫する、そして、

どのような角度から授業にとりくみ、生徒に何を考えさせていくか、その手だてと筋道を明らかにしていきたい。

(3) 第三に、「現代社会」の授業を実際に展開するなかで、あるべき授業の姿を模索していきたい。すなわち、授業のなかで生じるさまざまな発見、戸惑い、悩み、課題などをくみあげ、また、生徒が授業をどのように受けとめているかを明らかにし、よりよい授業を展開していくうえでの手がかりとしていきたい。

### 〔研究体制〕

以上の趣旨にもとづいて、本年度は次の三つの分科会を設定することとする。

#### 第一分科会 高校生の意識と「現代社会」

今日の高校生の現状や意識について明らかにし、それにもとづいて、どのように「現代社会」の授業を行なっていったらよいかをさぐる。

#### 第二分科会 「現代社会」の内容構成と教材化

「現代社会」の理念にふさわしい指導内容をどのように構成してゆくか、資料などの研究も含め、教材を開発し工夫する。

#### 第三分科会 「現代社会」の授業展開と課題

実際の授業展開をふまえて、「現代社会」の理念との関わりをなかで、よりよい授業をどうつくりだしていくか研究する。

以上のように、生徒の実態を明らかにし、それにもとづいて、指導内容や指導方法を研究・工夫していくことは、本研究会が力点を置いて活動してきたところであるが、本年度は「現代社会」の理念と授業展開の研究についても、各分科会での活発な研究・検討をお願いする次第である。

### 〔 紀要の執筆要項 〕

本年度は、次の2つの形を基本として編集したいと思います。次のⅠ・Ⅱどちらかを選んで、御執筆下さい。

#### Ⅰ. 個人研究レポート

- (1) 57年度の研究主題「『現代社会』の理念と授業展開の研究」についての「授業の試み、展開例・研究報告やレポート」等をまとめていただければと思います。

また、「倫理」や「現代社会」に生かしうる「倫理社会」の授業の実践例、工夫、研究などをテーマとしてお書き下さっても、結構です。

- (2) 執筆の際は、
1. テーマ
  2. ねらい——このテーマをとりあげた理由
  3. 展開——小項目をいくつか立て読みやすくする。
  4. まとめ

など、できるだけ、読みやすい見出しや項目をたてて、御執筆いただければ幸いです。

- (3) 同封原稿で、昭和57年1月16日までをお願いいたします。

## II. 特集 「倫社」への思い、「現代社会」への試み

- (1) ねらい 本年度で、現行の「倫理・社会」の授業も一区切りとなります。そこで、「倫理・社会」の授業を担当されてきた、さまざまな思いや感慨、(「倫社」のよさやおもしろさ、「倫社」と生徒との関りなどのエピソード、「倫社」を通してみた教育観、「倫社」の精神でぜひとも生かし続けたいものなど…なんでも結構です。自由な形でお書き下さい。また、はじめての「現代社会」を担当され、気がついたこと、生徒の反応、試みや課題などについて、こちらも自由な形で御執筆下さい。)
- (2) 体裁 (1)と同じ。見出しや小項目は、読みやすい形で適宜、お立て下さい。
- (3) 枚数 同封の用紙で2～3枚をめどをお願い致します。

# 研究分科会参加者名簿

◎印 分科会世話人

順不同

## 〔第1分科会〕

伊藤駿二郎(都青梅東) 新井 明(都東村山) 平栗 幹子(都 南)  
水谷 禎憲(都秋川) 内田 君夫(攻玉社) 石川 誠一(都八王子)  
渡辺 潔(都青山) 細谷 齊(都駒場) 吉田 恵子(都烏山工業)  
◎三宅 幸夫(都砧工) 若木 千勢(都南葛飾) 関根 荒正(都国分寺)  
有馬 利一(都砧工)

## 〔第2分科会〕

飯岡 裕保(都京橋) ◎工藤 文三(都三鷹) 志村 忠彦(都北野)  
原田 健(都大泉学園) 勝田 泰次(都本所) 小林 豊実(都大崎)  
小島 恒巳(都小川) 吉沢 正品(都大森) 杉原 安(都保谷)  
佐藤 勲(都城南) ◎斉藤 規(都松原) 島田 道子(都葛飾野)  
蕪木 潔(都九段) 小嶋 孝(都 東) 新井 徹夫(玉川学園)  
渋谷 紀雄(都墨田川) 浅香 育弘(都葛飾商) 秋元 正明(学芸大附属)  
小笠原悦郎(日大二高) 杉本 仁(都江東工)

## 〔第3分科会〕

小河 信国(都板橋) 沼田 俊一(都城北) 河野 速男(都野津田)  
木村 正雄(都大森東) 吉野 聡(都北多摩) 宮崎 宏一(都江北)  
永上 肆朗(都府中) 近藤 卓(帝 京) 辻 勇一郎(都田無工)  
◎鈴木 律夫(帝 京) ◎幸田 雅夫(玉川聖学院) 葦名 次夫(都豊島)  
国府田貫一(都国立) 斎藤 澄子(都上野忍岡) 和田 倫明(都四谷商)  
海野 省治(三 田) 蛭田 政弘(白 鷗) 遠山 裕之(小 平)  
増淵 達夫(片 倉) 木村 正雄(大 森)

## Ⅱ 57年度の全般的活動概要

〔第1回〕 5月20日(木) 総会・研究発表大会  
於東京都教育会館

1) 総会

会長挨拶	会長	佐藤勇夫氏
昭和56年度会計報告	都立駒場高校	細谷 斉氏
昭和56年度決算報告並に監査報告		同
昭和57年度事務局人事並に役員選出	都立三田高校	海野省治氏
昭和57年度事業計画審議並びに研究計画案審議		
	都立豊島高校	葦名次夫氏
昭和57年度予算案審議	都立三田高校	細谷 斉氏

2) 研究発表並びに研究協議

「昭和56年度の研究活動の総括」	都立白鷺高校	蛭田政弘氏
「現代社会における授業展開の視点」	都立本所高校	勝田泰次氏

3) 講演

「風土・文化・人間——風土の力」	東大助教授	鈴木秀夫氏
------------------	-------	-------

4) 分科会の構成 世話人選出

〔第2回〕 6月24日(木) 第1回例会 於都立日野台高校

1) 公開授業

「日本経済の特質と課題」	都立日野台高校	菊地 堯氏
--------------	---------	-------

2) 研究協議 「現代社会の授業展開」

3) 講演 「現代文化と青年」	法政大学教授	中野 収氏
-----------------	--------	-------

〔第3回〕 10月28日(木) 第2回例会 於江北高校

1) 公開授業

「物価とインフレーション」	都立江北高校	及川良一氏
---------------	--------	-------

2) 研究協議

「コンピューターを活用した授業」

3) 講演

「近代日本の哲学と思想」 横浜国立大学教授 古田 光氏

〔第4回〕 全倫研秋季大会と共催

11月27日(土) 28日(日) 於都立清瀬高校

1) 公開授業

- 「高度経済成長の課題——農業の変容」 (1年「現代社会」)  
清瀬高校 犬井 正氏
- 「『福祉』を考える——地域調査をふまえて」(1年「現代社会」)  
清瀬高校 小川輝之氏
- 「マルコポーロと東西交渉」 (3年「世界史」)  
清瀬高校 亀岡良平氏
- 「世界経済における二つの経済体制」 (3年「政・経」)  
清瀬高校 須田 功氏
- 「フランク国王とローマカトリック教会の成立」(2年「世界史」)  
清瀬高校 片山正毅氏
- 「第一次世界大戦後の日本」 (3年「日本史」)  
清瀬高校 吉川正美氏
- 「幕藩体制の確立」 (3年「日本史」)  
清瀬高校 中村勤子氏

2) 全体協議 (I)

「現代社会」と私の授業展開

問題提起

- 「『日本国憲法の基本的原則と国民生活』をどう指導するか」  
群馬県立桐生高校 尾崎和民氏
- 「『人間生活における文化』をどう指導するか」  
京都女子高校 永井千尋氏
- 「『学ぶことの意義』をどう指導するか」  
東京都立葛飾商業高校 浅香育弘氏

3) 全体協議 (II)

公開授業についての研究協議

「現代社会」における地域調査の生かし方

都立清瀬高校 土屋正孝氏

4) 記念講演

「いま人間を考える 知の地殻変動のなかで」

明治大学教授 中村雄二郎氏

5) 臨地見学

「多摩の文化と信仰を探る」

玉堂美術館 — 吉川英治記念館 — 大国魂神社 — 深大寺

〔第5回〕 2月7日(月) 第3回例会 於都立大森東高校

1) 公開授業 「日本人は仏教にどう対応したか」

都立大森東高校 木村正雄氏

2) 研究協議 「公開授業について」

3) 講演

「私の体験から」

都立鷺宮高校 佐々木誠明氏

「読書と私」

都立豊多摩高校 吉田道雄氏

「倫社の教師として」

都立府中高校 佐藤勇夫氏

〔第1回研究例会・公開授業〕

現代社会初年度の戸惑い

都立日野台高校 菊地 堯

1. 授業公開——不首尾のおわび

57年度最初の現代社会の授業公開を依頼されて、かなり当惑した。本年度は、まだ多くの方が旧課程の倫理・社会を担当していて、現代社会を担当する人が少ないという事情は当然承知しているので、断りにくく、満足な授業をお見せする自信が全くないまま引き受けざるを得なかった。

本校では、新設校なので新教育課程への移行を念頭に、旧課程の1年時に、倫理・社会と政治・経済を置いていたので、本年度その担当者がそのまま現代社会に移行したので、旧倫社担当者が初年度から現代社会を担当することになったわけである。

そういう状況で引き受けたものの、10数年ぶりで政・経分野を扱うハンデは意外に厳しく、教材研究も仲々思うにまかせず、教材を十分に自家薬箆中のものにできないで、教材にふりまわされ続けている最中の授業公開になってしまった。公開において下さった方々には、誠に申訳ない仕様であった。改めておわびを申し上げたい。

初年度ということもあって、教科書は一応全部、年間に終らせる、年間計画も教科書の配列順に従うということを進め、公開の時は、経済のまとめに近い時期に当たっていた。ところが、この部分は私の最も弱点であって、我ながらその展開のまずさにあきれているところであった。今になって見ると、次年度の改善へ向けての課題が山積しているピークの部分であった。

ロてはいろいろに言いながら、中学校公民の研究も全く不足していて、関連づけ、既習事項の活用も殆どおざなりであったし、選択政経へ向けての動機づけの面も活かせなかった。そして何より、生徒にとっての経済を学ぶ意義を実感させるような展開を欠いていた。再起、雪辱を期すのみ。

2. その他雑感——練旨のつけたり

以上のような次第で、本年度の紀要に口幅ったく実践報告をし得るような状況には、遂に身を置きかねたので、寄稿は何とか遠慮して、見逃して頂きたいと思

っていたが、研究部長から懇切な直々の要請を受けてしまったので、観念して原稿用紙の枠目を埋めることにしたというのが、実情である。

倫・社担当教師にとって、新分野を倫・社的な扱いで縦横に料理するには、相当の努力の積み重ねが必要であることを、改めて思い知らされた1年であった。まず、何といっても新分野の内容について、自分自身が「おもしろい」と感じなければ、生徒にとって魅力的な授業にはなり得ない。

そのおもしろさを、まず自ら開発することから着手しなければ、と思っている。経済については、昨年は円安、公定歩合といった、重要問題がちょうど、授業の時期に多発したので、生の教材は利用しやすかった。しかし、現実の問題は、大原則の理解だけでは律しきれない複雑な要因のからみ合いによって局面が左右されるので、新聞等の資料を多用すると、かえって生徒が混乱してしまう傾向もあって、その利用には慎重な判断が必要であることもわかった。

多彩な学習形態の組み合わせによって、生徒の興味・関心を伸ばす工夫の必要ということは、頭でわかっていながら、実態は平板な一方的講義に終わったのも、反省点であった。教師側に十分な準備と見透しがなくては、どうしてもこうなってしまう。

教科書も、実際使ってみると、重複があったり、叙述がごたごたしていたり、配列が不適当なところがあったり等、改善の余地が多く、また使い方の工夫が必要な点が多い。

来年度は、できたら第Ⅰ部と第Ⅱ部を逆にしてやって見たいと思っている。その方が第Ⅰ部へのとりくみ方が深くできるのではないかという気がしている。来年度は、もう少し実のある報告ができることを念じつつ。

## 〔第2回研究例会・公開授業〕

### 公開授業「物価とインフレ」をおこなって

都立江北高校 及川良一

#### 1. 公開授業をむかえるまで

大ざっぱな年間計画は、一学期、青年期の心理、人類と環境（人口問題、公害

問題、資源・エネルギー問題)、二学期、経済学習、三学期、政治学習、というものであった。一学期で扱った内容は、私自身が以前に倫社や地理で扱ったことがあったので、無難にこなしてきたと思う。しかし、一学期末に実施した「現代社会」の授業に関するアンケートでは、「何かもうひとつ授業がもの足りない」という声があった。私自身も「そうだろうなあ」と思いつつも、その“もの足りなさ”が何なのかわからないまま、二学期をむかえることになった。二学期は、私が最も苦手とする経済学習であったので、毎日の授業をどうするか、最低限まちがいを教えないようにということだけにおわれ、“もの足りなさ”について考える余裕はなかった。そうして公開授業をむかえた。

## 2. 公開授業について

公開授業を機会に、経済についてのわかりやすい教材をさがした。教科書に書いてある基本事項を、生徒自身の生活に関係させて、生き生きと理解できるような教材がないかをさがした。その結果、インフレについてマンガでわかりやすく書かれている「レモンをお金にかえる法」(文、ルイズ・アームストロング、絵ビル・パッツ)、週刊朝日に連載されていた「値段の風景」(朝日新聞社)を使うことにした。「値段の風景」を使って、国立大学授業料、国鉄料金、英和辞典、たい焼きなどの値段が昔からどのように変化してきたかを示し、更に「レモンをお金にかえる法」を使って、インフレが何故おこるかについて理解させる、という構想だった。しかし、そのような授業展開の構想を考えても、やはり“もの足りなさ”が残った。そこで、前の時間に生徒に次のような課題を出した。「両親と話をして、物価上昇を強く感じる品物にはどんなものがあるか、君たちが生まれた頃にくらべて現代の物価についてどんなことを感じているかなどについて、「聞きとり」をして、この用紙に書いてきなさい。」と。このような課題を出しながら、実際にどんな反応がかえってくるのかわからなかったし、またあまり期待してもいかなかった。

当日は、考えた通り授業はすすんだ。しかし、インフレについての説明がおわった段階で、“もの足りなさ”が残った。そこで、生徒に出していた課題について、何人かに発表させた。そうすると、「私の家ではそば屋をやっているんだけど、材料費の値上がりを一番感じているそうです。私が生まれた頃、もりそばは一枚60円だったそうです。」「僕の家はたたみ屋なんだけど、光熱費が…」

というように、非常に生活実感のおふれる結果がかえってきた。私が期待した以上の答えがかえってきて、一度に“もの足りなさ”が吹き飛んでしまったように感じた。授業後、課題を集めて一枚一枚読んで、更に驚いた。母親が、生徒が生まれた頃の家計簿をとり出し、いくつかの品物の値段を書いてくれたというレポートもあった。また、そのレポートには母親の言葉として「子供の出産費用が、この子が生まれた頃の10倍になっています。」と書かれてあった。公開授業後、はじめての授業でその話をしたら、生徒は身をのり出して聞いていた。

### 3. 公開授業を終えて

物価上昇に関する親への聞きとりアンケートという課題は、苦手な経済学習ということから、授業方法の改善ということから逃げていた私にひとつのヒントを与えてくれた。生徒自身が自分のまわりの生活について調べていくことの中で、社会事象を生き生きと具体的なものとして学んでいくような授業を考える必要があると思った。ずっと感じていた“もの足りなさ”は、生徒自身が調べてみるということだったように思う。

## 〔第3回研究例会・講演（要旨）〕

（次の3人の先生方から御講演いただきました）

### 〔私の体験から〕

鴛宮高校 佐々木 誠 明

私の生涯の中で、昭和18年から20年に至る軍隊生活の経験は大きな意味を持った。入学したばかりの大学を去り、国のため戦う事を本望として入隊したのだが、そこは虚偽と不正に満ち、絶対服従のヒエラルキーの支配する所であった。私は可能な限り非協力を貫き、将来の社会として平等な階級なき社会を夢みた。

戦後、復興した日本は豊かな社会を実現したが、同時に様々な問題が生じている。今日、人間は代替可能な存在であり、人間本来の個性的生き方を喪失している。資本主義を支持する者は、利潤の追求こそ経済発展に不可欠のものと断定するが、私には安易なオプティミズムとしか思えない。一方、社会主義国には官僚統制に伴う弊害が多々生じている。ここでは、共産党の無神論が問題の要点であ

る。自利追求は人間の本質であるが、自己中心的に生きる限り人間は暗黒の状況を生きるしかない。パスカルの言葉にあるように、人間は自己の存在理由をみづから明らかになしえない存在である。そのような人間がどうして自利追求に走るのか。我々の人間性の回復は、「主」によって生かされる立場以外にはありえない。同時に、社会、経済的な諸問題は、政治による以外にはなく、たえず生徒に政治意識を喚起してきた。

現代社会に生きる人間の苦悩は、資本主義、社会主義いつれの体制下においても、このままでは解決しえない。人間は誰しも幸福を追求するものである。だが、真の幸福とは何であろうか。富や地位、あたたかな家庭、優れた友人を持つことなどは幸福であろう。しかし、寒夜、重い病気の子供のため医者の門を叩く人にとって、これらは何の力も持ちえない。自己の幸福のみを追う立場を否定せねば、真の幸福への道は開けないだろう。

### 〔読書と私〕

豊多摩高校 吉田道雄

私の読書遍歴を中心に話してみたい。本格的に読書をした初めての経験は、中学4年生の時、受験勉強の傍ら改造社版の現代日本文学全集を毎日読み始め、2年間で60巻全て読んだ事である。高師の英語科では様々な作家のものを読んだが、3年生の時ホーソンの「緋文字」を読み、ピューリタンの禁欲主義の持つ矛盾を学んだ。4年生の時は難解といわれるブラウニングの詩集に取組んだが、これはキリスト教に楽観的で、相反するキリスト教観を学んだ。2年生の時、太平洋戦争が始まり、文学の勉強に疑問を抱いた私は、大学では倫理学を専攻した。国家の絶対的強制力に疑問を抱き、国家論をテーマとした。そして、アウグスティヌスの「神の国」を研究した。そのため、ラテン語の勉強に励み、先生と一対一で教えを受けた。「神の国」には、国王は大きな舟で国民から盗む者であるという話や裁判は公正に行なわれることはありえないという言葉があり、国家の正義という事に疑問を抱いたものである。戦後大学に戻った私は、アウグスティヌスを根本的に研究する決心をし、前後20年に亘って研究に没頭した。そして、「アウグスティヌスの自由意志論」という論文にまとめ、発表した。国家論についていえば、戦後、国家道具説、国家関係説などが出てきたが、私は国家とはホッブズのいうリヴァイアサン、まさに怪物そのものであると思っている。

私は40歳の時、海外研修生としてイギリスに派遣され、半年の間41校を視察した。これを機とし、その後10年間イギリスの中等教育を研究した。イギリスの中等教育は、1945年のバトラー法に拠っているが、この法律は戦争中に研究され作成されたものである。日本の教育は総合点教育だが、イギリスは専門家養成に眼目があり、三科目を重点的に選択して勉強している。又、校長の社会的地位も高く、式辞などが新聞にのる。いろいろな点で日本と対照的である。管理職になった後も年間30冊位読んでいる。私の読書は、自分の一生だったなと思っている。

〔倫社の教師として〕

府中高校 佐藤 勇 夫

私は6つの高校で、32年間教師生活を送ってきている。それは、ちょうど秋川高校への赴任を境にして半ばとしうるのだが、これ以前は余り生徒を見る事ができなかった気がする。秋川高校へ行って一日中学生と接するようになって生徒が見えてきた。同時に、教師は生徒から見られており、その覚悟が必要であり、しかもある程度は見せていかねばならない事がわかってきた。

私は、授業で思想史を扱う場合、理論の展開の仕方よりもその思想の成立の仕方を中心に話していった。倫社の教師は、いう事とやる事との間に余り差異があつてはならないという事がいつも気にかかっていた。私が、自分にも生徒にも常に言いきかせていた事は、ものをいろいろ取り入れる事も重要だが、捨てる事の方が大事であるという事である。捨てるとなると、何を残し何を捨てるかの見識が問題となってくる。

現代は、「型」をこわすのに急な時代であると思う。だから、生徒には自分で生きる道を見つけねばならぬというのだが、生徒はなかなかそれを見出しえていない。そんな彼らにはきっかけを与える事が必要ではないか、我々が生きていく上で、守らねばならぬもの、気かけねばならぬものがあるので、それらを彼らに教えていかねばならないのではないか、その際学校が主導権をとってやっていく必要がある。

私の思い出に残っている言葉は、ある農民が「自分達は政府のいうことの逆々とやればいい」といった事である。又、一番つらい言葉であったのは、終戦後帰郷していた時、ガダルカナルで戦死した友人の母親に「大きくなりましたね」

といわれた事である。私も、又、佐々木、吉田両先生と同世代だなという感を深くした次第である。

(文責 東高校 小嶋 孝)

## 第1分科会「高校生の意識と現代社会」 研究経過報告

都立砧工業高校 三宅 幸夫

本年度の第1分科会は、今年度から始められた「現代社会」の授業に対応していくためには、われわれ教師側が現在の高校生の意識の実態を熟知しておく必要があるのではないかという観点からはじめられた。しかし、例会を重ねていくうちに、「現代社会」の授業が進められていく中で、実際の授業を通しての諸問題も論議の対象となっていった。そこで、表題にとらわれずに、各先生方から幅広い角度から問題提起をしてもらい、それをもとにして活発な研究活動をおこなった。特に、今年度から教師になられた新任の先生方から、積極的な発表が多く提出され、そういう点でもよい成果が得られたと思っている。また、第4回の例会の時は、吉澤正晶(大森)・木村正雄(大森東)の両先生にご出席いただいて、われわれ若い教師達に対して有意義なアドバイスをしていただいたことは、非常に貴重であった。

ともあれ、年6回にわたる例会を持つことができたことは、この分科会に参加された多くの先生方の熱心さが反映されているものと思う。以下、6回にわたる例会の概略を記していくことにする。

第1回 6月10日(木) 九段高校 報告者 関根・渡辺 出席者6名

この日は、はじめに関根先生が工業高校と普通高校との生では、社会的な問題意識において、工業高校の生徒の方が関心が強いという指摘があった。次に、渡辺先生から、青山高校の生徒の授業をはじめとする学校生活全般にわたる問題意識の紹介があった。最後に、国府田先生から、教科書とともにプリントを用いた学習及びレポートについての話があった。

第2回 7月8日(木) 豊島高校 報告者 国府田・三宅 出席者6名

この日は期末試験の最中でもあり、忙しいなかを集まっていた。前回に引き続いて国府田先生が部厚いレポートをもとに、発表授業について説明された。次に私が、工業高校でのクラス担任を通しての授業を含めた学校生活全般にわたる意識・行動について発表した。

第3回 9月9日(木) 青山高校 報告者 水谷・有馬 出席者8名

今回は新学期早々の例会であったが、都内唯一の全寮生高校である秋川高校を話題として取り上げてみた。まず、水谷先生が舎監としての苦労話をはじめとして全般にわたる寄宿舎を伴う学校での生徒の実情をお話しいただいた。次に、有馬先生が、秋川高校での生徒としての3年間を振り返りながら問題点を指摘していただいた。そして、若木先生からは、御子息が在学していた当時の印象を、母親の立場から話された。

第4回 10月21日(木) 都教育会館 報告者 吉澤・木村 出席者6名

この日は、「現代社会」への試みという観点を中心に、経験豊かな二人の先生方にお話しいただいた。まず吉澤先生から、「テーマ学習への切り込み口」として、生徒のスピーチや今日の話の中から生徒との接点を見い出しているというお話しがあった。次に木村先生から、「小ドリル、感想文ノート、図書館における新聞学習」など生徒が自主的に学習するあり方を示された。

第5回 12月9日(木) 都教育会館 報告者 渡辺 出席者12名

年の瀬も迫り、忙しい時期に開かれた合同分科会であったが、渡辺先生の「都高特活」でのレポートをもとに、現在の高校生の生徒会活動についての意識を話題とした。

第6回 2月17日(木) 都教育会館 報告者 葦名・幸田・遠山

合同分科会形式で行い、葦名先生のプリントや幸田先生の「変身」をテーマにした挿絵による授業展開、そして遠山先生の毎時間まわされている生徒のコミュニケーションノートについてのお話しがあった。出席者10名。

# 「現代社会の文化の課題」

都立大森東高校 木村正雄

## 1. テーマ 「現代社会の文化の課題」

### 2. ねらい

(1) このテーマを取り上げた理由 人間生活における文化を取り上げる場合、まず、世界と日本の文化の領域が考えられ、さらに、日本文化は伝統的なものと現代的なもの二つに分けることができる。

日本の伝統文化を学習させ、現代の文化の課題を考えさせることは、自ら考え、正しく判断できる能力を育成することに、即ち、自分の生活や地域に根ざした文化を材料に基づいて、社会や人間を考えさせる上に好材料になると考える。

生徒の実態からすれば、現代のマスコミ文化に流されている生徒が大部分であるが、伝統文化に興味・関心を示している生徒もいる。これらの生徒に伝統文化の学習をふまえて、現代文化の課題を考えさせることは社会のあり方や人間の生き方を考えさせる好材料と考える。

(2) 指導のねらい 現代社会の映像文化と活字文化について理解させ、特に映像文化についてわれわれはどう対処していったらよいかを考えさせる。

映像文化の理解を深める中で、放送法やNHKの予算など(政治経済的)や公共性(倫理的)、また、地域差など(地理的)も含むとともに、映像文化の問題について客観的に理解を深めさせ、生徒に調査や発表させることによって、また、グループでの話し合いを通して、自ら調べ、体験し、考える意欲を養うこと、主体的思考を深めさせることをねらいとする。

### 3. 学習内容と学習活動

学 習 内 容	学 習 活 動
① 現在のテレビの問題点 低俗的、一方的、受動的、視力の減退 になりやすい、非行と結びつきやすい、 宣伝的	① 生徒2名による研究発表 「チャンネル別殺人の場面の 回数」 「テレビ視聴時間と地域差と 年齢差と職業差」の図表を模造
② 映像文化の特質	

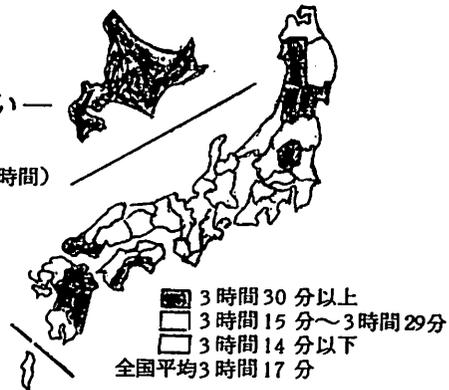
<p>感情的、感覚的、自発的思考力の喪失、 言語処理能力の欠乏</p> <p>情報の拡散効果と等質化、学習効果の 向上</p> <p>活字文化の特質</p> <p>表現力、想像力の豊富</p> <p>精神の集中と緊張が必要</p> <p>③ 映像文化の問題点</p> <p>放送法、国内番組基準、NHKの予算、 視聴時間の地域差など文化の公共性を中 心に。</p> <p>④ 映像文化の問題への対処</p> <p>「つくられた欲望」への自覚</p> <p>積極的な参加への試み</p> <p>内容を吟味、精選する態度</p> <p>伝統（地域）文化を守り、育てる意欲</p> <p>批判の精神と創造の努力</p>	<p>紙に書いて説明</p> <p>② 講義（問答形式）</p> <p>⑧ 資料「県別にみるマス・メ ディア接触時間の違い」 「NHK昭和56年度予算の 業務別内訳」 「放送法」「国内番組基準」 によって考えさせる。</p> <p>④ 資料「つくられた欲望」を読む。 グループ毎に「対処の方法」 を話し合い、その結果を模造 紙に書いて発表する。</p>
--	--

#### 4. 資料とその取扱い

##### — 県別による

##### マス・メディア接触時間の違い —

「テレビ」視聴時間  
(平日、県民全体、全員平均時間)

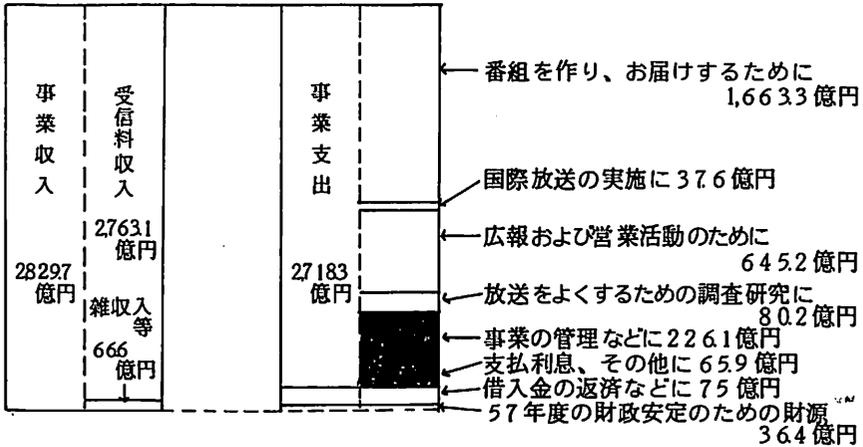


〔取扱い〕 視聴時間の長い都道府県はどこだろうか。

“ 短い ”

それは、なぜだろうか、娯楽（文化）との関係から考えさせる。

昭和 56 年度予算の業務別内訳



〔取り扱い〕 受信料の収入は、なぜ大切なのだろうか。  
 番組制作、電送費は全体の何割ぐらいだろうか。  
 予算案は、なぜ、国会の承認が必要なのだろうか。  
 これらの質問に答えさせ、問題点について話し合わせる。

〔資料〕 放送法（抜すい）

第 1 章 総則 （目的） この法律は、次に掲げる原則に従って、放送を公共の福祉に適合するように規律し、その健全なる発達を図ることを目的とする。  
 一、放送が国民に最大限に普及されて、その効用をもたらすことを保障すること。  
 二、放送の不偏不党、真実及び自律を保障することによって、放送による表現の自由を確保すること。  
 三、放送に携わる者の職責を明らかにすることによって、放送が健全な民主主義の発達に資するようにすること。（以下略）

日本放送協会国内番組基準（抜すい）

第 1 章 放送番組一般の基準 第 1 項 1. 人権を守り、人格を尊重する。  
 2. 個人や団体の名誉を傷つけたり、信用をそこうような放送はしない。 3. 職業を差別的に取り扱わない。 第 8 項 1. 人命を軽視したり、自殺を賛美したりしない。 2. 性に関する問題は、まじめに、品位を失わないように取り扱う。  
 第 9 項 2. 犯罪の経過や手段などについては、必要以上に詳細な描写をしない。  
 第 10 項 6. 放送の内容や表現については、受信者の生活時間との関係を十分

に考慮する。

〔取り扱い〕 これらの法や基準を理解させ、もし、守られていないと思うものがあつたら、それをもとに話し合わせ、方策について考えさせる。

〔資料〕 つくられた欲望（河原宏：「漂泊する現代人」）

ここで問題になるのは、本来有限な自然の欲望を、合成欲望は無限にまで延長し拡大しようと試みることである。……しかし、それゆえに合成された欲望に満足という終着点はなく、常に欲望が欲望をかきたてるフラストレーションが生みだされてくる。そのなかで人は、いったいほんとうに自分が欲しているものは何なのか、をさえ見失うことになるだろう。おそらく、現代人を捕えているのは、このような自分自身へのいらだちである。

〔取り扱い〕 私たちの日常の身のまわりについてこのような事例をできるだけ多くあげさせ、つくられた欲望についてじっくり考えさせる。

## 小論文テストについて

都立秋川高校 水谷 禎 憲

### I ねらい

学習した内容を自己の言葉で文章化し、再構成し直すことは決して簡単なことではない。むずかしい。自己の理解が曖昧であればある程それは決定的な事である。生徒に文章を書かせ内容の深度を深めさせることは、倫理社会のいわば常套手段である。レポート・作文・感想文・論文などである。小論文については今まで定期考査においては必ず課してきた。（10行～15行、30点～40点）

ところが今学年を担当するにあたり相当な不安があつた。従来は、小論文テストは、直前に簡単な示唆を与えるのみで実施していたが、寮の方の担当学年で、生徒達を一年間見ていた限り、彼らにいきなり課するのに相当な無理があろうかと考えた。学力的には今まで扱ってきた生徒達とそう違いはないのだが、活字離れ、テレビ世代とも言われているが、どうも質的に違いを感じさせた。果して論文形式の文章表現ができるだろうかの危惧である。内容を煉瓦を一つ一つ積み重

ねていくように説明していく作業、一定の主題のもとに論旨の一貫性を維持する、説明した内容からの論理的必然性をもった帰結として結論・意見を導き出す、などである。

昨今、大学入試や就職試験でも、小論文を課し、かなりの比重をもって位置づけてきている。単に文章が書けるかにはじまり、論理的論証能力、論理的抽象能力が求められている。それだけが直接の理由ではないが、論文の書き方も全く知らないとかでも困る。以下この一年間の拙い小論文テストの試みである。

## II 展 開

### a. 1回目

とにかく一回実施しそれから考える事にした。まず授業で扱った事柄からの出題をほのめかしておき、抜きうち的に実施した。A～Eの五段階で評価、Eを不合格とし合格まで再テストを繰り返した。結局五回再テストをする事になった。2クラスずつ異なる出題を実施、内容は次の通り。

- 狼少女について
- 境界人
- 第2の誕生

結果はやはり予想した通りで、全体的には「作文」であり「感想文」であった。実施の折にも多少の示唆はしたが、小論文などどう書いたらいいものかわからないというのが大方であった。

### b. 論文指導

生徒達の失敗例から、小論文のテキストを部分的にプリントし配布、授業のたびに解説をしていった。

#### ○文章上の留意点

- 句読点をつける。
- 一つの文章をなるべく短かくする。  
(途中でわけがわからぬ文章になったり、最初から最後まで読点で区切らぬ者がいた)
- 会話語や俗語は避ける
- 文体を統一し、語尾を「～である」にまとめる。

#### ○作文との相違

- テーマを客観的に論じる。
- 説明は一般論として書き、自己の意見は結論として最後にまとめる。  
(生徒は、「ぼくは……と思いました」式の作文調が多かった)
- 出題の意図を汲む。
- 「起・承・転・結」、「序論・本論・結論」の話し。

○その他に、日常からの読書や参考文献の紹介・論文の文章に触れよと意図から「○△新書」を読んでもみる事のすすめ

こちらの反省としても、抜きうち的にテストしても学習にならないので次回からは従来定期考査で出題していた様に、必ず問題を予告する事にした。

#### c. 2回目

説明文をしっかりと書くことを狙い、4題中1問選択とし実施した。尚、教科書、資料集の参考ページをそれぞれ示しておいた。(自由選択)

1. 工業化社会における《大量生産＝大量消費》による人間の労働の変化について説明せよ。
2. マス＝ゴミの機能と問題点について説明せよ。
3. 新中間層とは何か、その特長を説明せよ。
4. 官僚制(ビューロクラシー)とはどんな組織の形態か説明せよ。

以上を“現代社会”を説明する観点から述べる。

勉強すればできる問題であるが、いざ実際にテストとなるとよく理解していないと書けない。また文章力の不足はここでも感じさせられた。

#### d. 第1学期末考査

次の3問中1題を10行配点30点で出題した。(2番を実施)

1. 人間としての成長における社会とのかかわり方を示し、特に精神的な発達を通して述べよ。
2. 青年期における自我の確立と心理的離乳について説明し、青年期の問題を明らかにせよ。
3. ギリシャの神話と自然哲学の特長を示し、両者に共通する思想構造を明らかにせよ。

テスト範囲全体を3つに要約した出題で、3問とも真剣に学習すると範囲の約80%を学習することになる。(ヤマを張るなということ)

結果は概ね良好、ここでは成果を感じられた。ここから論文を点数化して採点することにし、次の観点から採点した。

- 文章がしっかり書けているか。
- 用語や事象を理解し、適切に使用しているか。
- 論旨が通っているか。
- 論題に適合しているか。
- 内容を理解しているか。
- 自分なりの意見をまとめているか、等を基準とした。

#### e. 第2学期

中間テストは行わず、ギリシャの学習のあと次の問題を予告し実施した。

「アテネの民主制に対する、プラトンもしくはソクラテスの批判の意味内容を示せ。

また、それを通して、今日の日本社会に生きるわれわれが参考にすべき点や問題点を明らかにせよ」(50点満点)

全体的には力作もあり、論文とは何だと言っていた頃からすると進歩を示してきた。しかし、おかしな傾向を示す生徒達が若干ではあるが出てきた。だいたいどうすれば点数がもらえるか、点数さえある程度もらえればよいという傾向である。論文をしっかり書くとか、内容をしっかり理解するという本来の目的からはずれる者の出現である。その主なもの

- 教科書や資料集を参考にまとめるのではなく、その或る部分を丸暗記してくる。
- 他人が作製した論文を参考にするのはなく、これも丸暗記してしまう。(もちろん不完全に覚えてしまう)
- 事象を脈絡もつけず、羅列的に列挙してしまう、等である。

まるきり間違っていないので、若干でも点数をあげざるを得ない。一方、生徒も点数がいかほどでもつけばよいといった状況である。

#### f. 第2学期末考査

例によって3問中1題を出題した。今度は、生徒の能力では難解である題を意図的に生徒に示す。大方の者は、問題文を理解すること自体むずかしかったようだ。(15行・40点配点)

1. ソクラテス・プラトン・アリストテレスのうち一名を選び、その思想の要点をギリシアの人間観がわかるように説明し、彼（選んだうちの一名）の思想の今日的意義を明らかにせよ。
2. ユダヤ教の特質の要点を、彼らの民族的苦難とそこからの救いの観点から説明し、今日の我々の生き方と対比せよ。
3. キリスト教という「アガペー」の内容及び、そのあらわれとしてのイエスの十字架を説明し、人間として為すべき義務としてどのようなことが要求されているか述べよ。

教科書・資料集・ノート（ノートが一番参考になる）から自分で読みとり、抜き取って再構成しなくてはならない出題とした。したがって、生徒達は、たとえば1番では「ギリシアの人間観」がわからないし、また「今日的意義」という言葉の意味さえもわからない者がいた。実施したのは、3番目であった。内容をしっかりとらえられていない者も多く、予想以上の水準を示した者もいたが、大方は勉強不足と不理解を示した。特に、授業では、史的イエスの話とキリスト教的イエスの話と両方を説明したり、一般的愛とアガペーと対比して説明したりしたため、両者を混乱し、一応勉強した形跡があっても論題と適合しなくなり大幅に減点となる者がいた。

第3学期には次の様な出題を予定している。

- シャカの説く実践（回諦八正道）の大意を示し今日の我々にとって参考になる点、問題点を示せ。
- 孔子の「仁」と「礼」について説明し、彼が戦国の世に何を求めていったのか述べよ。

など。

### Ⅲ まとめ

時間的に制約された中で採点するのであるからして、その労は意外と莫迦にならない。一人について少なくとも2～3回目を通し、コメントを加えたりもするので、体力と根気強さが要求される。こうしたテストを続けていると、何故一般にテストが客観テストという美名（？）のもとに、簡単に○や×で済むものが多くなっていったのがなんとなくわかる様な気がする。ほんの数日で採点し結果を求められるとすれば、一番確実で、かつ早く採点できる事が求められよう。し

かも正か誤という事でいえば、文句のつけようもない。しかし、求められているのはそうした知識の羅列ではないだろう。自ら思考し、論理的に論証していく事も求められて然るべきであろう。小論文だけでなく発表学習などもそうした努力を見ようとする一つの方法でもあろう。

では何故、そうしたものが求められるのだろうか。我々は、具体的な現実の世界に暮しているとしても、ただそれにとどまっているわけではないという事だ。些細な日常的会話にしても、言語と抽象的観念が合致するところで意味の通じる会話として成立しているのであって、まともな議論なりをすれば、自ずと抽象的な思考能力や論証力を駆使しているわけである。我々は、それらをどこかで学びかつ訓練してきているのである。もっと別な言い方をすると、抽象的な事はむずかしいから教えなくてもよい、現実<sup>じ</sup>は具体的な世界なのだから、具体的に教えればよいというのは、全くおかしいことと言えよう。我々が得た知識自体、現実から抽象された観念でしかないし、それをもって思考するのである。問題があるとすれば、現実との接点<sup>てん</sup>が得られないところにある。世に「空理空論」とか「砂上の楼閣」と言うもの<sup>もの</sup>のたぐいである。しかし、物事を「思考しよう」とすれば、抽象的観念によらず何を考えるのだろうか、それが空理空論と化さぬためには、要は常に自己の持っている観念に対し批判的に切りこんでいく作業を怠らぬことではないか。さて、現在高校生をはじめとして問題視していかねばならないのは、「考えない人間」、考える事を厭う者がいるという事である。

「今がよければそれでいいではないか」式に現実をそのまま容認するタイプである。当然強いて考えさせんとすれば拒絶する。生徒達にも、考えたくないとか、そんな大昔の人の事が何の役に立つのかと反撃してくる者もいる。しかし、考える事を学習しようと言っているのに対しこうした意見は生徒自身自己の怠慢であり、考える事たとえば先哲の思索の跡を辿るにしても、そこから逃げるための理屈である事もうすうす感じてもいるのである。わざとそう言う者もいる。

では我々はどうするべきなのか、抽象的なものを具体的に教えると言う事があるが、むしろこう言うべきではないのか、具体的なものを如何に抽象化するか。現実がこうだとすると、何故そうなのか、どうしてそうなのかつきつめていく作業、換言すれば、観念とは現実の具体からの捨象であるのだから、その作業をもう一度拾い直していくと云ってよいだろう。具体的なものをただ示しただけでは

何もならないわけで、それをどうまとめていくか、どう考えるかなのである。テレビを見ていると、具体的なものが示されてそしてテレビが勝手に論証し、結論づけてくれる。自分で考える必要がない。では授業はどうなのか、講義形式であっても、少くとも最終的なところとか、ヤマにあたる部分は生徒に委ねたい様にする。とって触れないわけにもいかない。そこで、再構成してみよ、考え直してみよ、また、その上で批判的に切り込んでいってもよからう、となろう。

即物的な事柄が求められ卑俗な事柄がもてはやされる時代だから、人間や社会への思索、まして先哲の深い思索を辿るなど苦痛でもあろう。だからこそ、そんな時代、考えない人間が増えた時代だからこそ「むずかしい」という声に挑戦するべきではないのか。考えることはむずかしい事であって、公式にあてはめるとパッと答えが出てきたり、押せば出てくる式に電卓の様に考えることができれば、などと生徒達は考えはじめている。私は生徒のむずかしいという声は、このような意味で大切だと思っている。

## 思想の原典に挑戦させて —— グループ学習の可能性を探る

都立国立高校 国府田 貫 一

自己形成への糧を与える狙いで設置された倫理・社会を私が学んだのは、今から15年前（S.43）である。この年、本研究会は「倫社指導内容の深化のために——原典資料をどのように理解するか」という年間主題を掲げているが、私が受けた授業の中核は、その「原典資料」のグループ研究・発表であった。苦しみながら友と協力し合って事を成し上げた後の『これこそ高校での勉強だ！』という感激は、大方薄れつつある高校時代の記憶の中で今も強く残っており、私が社会科教師への道を選ぶ動機の一つとなったグループ学習には、講義のみでは得られないものが満ちている。

本年度は、最後の倫理・社会を担当することになり、一つの節目をつけると同時に、「受験体制の中で受身的になった遊び世代」とでも呼べる今の生徒の主体

的学習の可能性を探るため、かつて私が洗礼を受けた「思想の原典」に挑戦させてみた。以下は、その実践の簡単な報告である。

(1) 準備・指導の概略

4月に年間計画④⑤を示し、夏休みと2学期にグループ研究・レポート提出・グループ発表を行うと伝える。1学期は講義中心で「現代と人間」を扱い、「青年期」の部分ではグループ学習の予行演習としてアンケート作りをさせた。座席中心のグループ作業を通して、グループの組み方やリーダーの選び方、或は作業の進め方等のグループ学習を巡る急所・問題点について考えさせたのである。その上で6月後半、思想家別に9グループを作らせた。その際、気心の知れた友人をではなくて取組みたい思想家を選ぶこと、更に意欲のある者を連絡係とすることを強調した。補足プリント①でだまかに指示した後、書物の選定や計画の作成・実行は各グループに一切任せて夏休みに入った。しかし、この時点で全連絡係を集め、原典の選定、計画の作成と実行、ノートしながらの読書や会合の行い方、レポートの書き方等について具体的な注意を与えておけば良かったと反省している。その種の作業に不慣れた生徒である以上、全生徒に徹底する為にはいくら周到であっても決して過ぎることは無いと痛感させられたからだ。

9月に入って、担当している2年生8クラス合計370名の所属グループ及び連絡係等の一覧表、レポート作成にあたっての注意(参考書や解説書の要約・転記ではなく自分のノートを基にしながら構成も考えて作成させる)、発表要領⑥を配布し、9月中旬にレポートを提出させた。2学期初めから文化祭の終了する9月下旬までは、西洋思想の源流、キリスト教から近代のデカルトまでを駆け足で講義するとともに、大作の混じったレポートに自転車操業で目を通す。生徒の発表は文化祭代休明けに始まり、中間考査(倫社は不実施)を挟んで12月初めまで約2ヶ月間行った。

各グループの連絡係は、発表の3日前までに補助プリントの原稿と発表カード(発表者名・発表内容・時間配布を記入)を準備して教師と打合せ、疑問点を解消すると同時に板書なども含めた発表手順を明らかにする。殆どの生徒は、放課後の教室や家庭で発表のリハーサルを行っており、教師が顔負けする程充実した発表もあった。時間の制約もあって、質疑応答を通じた理解の深化や、発表のまとめ・思想家間の関係説明等の事後指導は十分に出来ぬ事もあったが、発表は

盛況のうちに滞りなく終了した。生徒には締括りとして発表学習を通じての感想文を課し、2学期末考査終了後の12月20日に提出させた。

## (2) グループ学習の効果・収穫

これまで多くの先生によって報告されてきた事だが、生徒間の触発によって各生徒の学習意欲が高まった結果、教科・科目のワクをも越えて多くの波及効果があった。2学期の、特に文化祭後の学習体制づくりに役立った。具体的には、ゲームや雑談に興じがちな休み時間に質問のやりとりや発表の打合せをしたり、思想家に関係のある新語が流行ったり、発表に創作劇や紙芝居を導入したり、発表時間が不足しそうになると自習時間や他教科の先生に生徒がお願いして頂いてきた時間を充てて内容を深く発表したり、レポート書きや発表準備の合宿をしたりするグループがいくつも出た。

教科担任と生徒との交流も深まった。たとえば、心に問題を持って集団から遊離してしまった生徒と本音で話し合い、その立直りに細やかな力添えが出来たことや、有志16名を募って現在3学期に実施しているラッセルの輪説会を企画できたことも大きな収穫である。

最近、LHRの時間は殆どが行事の準備やリクリエーションや事務的連絡のみで終り、友人関係が深まるような真面目な討議を行なうことが少なくなったと聞く。次の、カント著『道徳形而上学原論』に取組んだあるグループのメンバーたちの感想からは、LHRを補うような効果がうかがえる。

A(女)「批判という文字にひかれてあっさり選んでしまったが、グループができ上がった時、このメンバーでちゃんとやれるかなあ、などとみんなて笑い合っていた。第1回の集まりの時、善意志について朝10時から3時まで5時間程話したが、読んでいる人がほとんどいなかったのでわからなかった。2回目の集まりでは、各自、自分の読んだところを他の人に説明し、質問をどんどんし合った。カントに触れたと感じた一番初めはこの時だったと思う。……2日位徹夜に近いものをして、どうにかレポートが書け、提出できた時は実際満足だった。よく書いたと思った。しかし、今読むと恥ずかしくてしょうがない。よくこんなものを先生に見せられたものだと本当に思う。まるでカントがわかっていないレポートだった。そんなものを書いてしまったことは悲しいし悔しいが、今はそれがわかったただけでも進歩であり、よかつ

たと思う。……なぜ、そのようにダメなレポートかがわかったかと言えば、やはり、発表があったからである……」

B(男)「……実際にやってみてカントは難しいと思った。実際に存在することの出来ないものを理想として突き進んで行く。どういう事が言いたいのか悩んで、同じカントを選んだ仲間と話し合い、理解を深めようとしたが、話しているカントの言葉の意味が理解できた時には思わず声をあげてしまうほど感動があった。あの感動を他のグループの人たちにわかってもらおう、そんなことを仲間の間で言いながら発表の準備をした……」

C(男)「……片手に青と赤の色鉛筆を持ちながら、重要な箇所に線を引いて何回も読み返すが、さっぱり意味がわからない。僕は今までに一冊の本を、あそこまで何回も読み返した経験はなかった。しまいには、本の方がこわれてページがとれだした……。その間に、グループでの会議も数回行なわれ、なかなか活発な意見が出た。僕は『プロレゴメナ』を読んでいたが、皆と共通した事が書いてあってそれに納得した時初めて、この倫社の課題はなかなか面白いものだなあと考えた。……レポート提出日を前にしてグループ6人でAさんの家に集まり、徹夜して、コーヒーをがぶがぶ飲んで眠い目をこすりながらがんばった……。しかし、本当にカント理解が深まったのは、発表の準備の時だった。他の人にわからせるようにと、よく考え、またみんなとの話し合いを持つうちに、だんだんカントの思想がわかってきた……。他のグループがカント批判などをすると、みんなやっきになってそれに反論している。今までになく、クラスの中で、こんな哲学の議論が行われているのを知ると、どこことなくおかしな気がする。そして、こんな議論がクラスの中で起こるようになっただけでも、やはりやってよかったと思う。また、カントグループの6人の中には、何か不思議な親密感のようなものが生まれ、忘れることのできない人々になったようである。これから先、高校生活を振り返った時、この苦勞と、そして、それを共にした5人のことがきつと思い出されるだろうと思う。」

(3) グループ学習の可能性は大

プラスの面ばかり連ねたが、勿論、反省すべき点も多い。グループ編成法・リーダー選出法・リーダー指導法・発表の仕方と聞き方・教師の関わり方・評価法・

無関心な生徒や消極的な生徒へのアプローチ、etc.、etc. 研究改良すべき点は山積みである。とは言え、上記のように、グループ学習は講義では得られぬ多くの長所を持っており、主体的学習に導く有効手段である。本報告は「思想の原典」に取り組んだ例であるが、他分野においても、生徒の実態に即した準備と指導によって可成の効果があげられよう。この実践を踏まえ、講義を補い、講義で補いながらグループ学習を「現代社会」や「倫理」に生かして行きたい。生徒の、主体的学習への渴望はいつの時代でも変わらない。知る喜びをともに分かち合えるグループ学習を通して、教科・科目のワクを越えた大きな視点から、人間形成の可能性を探究して行きたいと思う。

倫理・社会 年間学習展開

第1章 現代と人間 (教科書に準じる) <4~5月>  
(現代社会の問題点5つとりあげ、レポート用紙5枚以内にまとめ、57年5月29日に提出。)

第2章 人生の考えかたと生きかた

I. 思想入門——思想(とくに哲学)とはなにか、いかに学ぶか <6~7月>

- (1) 哲学の誕生 ---ギリシア思想
- (2) 宗教が生きた ---キリスト教思想

II. 近代思想の誕生 <9月>

- ① 近代思想の誕生 ---ルネサンスと宗教改革
- ② 全権論精説 --- 経世論と合理論

III. 近代思想についてのグループ学習とその発表 <6~12月>

- (1) 市民社会の思想 --- 近代的社会観(市民革命の思想的原動力)  
自然法思想—社会契約説—啓蒙思想 ①ロック、②ルソー
- (2) 功利主義 --- 公衆的幸福主義(現実の人間倫理思想)  
快樂主義: 利己心と利他心の調和 ③ベンサム、④ミル
- (3) 人権主義 --- 自律的人格=道德的自由(理想主義的倫理思想)  
善意思(実践理性)—道徳法則 ⑤カント
- (4) 弁証法の論理 --- 現実社会の歴史的発展の考え方  
近代合理主義 --->ドイツ観念論 ⑥ヘーゲル
- (5) 科学的社会主義 近代資本主義社会の矛盾の克服  
唯物史観…階級闘争---社会主義革命 ⑦マルクス
- (6) 実存主義 --- 非合理主義的人間観  
神の前にヒトリ立つ—孤独者・不安と絶望 ⑧キェルケゴール  
神は死んだ——権力の意志・罪人 ⑨ニーチェ

### グループ学習の要領

1. クラスを①-④の思想家に対応する9グループ(各5-6名)に分ける。
2. グループは連絡係を決め、協力して研究および発表をする。
3. 夏休み(7-8月)に研究活動をし、9月4日(土)にレポート・レジメ・討議録と提出する。(提出日は厳守のこと。連絡係は各人のレポート・レジメを集め、討議録と添えて提出する。レポートは枚数制限なし。)
4. グループ学習の途中経過を、連絡係は8月16日(月)までに報告する。
5. 発表は①-④の順で9月下旬から始め、1思想家あたり2時間とする。詳細は発表要領による(後日配布)。

<1-2月>

#### IV. 東洋と日本の思想について——先人のことばから学ぶ(冬休みの課題)

- (1) 東洋の思想   フツク   孔子   孟子   老子   莊子
- (2) 日本の思想   親鸞   蓮元   日蓮   伊藤仁斎   本居宣長  
福沢諭吉   内村鑑三   西田幾太郎

(例示した思想家から1人を選んで著書を読み、その中から印象深いことば(文章)を選んで解説するとともに所解をまとめる。400字原稿用紙5枚以内、58年1月17日提出。)

#### 第3章 現代の思想的状況と課題 (教科書に準じる) <2-3月>

(思想についての学習の1つを締めくくりとして、自己に課せられたものをまとめ、みる。レポート提出日は58年2月28日。)

倫理・社会 年間予定表

月	日	教師の準備	生徒の作業
4	上 中 下	基礎資料の配布 オリエンテーション、新新開始 (館)〈現代と人間〉	
5	上 中 下		②「現代社会の問題点」についてレポート提出
6	上 中 下	(館)〈思想入門〉 参考資料の配布 (定期)	近代思想についてのグループ学習のための グループ分けと連絡係決め、活動日程表作成
7	上 中 下	(定期考査)	国語を決める
8	上 中 下		グループ学習の途中経過報告(連絡係の用紙で)
9	上 中 下	発表者一覧・発表要領の配布② (館)〈近代思想への導き〉 (定期)	レポート・レジュメ・討議録の提出 発表カードの提出 グループ学習の発表開始
10	上 中 下	(定期考査)→実施せず	
11	上 中 下		
12	上 中 下	(定期考査)	グループ学習の発表終了
1	上 中 下		②「東洋の思想・日本の思想」についてレポート提出
2	上 中 下		②「現代の思想と自己の思想的課題」についてレポート提出
3	上 中 下	(定期考査)	

## 倫理社会 夏休みのグループ学習についての補足

### 1. 作業の進め方について

- ① 取組む原典の翻訳本を早く決めるように。
- ② 日程・作業内容に関する計画をしっかりとてる。試験休みの期間を有効に利用したい。特に連絡係の諸君には、リーディングを發揮して貰いたい。
- ③ 原典は、ノットととりながら、書きながら考え、そして読みすすめるように。そうすることによって理解も深まれば、レポート・発表に利用することもできます。
- ④ 各メンバーが、計画通り作業を進めないで、グループが集まっても完結しない会に終わってしまう。お互いに心して、厳しくすべきところは厳しくしながら、計画の完遂を目指して欲しい。

### 2. 提出物について

- ① 途中経過報告書は、8月16日(月)までに、各グループの連絡係が1通提出するように、学校まで持参し、職員室内に設けられているポストに入れるか、又は送付するかして下さい。
- ② レポートは、レジュメをつけて各人が連絡係経由で提出するように。連絡係は、それに討議録をつけて、9月6日(月)17時までに提出のこと。
- ③ レポートをまとめる時は、全体の構成を考え、見出しをつけ、引用をした場合にはその出典と箇所を示し、目次もつけるなどして体裁を整えるように。気になる人はこの機会に『レポート・論文の書き方』に関する本に目を通しておくのも良いでしょう。後、役に立つと思います。

cf. ・レポート : 事実の調査報告書のこと。  
(report)  
・レジュメ : 要約、摘要、梗概 (= summary). 及びそれを記したものを。  
(résumé)  
・論文 : 自分だけの新しい考え方の論証、報告とする文章。  
(essay, treatise, thesis)  
・感想 : 事実に対する意見、批判、評論、その他感じたことを述べたもの。  
(thoughts, impressions)

3. 恐らく、思想家の著作に真向から取組めるのは、高校時代でも今年だけでしよう。選んだ人の思索を体験し、更にそれを通して自己理解も深められれば、それが何よりの収穫でしょう。

## 1. 発表時間

- ① 原則として1グループ2時間以内とする。
- ② 功利主義のJ.ベンサムとJ.S.ミルについては、状況を見て合計3時間とすることもある。

## 2. 発表内容

各グループが創作・工夫を凝らし、発表を楽しみながら、同時にHRの全員に内容・要点を正確に伝えたい。そこで、次の諸点に留意したい。

- ① 導入として、その思想家・その著作を選んだ理由や発表の構成などを話す。
- ② 時代背景や、その思想家に大きな影響を与えた思想家についても触れる。
- ③ 思想のポイントを、引用などを使いながら説明する。
- ④ その思想のその時代での意義や後代への影響などにも言及する。
- ⑤ エピソードや感想や問題点の指摘なども発表する。
- ⑥ 発表後、質疑応答の時間を設け、補足説明をする。

## 3. 事前準備

### ① 補助プリントの作成

教師に2部、HRの生徒に各1部配布する。1時間にワラ半紙で1~2枚の内容が発表できるが、2枚はかなりのスピードでないとこなせない。ガリを切る時は筆圧を強めに書くように。原紙・ガリ板等は社会科準備室で借りること。レジュメをもとにして見やすいものを作ろう。

### ② 発表カードの提出

連絡係は発表順・発表項目・発表時間などを記入し、発表の前までに、補助プリントの原稿を添えて提出し、点検を受ける。

### ③ 板書・机の配置など

必要事項は授業の前の休みを利用して板書しておく。机の配置を変える場合も、事前に済ませておくこと。図解などを記した模造紙の掲示なども同様。OHPを利用する場合は、用具・教室を早目に手配すること。

#### 4. 発表者の留意点

- ① 普段より大きい声で、前を向いて発表すること。
- ② レポート等を見ながら読みあげるのは不可。必ず自分の言葉で発表する。
- ③ 十分に打合せ、発表練習を行って予定時間内に終わるように心掛けること。

#### 5. 発表を聞く生徒の留意点

- ① 配布されたプリントにしっかり目を通し、積極的に学習に参加すること。
- ② 私語や内職などは決してしないこと。発表者を励ますような雰囲気をつくるように。
- ③ 各人がメモをとり、よい質問を出し、問題点を明確にすること。
- ④ 質疑応答の時間に出した質問や、時間内にやりとりできなかった質問は、グループごとに質問カードに記入して、連絡係が発表したグループの連絡係に渡すこと。質問者は、自分自身も疑問点について調べることを。

#### 6. 発表終了後の作業

- ① 質問カードに示された疑問点について、誠意をもって調べ、回答のプリントを作成する。原稿は教師に見せてから印刷すること。
- ② 発表後、各自が感想文を書く。400字詰原稿用紙を用い、字数制限は無し。題・クラス・番号・氏名を忘れずに記入する。連絡係は御苦勞ながら、最後の仕事として、グループの感想文をまとめて提出するように。締切は、最終発表終了後1週間以内とします。

#### 7. 評価

- ① 2学期の中間テストは行わず、レポートと発表で評価する。定期考査と同等あるいはそれ以上のウエイトを置く予定なので、頑張るように。
- ② 感想文も評価に加える予定である。又、2学期末考査は思想入門からニ・チエまでの範囲で実施する。その際、各人が取組んだ書物は、人間の生き方について何を根本的な問題とし、それとどのような考え方の立場から解決しようとしているかについて、所感を述べてもらうつもりである。十分に準備しておいて欲しい。

以上

## 第二分科会「現代社会」の内容構成 と教材化

第二分科会は上記研究主題を中心に、20名の先生方の参加の下に発足した。今年度の分科会の特徴は研究部の先生方の配慮を頂いて、他分科会との合同分科会を適宜配置した点である。そのためもあって5回の会合を行うことができ、たくさんの実践報告に触れることができた。

### 経過報告

① 顔合せ 5月20日 都倫研総会の最後に分科会ごとの集まりがもたれ、自己紹介、研究会の進め方、日程等が話し合われた。「現代社会」を担当しておられる先生方は少なく、多くの先生方は倫社の最後の仕上げに打込んでおられるようであった。

② 6月10日 この日は第一分科会と共催で九段高校で行われた。出席者は志村(北野)、葦名(豊島)、蕪木(九段)、原田(大泉学園)の各先生に工藤の5名であった。報告は工藤が、戦後社会科における「現代社会」の位置付けとこれに関する様々の論議について行った。「現代社会」の位置付けとしては(1)高校教育の普及といった社会状況から、(2)現代日本の経済・社会の当面する課題の自覚、(3)教育思潮の流れの中に位置付けるものの3つに分けられることを指摘した。その後、各自の「現代社会」像や方法論の必要性について討議された。部会出席者がやや少なかったのが残念であった。

③ 7月10日 暑い中、豊島高校で、飯岡(京橋)、志村、小林(大崎)、小嶋(東)、杉本(江東工)の各先生方が出席して行われた。飯岡先生は、“妾の半生”などを材料にした「倫社における女性学」の実践事例を報告された。先生の女性問題に関する幅広い問題意識に支えられて、討論形式で授業が行われている様子には、一同感心させられました。小嶋先生はワイマール民主主義の崩壊とナチズムの台頭の問題を現代青年のおかれた状況とからめて、詳しい資料を用いて報告された。また志村先生には、都研で発表された「現代社会」の展開例についてご報告を頂きました。

④ 9月30日 教育会館の和室で落ち着いた雰囲気の中で会がもたれた。出席者は飯岡、杉本、葦名、原田、齊藤(松原)、蕪木、小嶋、幸田(玉川聖学院)

の各先生方で、内容も充実したものとなった。まず杉本先生は「柳田民俗学と社会科」について報告された。柳田社会科は学習者の位置する場や現実から自己認識をはかることと、社会を動的にとらえる「史心」の育成の二点を柱にして構想されており、これらの点は「現代社会」を考える上でも重要な視点であることが指摘された。葦名先生は、身近な事例を材料にした経済・政治学習の指導事例を発表され、先生のエネルギーなとり組みにはいつもながら大いに刺激されました。幸田先生は実際作業を進めておられる発表学習の内容について、生徒の作成した資料を示されたが、身近な「モノ」や「コト」の分析から「現代社会」のあり方に迫ろうとするもので、参考にさせられることの多いご報告でした。

⑤ 11月14日 再度九段高校をお借りして、辻(田無工)、飯岡、斉藤、蕪木、志村、杉本、幸田、増淵(片倉)の各先生が出席。斉藤先生は資料を縦横に駆使し工夫をこらした実践例を示された。必ず設問を付した資料文、生徒の感想文を製本し図書室に残すという方法、思想家の顔写真の呈示によるイメージ喚起などの工夫は勉強させられる所が多い報告でした。幸田先生は前回に引き続き発表学習のその後の経過について、飯岡先生からは「倫社における女性学」の続きをご発表頂きました。

⑥ 12月9日 57年最後の締めくくりも兼ねて、三分科会合同で教育会館に参集しました。勝田(本所)、水谷(秋川)、三宅(砧工業)、小林、小嶋、幸田、蛭田(白鷗)、渡辺(青山)、増淵、和田(四谷商)、辻、溝口の各先生が出席。渡辺先生は都高特活での研究発表をもとに、高校生の自治意識について発表された。和田先生はマイコンを「現代社会」の人口予測などに応用した実践例を報告された。一人一人に器械を操作させるので、生徒が生き生きしながら取り組むとの指摘であった。また蛭田先生は「現代社会」の授業に関する生徒へのアンケートの結果を示された。その中で生徒が「勉強方法がわからない」原因として「抽象度が高い」「言葉の意味がむずかしい」「事項のつながりがわかりにくい」などがあげられており、また社会を通時的に見ることには慣れているが共時的に分析することは不得手なのではないかという指摘があった。「現代社会」の種々の問題、課題について9時近くまで熱心に討議が行われた。会終了後は、恒例になった懇親会を行い交流を深めた。

## 反省点

1年間の分科会活動を通じて不十分であった点、気の付いた点についていくつかあげてみます。

(1) 分科会のテーマについて具体的に答える形での研究成果があげられなかったこと。とくに「内容構成」については正面から、とり組むことができなかった。

(2) 世話人の準備不足もあって、会のもち方、運営の方向や目的について明確な方向性を出すことができず、各報告者の実践例の報告で終始した。

(3) 先生方も校務などで多忙のため、継続的な研究活動ができにくくどうしても一回一回の会合で完結してしまいがちであったこと。

ともあれ今年度は実質5回の会合が成立し、多数の先生方の参加の下、予期した以上のご報告を頂いたことなどを考えると、それなりに充実した活動ができたのではないかと思います。遠方より何度も足を運んで下さった先生方、貴重なご報告を頂いた先生方も心より御礼申し上げます。1年間ありがとうございました。

(三鷹 工藤文三記)

## 倫社の「現代社会」の展開例

都立城北高校 沼田 俊一

### 1. 「現代社会」で何を考えさせるか

社会科の必須科目が「現代社会」のみになった今、倫社の時と違って、1年生に授業しようとするとき、もっとも基本的な内容を、より易しく指導したい、また指導しなければならないと誰しも願うと思う。

ところで、教科書を見ると、中学3年で習った公民の内容とかなりの部分がダブっている。4月当初、中学を卒業したばかりの生徒にとって、高校の社会科が新鮮な魅力ある教科となるために、現在の教科書が平均的にとっている順序と内容で果して十分であろうか。恐らく「また同じようなことをやるのか」という失望から、教科に対する期待感が非常に薄れてしまうであろう。

そこで、私は、本年度は、少くとも、生徒にとって、魅力のある教科としてス

スタートしたかった。そのために、教科書の順序に従わず、中学でまだ恐らく一度も習っていなかったであろうと思われる内容を抽出して学習していく方法をとってみることにした。

また、3年になれば、政経は全員に履習させる予定になっている本校の教育課程からすれば、「現代社会」の政経分野の内容については、それほど深入りせずに、教科書の記述を読めばわかる程度の問題プリントを作って、授業中に、その答え合わせをするだけでも、要点はすますことができると考えた。事実、極論を言えば、政経分野では、考えさせるよりも、理解させ、記憶させる事項の方が多いと思われる。そうだとすれば、「現代社会」の中で何を教えるのか。それは主として、人間を考えさせる観点を失わず、倫社に近い価値的な考え方を示しながら、現代の社会の中で、どう生きるのがよいのかを、できるだけ深く考えさせることが、「現代社会」という教科に与えられた一つの使命ではないかと考える。政経的問題も、結局は人間が作り上げた文化の中から生れてきた問題であり、社会がいかに巨大なメカニズムで動いていようと、所詮、それを動かしているのは人間であって見れば、やはり人間を観察させるという倫理的な観点を強く出した授業こそ「現代社会」では必要欠くべからざるものと思うのである。

中3を卒業したばかりの生徒には、それはむずかしいということも十分考えられる。しかし、それは方法の問題だと思う。少くとも、新鮮さと社会科に対する魅力は失わない、それだけでなく、人間の基本的な問題を考えさせておくことは、以後、2、3年生になった時、他の選択教科を学ぶ時の基本的な姿勢を、更に長い人生に対する一つの洞察の観点と広い視野を与えることになる。そういう長期的展望に立った「現代社会」の指導こそなされなければならないと思う。たしかに、当面の共通一次のための内容整理も必要かもしれないが、それに終始するなら新しい教科としての意味は死んでしまう。結局、入試に役立つ内容を指導するのではなくて、人生に役立つ内容を考えさせたいのである。よく考えさせれば、結局は入試にも役立つであろう。応用力は、思考力によって伸びるからであり、ドリルによって伸びるものではない。

## 2. 年間計画と実施状況の概略

《以下のⅠ、Ⅱ、Ⅲは、それぞれ、1学期、2学期、3学期をさす。》

### Ⅰ-1 青年期の問題(4時間)

同時に「城北高校に入学して」という作文を書かせ、そのよいものを毎時間1～2編ずつプリントして読ませる。倫社の時より簡単に扱った。生徒の不安を取除き、自信と希望を持たせるように留意した。

#### I-2 自然の中の人間(7時間)

教科書(帝国書院)も利用しながら大自然と人間との深い関わりを考えさせた。資源開発や環境破壊、公害問題、エネルギー開発の問題まで触れた。身近かな問題として「学校のなかの公害」というテーマで、新聞形式でまとめさせた。校内が汚なく、投げすてるゴミが多く、それを反省させ、自分たちの問題として対策を考えさせたかったからである。新聞の内容も、まとめ方もまだ稚拙だが、やらせればできるという自信をもった。

#### I-3 文化の中の人間(14時間)

教科書が地理的に詳細にかかれていたので、意外に時間をとってしまった。途中、地理の学習のようになってしまった。日本の文化のところでも深入りしてしまった。しかし教えていて楽しかった。話し声が多い。

#### I-4 人間としての生き方、世界観、人生観(16時間)

これはちょうど倫社の主な思想のところに対応するが、不可知論、プラグマチズム、ニヒリズム、存在論、唯物論などを説明したが、やはりむずかしかったようだ。近くの北区立北中学校の社会科教師と交換授業参観を思いつき、「弁証法」のところを観てもらい、私は、北中の3年生の公民授業「労働運動」を見せてもらった。中学でもかなり詳しくやっており、やはり、中学とは一味違う授業をやった方がよいと再認識した。

#### II-1 人間とは何か(7時間)

資料集「人間を考える」(育英倫研)を使って展開。人間の特徴、人権の意味、身体と精神の関係、自由の問題、自殺の是非、人間の満足と不満足のもたらすもの、死ぬことなどについて考えさせた。人間は感情の動物か、それとも理性的動物かではいろいろな考え方が出た。とくに人間の行動については、フロイトやアドラーやフランクルの考え方も紹介した。

#### II-2 美の追求——芸術と人間(3時間)

ちょうど、9月末の文化祭とぶつかった。ともすれば断片的になったが、自然美、芸術美、精神美、美的体験、美の創造、技術美、芸術の起源などを考察。生

徒は割に関心が高かった。

### Ⅱ-3 真理の追求——哲学・科学と人間（9時間）

考える過程、わかるということ、客観と主観、真理と真実、悟り、科学的法則、哲学と科学の違い、知識と知恵の違いなどを学習した。哲学者としては、デカルトとパスカル、科学者としてベーコン、ガリレイをあげた。

生徒にとってはかなりむずかしい内容と思われたが、全般的に静かによく私の話をきくようになった。

### Ⅱ-4 善の追求——道徳と人間（7時間）

他人に迷惑さえかけなければ何をしてもよいという質問から入った。また、道徳的な行為というのはどんな行為かについては、ノートに書かせ黒板に4人の生徒に答を書かせて皆に考えさせた。完全犯罪でつかまらなければ得をしたと思わないか、心の中でどんな悪いことを考えてもいいかと考えさせた。良心、ザインとゾレン、善悪の基準、価値の序列、道徳的義務、人間としてどこまでやればいいのか、善意と悪意、罪、幸福などについて学習した。小中学校で行ってきた「道徳の時間」の理論づけは、高校のどこかでやらねばならないが、「現代社会」が必修であることから、最もやるのにふさわしい教科であると思う。人間として必須である。

### Ⅱ-5 聖の研究——宗教と人間（12時間）

とくに世界三大宗教に通ずることは、国際人として生きる必要条件である。宗教とは何かを布教的態度でなく理解させるのはむずかしいが、心と心を通じ合えるようにするために、心の深奥で営まれる宗教的心情についてなるべく深く考えさせ知らせることが、最近では特に必要と考える。無神論と有神論、宗教の根拠、神道の世界、仏教の世界、キリスト教の世界、イスラム教の世界と学習し、グループ研究課題として、カトリック、プロテスタント、原始仏教、イスラム教、浄土宗、日蓮宗、曹洞宗のどれかを調べ、それを1学期にやったように新聞の形式でまとめて、3学期に発表させることにした。グループ学習をさせてみて、城北高校でもかなりやるものだという自信を得た。（別掲曹洞宗の開祖・道元を参照）

### Ⅱ-6 人間関係（4時間）

1対1の人間関係について学習させた。人間関係はどのように発達するか、さ

まざまな人間関係のあり方、人間関係にありうる問題、人間関係をうまく保つためにはどうしたらいいか、日本人の人間関係の特色、正しい人間関係とはどういう関係か、など、具体的な事例をあげて考えさせた。

### Ⅲ-1 集団の中の人間関係(6時間)

集団の条件、ゲマインシャフトとゲゼルシャフト、集団の中の規則、個人主義の集団、個人よりも社会を優先させる考え(全体主義)、社会福祉と奉仕活動の違い、指導者の権限の否定(アナーキズム)、国家の指導権、教科書検定の制度、法やきまりの正当性、現代の巨大な社会集団の中でどう生きていきたいか、みうち意識の功罪、独裁者のこわさなどについて学んだ。1月18日現在はこちらまでである。このあと次の指導を予定している。

### Ⅲ-2 家庭・学校と人間(4時間)

### Ⅲ-3 研究課題の発表(5時間)

これはⅡ-5聖の研究でまとめたもののグループ発表で、1グループが25分~30分で質問をふくめて終るように指示した。冬休みに一度提出させたものに目を通して、直すべきところ、更に調べるところに指示を与えた。

### Ⅲ-4 地域社会と人間(3時間)

### Ⅲ-5 国家・国際社会と人間(4時間)

結局、今年度はこれで終わってしまう。従って政経の問題は、時折のトピックスに関わって、毎時間の導入で少し話をするほか、前述のように、教科書中心で簡単な問題を作り、それをやらせて答え合わせをするに止まった。たしかに上記のⅢ-5が終ったところから、まさに政経的内容が始まるわけなのだが、1年間をふりかえって、私の「倫社の現代社会」は、中学公民と違った味があったであろうし、覚えるよりも考えさせることに力点があったように思う。週2時間の倫社の時よりも週4時間の現代社会の方が、生徒をよりよく理解でき、ゆっくり考えさせることができ何よりもよかったと思っている。



天童山を去るにあたって、師の如浄は道元に「故国に帰らば、教化活動を行ない、衆生のための人生を生きよ。そのためには国王や大臣に接近してはならない。深山幽谷に住して一人でも半人でもよいから、真の求道者を育て、わが宗派を断絶させるようなことがあってはならない」とさとした。如浄のこの教訓は、その後の道元の歩んできた道に決定的ともいえる影響を与えた。

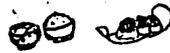
幕朝後、道元は建仁寺に戻ったが、入宋前とは違って建仁寺の宗風は弱体化していた。「曲座はいりやが、名ばかりである。建仁寺の曲座たちは自分たちの職務が仏身であることを知らない。これをどのようにして直さねばならないか」と語った（『曲座教訓』）。

と道元はなげいていた。31歳のころ、道元は建仁寺を出て、京の深草の空持院に入り、弟子の房成と著作活動に従い、34歳になって再び深草の興隆宮林寺に居を移し、修行生活のための規則をつくった。道元が目ざしたのは座禪の正眼だ。座禪することが、そのまま悟りであるという立場にたつ道元は末法観を否定した。末法の世には教えの力が残り、戒を保つ者もなく、修行者もいなくなり、修行のあかしが得られなくなる時代を意味するから、座禪に絶対的な価値を見出し、悟りに至れるという道元の考えとは衝突することとなる。したがって南部北嶺の旧仏教もとより、末法観にたつ鎌倉新仏教の念仏の教えに對しても、道元はきびしく批判し、念仏や真經は「口を動かして声を出しているだけならば、春の田を刀で耕くようなものであり、益がない」と述べた。もちろん口誦祈禱や造り起すも批判の対象としたのはいうまでもない。

仏教界の現状をきびしく批判する道元の存在は、仏教界に初めとすることとなり、道元のもとにつづつ信仰グループが出現していった。そのかわりにわいさから逃れるためもあって、寛元元年（1243）、44歳になった道元は山深し越前（砂井郡）志比庄に永平寺を建てて隠棲した。永平寺で道元は坐禪正法のめいぶ、代表作となった『正法眼蔵』の完成に取組んだ。

深草時代の道元は、在家仏教・女人戒を説いて民衆救済の道をつたえたが、永平寺に引きこもってからは、出家至上主義者となり、在家仏教・女人戒を否定し、般若正法の仏法の実践を強調した。インド仏教以来、女性に成道の聲言になるという考え方があり、罪深い女性に戒を授けようといわれてきた。寛治元年（1247）、道元は北条時頼の招きを受けて鎌倉にくだり、時頼に普薩戒を授けた。深く道元を慕う時頼は、再び寺院を新たに建立し、鎌倉の地にこそまるといって道元に頼んだが、俗権に近づくとを嫌う道元は永平寺に去った。これを以て時頼は土地を永平寺に寄進しようとした。だが使者にたつ道元の弟子の僧が袈裟としていらいしたのを道元は立腹し、弟子を道加するとともにその弟子の座禪の弊をいらいと、床下の土をアタも掘って捨てることした。

寛元二年（1250）、朝臣は道元に紫の衣を贈ったが、道元は受けとるつもりがなかった。それでもあきらめずに使者を寄こして、紫の衣を贈つてくるので、道元は受けとった。だが死ぬまで榮譽の象徴ともいえる紫の衣を身につけようとしなかった。道元は純潔孤高の道を見せつけた。俗権に取組むことを臨濟禪を発展させるようとした東西とは全く対照的な生きざまである。建長5年（1253）、道元は47歳の生涯を終えた。



# 「現社」授業にひきつくこと

都立松原高校 齊藤 規

## 1. はじめに

これまで「倫理社会」が扱う領域は、現代社会の具体的な現実、たとえば公害、差別、職場、教育、家族など及び人生観、世界観などの問題だと思ってきた。したがって、この科目での学習が、小中学校の「道徳」の時間に対応したかたちで何かの徳目などを注入しようとは考えていなかった。そのことは今でも変わりなく思いつづけているのだが、他の科目以上にタテマエのみを話していたのでは生徒の興味・関心をひきだすことが困難な「倫社」の性格上、より考える糸口、あるいは琴線にふれるような内容をつくりだしていくことの必要を痛感している。というのは、今の政府は「節約」「耐乏」「質素」などと声高に叫ぶであろうし、そのとき生徒一人一人が、どう考え、行動するかということが必ず問われてくると思うからである。カトリックには体操に対応した「聖操」という考え方があるという。心ないし魂を鍛えるということは、広い意味において重要ではないかと思う。心を鍛えることは「倫社」のみが行うことではないことは勿論だが、その扱う領域から重要な一翼になうことが期待されているのだと思う。ともあれ、領域の一つ一つに生徒が関心をもってくれることを願いつつ、二三の試みを研究例会で報告したので、ご意見いただければ幸いである。

## 2. レポートは製本する

一学期の授業の中心は「現代社会の特質」の解説であるが、この三年ほど産業革命の経過をやや詳しく話すことにしている。グラスゴウ駅前広場に立つワット像やグラスゴウ大学資料室の展示、ロンドンの科学博物館に展示される珍しい発明・発見など。「世界の博物館」シリーズ（講談社）も良い企画であるが、実物そのものの迫力にはかなわない。上野の科学博物館2階には蛾が産業革命時代、どのように自らを環境に適応させていったかをおもしろく示している。東京には「倫社」を学ぶ素材が数多くある。

授業で近代日本の思想を扱ったとき、銅像や紙幣の肖像から、そこに銅像をたてた人の、その肖像を選んだ政府の思想を、そしてイデオロギー性を学習させたことがある（昭和54年度、学図研究事業報告）。このように、実際に歩き、自

分の眼でみたものは印象が強い。従って、「倫社」の課題は読書感想文のみではなくフィールドワークをもさせている。「公害一町下の地盤沈下、多摩川の汚染」「平和一夢の島第五福竜丸保存館、埼玉丸木美術館」学校付近の実篤、芦花の記念館を手ごろな調査地としてあげている。さてそのさい、評価や保存が悩みの種となるが、レポートを製本し次年度にも閲覧可能にしておく、生徒のとりくみをはげます上で有効ではないかと思う。以前は教師自ら製本していたが体裁が余り良く出来ず失敗をした。立派に見栄えよく仕上げるのがこの場合大切である。以後、製本屋に依頼している。レポート製本のさい注意することは二つで、生徒には、用紙統一を厳守させる（B5原稿用箋が良い。袋綴じ不要、大部にならない）、製本屋には、背文字を格調たかく入れるよう注文する。以上のことを銘記したい。それでも一冊二千円程度であり、書棚に、生徒のレポートを寝たままにさせない活用法として、今後も有効と思っている。

### 3. 六ツ切写真に引き伸ばす

視聴覚器材を利用することは準備の手間ひまを考えるとなかなか面倒である。それでもカセットテープを利用し、聴かせ、考えさせる授業は比較的手軽にできる。（都倫研紀要18集でG出版のものが紹介されている）。私も「現代の労働を扱うとき葉山嘉樹の「セメント樽の中の手紙」（NHKラジオから録音）の朗読をきかせ生徒の感想をもとめたが、琴線にふれるものがあつたようだ。

8ミリ、16ミリ、スライド、VTRなど視覚教材も多様だが、ひとまず教科書のさし絵、図を視覚教材の基本と考えて時間の許すかぎり解説を加えることにしている。レオナルド・ダ・ビンチ、ミケランジェロ、ミレー等の絵画とともに『新オルガノン』のとびら絵、「ゲルニカ」や興福寺の阿修羅像など、そのさし絵の説明のみで一時間をすごしてしまうことが多くある。生徒にも興味・関心をもって授業の本論に入らせることが出来る。ひまにまかせた読書のときに教科書にのらない楽しい絵や写真にであうことがある。思わずこれを使って授業してみたいという欲望がわき、ついカメラをひっぱりだして接写してしまう。

接写した写真資料を六ツ切（アサヒグラフの大きさ）にしたらどうだろうか。フィルムは写真部に依頼して焼きつけ、出来あがったらクリア・ホルダーに整理しておくが良い。授業で必要なとき引き出し、マグネット一つポケットに入れ教室に入れば手軽に視覚にうったえる授業になる。このようにして思想家の肖像、

家族とのスナップ（福沢諭吉の生涯やK. マルクスの生涯など）を引き伸ばして整理しておく。その他に「95行聖書の一頁分」、「北京のホー・チ・ミン」、「ピラミッドを背景にした遣欧使節団、原爆実験禁止署名をする原節子など、やや趣味的なものを含めてホルダーに入れておくと大変便利につかえるだろう。K旅行社のカレンダーの仏像写真を利用した授業実践が紹介されたことがある（月刊歴史教育第5号）。その実践は生徒と写真との対話によって授業がつけられていくのだが、現代社会の授業の中でこの方法を大いに活かしたいと思っている。

### 3. まとめ

研究会ではこれに加えて「新聞をつくる」ことの拙い報告をしておいた。魅力をつくることは現代のマスコミから大いに学ばねばならないだろう。新聞は否でも応でも活字を私達の眼に注ぎ込む。その新聞紙面のつくり方を真似て思想と思想家を解説できないだろうか。ソクラテスをとりあげたのだが、まだまだ改善すべき余地があり、それも機会があればまとめていきたいと思っている。

## 倫社グループ研究・発表学習の実践例

都立九段高校 蕪木 潔

今年度、倫社の授業で、二つのグループ研究・発表、「原典学習サルトル著『実存主義とは何か』（討論・発表）」と「思想家別グループ発表」とを行わせた。ここにその概要を報告したい。諸先生方のご高評、ご助言を頂ければ幸いです。尚、今年度の授業は結果的に昨年度とほぼ同様のものとなってしまう、従って以下の内容も、昨年度の第二分科会で報告したものとほぼ同様である。

### I はじめに

「倫理・社会」も遂に最後になってしまった。カリキュラム変更に対する私見を今更ここで述べるつもりはないが、自分自身高校時代に倫社の授業を受け、しかもそれがその後の進路決定の一つのきっかけとなり、そして教師になるというより倫社の教師になるという意識で教職に就いた者として、兎に角寂しい限りだ。その高校時代の倫社で一番印象に残っているのは思想家別の発表であり、またそ

の頃読んだ(読まされた?)本からも少なからざる影響を受けた。先生には申し訳ないが、講義の方の内容はすっかり忘れてしまった。発表では、私は初めマルクスを希望したが籤で負け、結局第二希望のニーチェだった。確か、先生は「やれ」の一言で、後は自分達で自主的に進めるのだった。その時買った本が今も教冊本棚に並んでおり、手に取ると、友人宅に集まって相談したりした当時のことが懐しく思い出される。その様な訳で、教職に就いた当初から、発表の様な生徒主体の授業をやりたいと思っていたが、本格的に行うのは今年度で三度目である。

## II 年間計画における位置づけとねらい

### ○年間計画

#### 1 学期

- オリエンテーション的内容
- 青年と人間形成(パーソナリティ、青年期)
- 実存主義、キェルケゴール
- 原典学習サルトル著『実存主義とは何か』(討論・発表)
- 人間と社会

#### 2~3 学期

- 現代社会の特質
  - 仏教とキリスト教
  - 思想家別発表(ソクラテス、デカルト、ルソー、カント、親鸞、本居宣長、デューイ)
  - 社会主義
  - 生き甲斐について
- } (予定)

※ 旧課程では、倫社は2年で履習。(選択倫社はない。)全8クラスを私が担当。

### ○年間計画に対す基本的考え方

倫社の目標は、先ず現在の自己と、自己が生きる状況としての社会の現状とを確認し、更に、多様な思想を学んで、最終的には、自己の生き方や社会のあり方に対する自分なりのしっかりした考え方(思想)を形成する(それもできるなら共同作業の中で)ことにあると思う。思想を学ぶのは、決して単に教養を高める(知識量を増やす)のが目的ではなく、あくまで自分の考え方を形成していく手

懸りを得る為であろう。その意味では、教科書に捕われない思い切った年間計画、授業展開と、生徒主体の授業形態がふさわしいかと思う。

しかし一方で、本校では大学受験のことも考慮せざるを得ないのが現実である。半数以上の者が共通一次を受け、しかもそのうち多数が倫社で受験する。また、ほったらかしにしておいて、受験準備は全面的に生徒自身にやらせる、という程の実力はないのが実態である。つまり、ある程度教科書に即しつつ、しかもなるべく広くやらねばならないという無言の要請がある。その点だけからなら、講義形式の方が妥当かもしれない。

先の年間計画は、この様な二つの異なる要請に、60数時間という制約の中で何とか応えようとした、言わば妥協の産物である。(発表について言えば、「身近なテーマに関する発表」等の方が、生徒にとってやり易く、しかも興味深いと思うのだが。)

#### ○グループ研究・発表学習のねらい

- 特に一つ二つの思想に主体的に深く取り組ませることにより、思想の世界に関心を持たせたい。また、何か「倫社でこれをやったんだ」というものを残させたい。
- 教師の講義一辺倒では単調で受け身になり易いので、言わば「視聴者参加番組」を取り入れることにより、年間の授業に変化を持たせる。(「3分間スピーチ」を行わせた年度もある。)
- 読書力と、自分達で討論し、企画し、発表するといった力をつけさせる。
- 副次的には、クラス内に新しい繋がりができることを期待している。(班編成は、気の合う者同士が集まって作られるのではない。)

#### ○研究・発表にあたって特に指導した注意事項

- 基本的には、先ず対象をよく理解し、次いでそれを自分なりにまとめ、そしてそれを皆によく分からせる。(聞いて、よく分からない発表では無意味だ。分からせる自信のない内容は大胆にカットする。)
- 班全体に於いても個人に於いても、発表のポイントを絞り、枝葉末節は切り捨てること。そして骨組がよく分かるように。
- 思想を学ぶ意義からいって、決して対象の正確なコピーが大事なのではなく、自己が如何に対象を捉え、そこから自己にとって有意義なものを引き出し、

そしてそれを如何に自分なりの言葉で再編成するかが問題。あくまでも自分の頭でよく思索することが大切。事実や解釈の誤りを、余り恐れることはない。

- 聞き手の関心を惹き、よく分からせる工夫をすること。特に、プリント、板書等、視覚に訴えるものを併用するとよい。ウケルことも大いに結構。
- なるべくメモを見ずに、しかも日常使っている分かり易い単語、しゃべり方で語り掛けるよう心掛ける。流暢であるより、言い違えたり、つかえたり、考え込んだりした方がいいことも。乱暴な言葉遣いも結構。尚、身近な具体例を挙げて説明すると分かり易い。

### Ⅲ 「原典学習サルトル著『実存主義とは何か』(討論・発表)」

#### ○指導経過

1. 本文をコピーして配布。(人文書院版7~74ページと巻末の訳者註とをプリント9枚に。一部中略あり、全体の約半分の分量。)他に、読み方の注意と、班別討論・発表の概要を書いたプリント3枚。
2. 自宅で全部を読ませ、400字3枚程度の読書感想文を提出させる。
3. 班分け。座席に基づき、機械的に6班に分ける。(1班、7~8人。)本文も6つに分け、各班に分担箇所を割り当てる。
4. 班別討論の時間を授業中に2時間程度とる。(感想文の回し読み——班長等の役割分担の決定——分担箇所の内容の検討等——発表準備)
5. クラスで発表。(1時間に2班の予定。)
  - 分担箇所の全体における位置づけ(特に前の部分との関連)。
- 内容
  - 分担箇所の要旨。
  - 問題提起とそれに対する自分達の意見、及び感想。
6. 聞いた人は所定の用紙に質問・意見・感想等を書いて発表班に提出。
7. 発表班は、代表的質問や異なる見解に対して、次回に答える。
8. 発表班も、所定の用紙に発表の自己評価・反省点等を記入し提出。
9. 私の方から、補足と全体のまとめを話す。
10. 後日、8クラスを通じての優秀発表班、数班を公表する。

※以上授業時間中に要した時間は約8時間。

○ねらい等

- 「青年と人間形成」の授業で、現在の自己に目を向かわせた後、この本を読みながら、「人が生きる」とはどういうことか、自由と責任、個人と社会、といった問題を考えさせ、以後の授業への導入とする。「自分はどう生きるか」「社会とどう関わり、どう働き掛けていくか」という今後の自己の課題に発展させたい。

※この本を選んだ理由は、上記の内容を考えさせるにふさわしいこと、倫社の思想の中では最も新しいものであることから共感できる点も多いであろうこと、かなり極端な主張もあり論点が明確で（賛否いずれにしても）議論し易いこと、恐らく初めて読む者が大部分であろう思想的著作としては平易であること（それでも読むのに骨が折れたという声が多かったが）、等である。

- 読書指導。思想的著作に慣れ親しませ、読み方を体得させる。何か一冊共通の本を皆でじっくり読ませたい。
- 次の発表への練習という意図もある。

#### Ⅳ 「思想家別グループ発表」

##### ○指導経過

1. 夏休み前に7人の思想家（ソクラテス、デカルト、ルソー、カント、親鸞、本居宣長、デューイ）を示し、希望調査を行なう。
2. 私の方で、希望順位のみに基づき、1班6～7人を割り振る。（学力・指導性・男女比等は考慮せず。）
3. 思想家毎に課題図書（後述）を示し、そのうち1冊を夏休み中に読ませ、400字3～5枚程度のレポートを書かせる。
4. 二学期中間考査は、各自の発表する思想家に関する論述問題各2題を出題。合わせて400字詰原稿用紙2枚に答えさせる。（例えばソクラテスでは、ソフィストに関する問題と、ソクラテスの人物・思想の概要を問う問題。）（二学期の講義の部分は、全て期末考査に回した。）
5. 発表の概要（後述）と、各思想家別の留意点（発表内容構成の一例を含む）とをプリント2枚で示す。
6. 10月下旬に一度、図書室で班別発表準備会（夏休みレポート回し読み——正副班長決定——発表とその準備に関する相談）を行なう。後日暫定的な研究分担案を出させ、適切でない場合は指導。尚、以後は授業時間中に準備の機会

は設けず、自分達で放課後等集まって行なう。

7 11月下旬より発表を開始。(その概要は後述)

※各班の発表前に宿題テストをやって来させる。聞く側の生徒に最低限の予備知識を持たせる為で、教科書を読めばすぐできる簡単なもの。

これは授業の初めに集め、折り返し解答を記入したプリントを配り、時間をかけない。

※班と班の発表の間で、私の方から補足説明や関連する思想家について講義することもある。また時間の許す限り、質疑応答させる。

8 全ての発表終了後、各思想家別の優秀発表班を公表する。

○夏休み課題図書

原典と解説書の二本立てとし、どちらでもよい。なるべくこの機会に原典に接することを勧めたが、難解なものもある。また指定したもの以外でも、適切なものであれば構わない。尚、勿論のことだが、発表準備としてはこの時読んだ一冊だけで全て事足りるという訳ではない。

解説書としては、「清水書院センチュリーブックス『人と思想』シリーズ」が7思想家ともあり、これを示す。原典と他の解説書は下記の通り。

ソクラテス——『ソクラテスの弁明』『田中美知太郎『ソクラテス』(岩波新書)』

デカルト——『方法序説』『野田又夫『デカルト』(岩波新書)』

ルソー——『人間不平等起源論』『桑原武夫『ルソー』(岩波新書)』

カント——『道徳形而上学原論』

親鸞——『歎異抄』『早島鏡正『親鸞入門』(講談社現代新書)』『歎異抄研究会『歎異抄入門』(社会思想社現代教養文庫)』

本居宣長——『初山踏』『田原嗣郎『本居宣長』(講談社現代新書)』

デューイ——『哲学の改造』

※以上、できるだけ、平易で、薄く、手に入り易く、しかも思想の核心に触れるものを選んだつもりである。

○発表の概要

1. 一班の発表時間は2時間。(実際にはそれ以上になる班も多い。)

2. 必ず全員が発表する。(できるだけ分担は平等になるように。)

- 3 プリント2枚を用意させる。(それ以上でも可。その外、板書、模造紙、視聴覚器材等を適宜に。板書をうまく活用しながらやるとよい。)
- 4 プリント原稿、発表のレジメ(誰がどの様な内容を、どの順で発表するか等を書いたもの)を発表予定日の一週間前まで正副班長が持って来る。その時、事前指導を行う。
- 5 各班発表後、聞いた人は発表評価票を発表班に提出。班はそれをまとめ、更に自己評価(反省・感想を含む)も行い、共に後日提出する。

※発表の内容——概観。時代背景(思想的、及び社会的。何故その様な思想が現れたか)。人物像(生涯、人柄。思想がどの様に形成されたか)。思想(内容をいくつかに分け、複数者で担当。課題の原典に即して説明するとよい場合もある)。他の思想との関連、比較。後世への影響。学ぶ点(現代的意義)や問題点。感想・批判・意見。等々。——以上の様な事柄を適宜取捨選択し、その思想家に最適な内容構成を工夫する。前述の如く、各思想家別のポイントの置き方や内容構成の一例も示す。

○思想家選択にあたって考慮したこと。

この7人を選んだ理由は、先ず年間計画と大いに関係する。年間計画のうち思想の分野では、時間的制約から教科書に載っている全てを取り上げることは困難であり、またそれでは内容の浅いものになってしまうので、各地域・各時代から、代表的な思想で、しかも比較的理解し易く生徒が関心を示しそうなものを選んで、重点的に学ばせるようにした。(但し、中国の思想は漢文で扱うので、勝手ではあるがそちらに委せて、割愛した。尚、順序は、源流思想——西洋近代思想——日本の思想——現代思想とした。)そのうち、適当な参考書があり生徒がまとめ易いと思われるものを発表にあて、残り幾つかは講義で行う。また、政治、歴史、文学、科学、道徳、宗教、教育問題等、生徒の多様な関心に見合うように、なるべく色彩の異なる思想家を選んだつもりである。

## V 発表学習を行ってみて

以下、主として「思想家別発表」の方に関して、問題点とその解決策、その他気のついたことを思い付くままに列挙し、まとめに代えたい。

- 発表への意欲・出来映えとも、個人、班、クラスによってかなり差がある。一方で極めて意欲的に取り組んでいる生徒も多く、中には内容・発表技術とも教

師顔負けの素晴らしいものがあると同時に、他方一部には、解説書をまとめたものを読み上げる程度でお茶を濁している者もいる。だが総じて言えば、熱心に取り組んでおり、普段だらしのない生徒も、グループであることと人前でやる手前、案外一所懸命やっている。本校の和気相合とした雰囲気も手伝って、大部分の生徒は結構楽しみながら、のびのびとやっているようだ。

- 結局、先ず第一にクラス内に、一所懸命やらねば、という雰囲気、盛り上がりを作れるかどうかだ。それによってクラス差も次第に現れてくる。(一般に、最初の班がしっかりやると、全体的に良くなる。)
- だが、意欲はあっても、内容理解と、それ以上に発表技術には問題がある。折角熱心にやりながら、皆の関心を惹かなかつたり、聞いても内容が良く伝わらない発表は、見ていて歯痒い。
- 事前指導の必要性を感じず(できれば全員個人的に面接指導したい)が、残念ながら放課後等に充分時間を採れない。
- 発表のレジュメをもっと早く出させ、問題のありそうな班または個人をチェックし、せめてそこだけでも重点的に指導すべきだった。
- レジュメ(教案でもある)の書き方についても徹底させる必要があった。ある思想家について書き方の一例(班全体及び個人別のねらい、発表方法、留意点、時間等)を示し、できれば教師がそれに則って二時間分のサンプル授業を行うと良いだろう。内容を図にまとめさせるのも効果的。
- ポイントを絞れずあれこれやり過ぎる傾向もある。「原典学習」でもそうだが幾つかのポイントに関して疑問文の形で問題を課し、それについて調べ、討論し、発表させるという方法だと生徒はやり易いだろう。
- 聞く側の態度には大いに問題あり。時には、同級生が何かを話すということで強い関心を示すことがあるものの、一般には講義の時より授業態度が悪い。内職・私語・居眠りが目に付く。言うまでもないが、発表の出来具合と聞き手の姿勢は相互に関連し合っている。面白くないから聞かない→熱心に発表する意欲が湧かない→面白くない……という悪循環を起こすと、ただ形だけ前でやっているという事態になってしまう。聞く側の指導としては、宿題テストにより予備知識を持たせるとか、評価や質問をさせる等、心を砕いたつもりだがなかなかうまくゆかない。この点については、発表の方を内容的・技術

的に高めるのが、結局最良の道ではないだろうか。

- 年間計画に余裕がなく（最後の方では絶えず残り時間を気にしていなければならず）、のんびりやらせることができない。特に質疑応答や教師の講評・補正に充分時間を割けない。また「思想家別発表」では、接着剤となるべき、各思想家間の思想的乃至テーマ的つながりを示し得ず、各発表が断片的なものとなってしまった。
- 班編成は、座席や希望順位のみに基づいて機械的に行ったが、然程支障はなかった。班長には概ね、それに適した人物が選ばれ、リーダーシップをとっている。だが今後場合によっては、ある程度意図的な操作（能力の高い者、リーダー的存在の者を振り分ける、最初の班を良くする、等）が必要かもしれない。
- その他、思想家の選択、班の人数、発表時間等、再考すべき点は多い。
- 発表学習の良い点の一つは、生徒をよく知ることができる点だ。これは生徒同士についても言えると思う。級友の意外な側面を発見することもある。特に教師にとっては、多面的な成績評価が可能となる。試験、発表、レポートを三本柱として評価しているが、試験が悪くて発表で稼ぐ者もいる。尚、「原典学習」では班に、「思想家別発表」では個人に重点を置いて評価。

まとめ——全般的な内容の理解という点では講義形式に劣るものの、生徒が特定のものに主体的に取り組むことにより、思想に関心を持ち、自分自身で考えるという点では、大半の生徒については、ある程度成果はあったと思う。また生徒の書いた感想を見ると、良い経験になったようだ。だが、上記の如く、様々な問題を抱えている。指導上のポイントは、どこまで生徒に自由にやらせるか、逆にどこまで個別的指導を徹底させるか、を見極める点にあらう。本校の現時点では、より一層きめ細かな指導が必要なようだ。いずれにせよ、研究・発表学習では、生徒全体の特性を早目に掴み、それに応じたしっかりした見通しを持って、計画的に行わねばならない。

来年度から「現代社会」を担当する。（「倫社」の講座はない。）そこでも何らかの形で生徒の研究・発表学習を取り入れたいと思っている。その内容は、「倫社」でのものとは自ずと異らうが、今年度の経験を活かしていきたい。だが、まだ授業全体の構想がまとまっておらず、初年度は講義中心でやらざるを得ないようである。

## 「第3分科会活動報告」

世話人 玉川聖学院 幸田 雅夫

6月4日(木) 第1回の会合は四谷商業にて開かれた。和田(四谷商)辻田(無工)原田(大泉学園)吉野(北多摩)葦名(豊島)の各先生と私幸田が出席。本年度より実施の「現代社会」についての報告などを各先生より報告していただきました。まず、1年生を久し振りに教えられた葦名先生より発表。1年生を教えるの苦心談などから話していただきました。生徒達が1年間の授業をよく把握するためにも教科の全体的構成から話されたそうで、聞きやすく、また理解するためにも「興味ある質問」「びっくりさせるような質問」が必要であることを強調されていました。またしゃべり方や視聴覚教材の利用により効果がより上がることを体験からきめ細かに報告して下さいました。原田先生からは、ビデオを利用した授業についての報告。具体例として岡林信康の「山谷ブルース」を聞かせて行なった授業の際の生徒側の反応について話されました。年代によって「山谷ブルース」の受けとめ方も違うようでした。吉野先生からは、1年生の現代社会の糸口としてゲームを授業の中に取り入れ、「遊び」について考えさせた授業の実践報告がなされました。「遊び」から出発し、「労働」また、「余暇」といった問題にも触れられ、図書館での学習などバイタリティに満ちあふれた授業の様子が目に浮かんできました。辻先生は今年度現代社会を担当されていないそうで、「倫理社会」を教えているの苦勞話。グループ研究、発表、また作業学習について、工業高校の生徒の授業の様子を報告して下さいました。私、幸田は昨年実施したグループ研究の生徒の評価及び反応と、今年度予定しているグループ研究の予定、また1年生の授業の反応について話させていただきました。

出席された先生方から、第3分科会に対して発案がありました。授業の様子がわかるものを持参。(テープ、ビデオなど)授業でうれしかったこと、恥しかったことなどの体験の交換をすることになりました。会場であった四谷商業の和田先生が、厚いレジユメを用意されながら、クラブ活動の緊急の用事のために発表していただけなかったことが残念でした。

7月8日(木) 第2回分科会。豊島高校にて第2、第3分科会と合同でもたれました。3分科会合同となると、人数も多く活発でした。分科会に分かれての

発表では、先回発表していただけなかった和田先生より、イラスト入りの「文化」を中心として取り扱った授業の発表報告がなされました。生徒が取り組みやすいようにまとめられたのがとても印象的でした。吉野先生より「統計グラフの読み方」を中心とした授業の実践報告がありました。授業をテープにふきこんで、それを持参され、生徒との心あたたまる討論のやりとりがよくわかるレポートでした。発問に対する生徒の反応、また考え方がテープでよく知ることができました。小河先生（板橋）からは7年間続けられた「論文指導」について語られました。現在は「現代社会」を教えられ、論文指導はされてないとのことでしたが、ノウハウを教えて下さったことは、大変感謝でした。葦名先生は「マキャベリ」を題材とした授業例を発表。辻先生は授業における言葉のリズム、間のとり方といったものを、そして幸田は「グループ研究の全体図」ということで、生徒達のまとめたグループ研究のテーマの全体図ができましたので、それを発表させていただきました。他の分科会同様、分科会での発表時間を延長する位、盛況で、この日だけでは語り尽せない位盛り込み多かったです。

10月7日（木）第3回分科会は再び四谷商業にてもたれました。四名の出席者（葦名、辻、和田、幸田）。和田先生が夏休みをかけて研究されたマイコンのプログラムについて発表されました。「人口問題」をプログラム化し、実際に人口の統計のデーターをインプットし、プリンターよりアウトプットしてきたデーターを見て感嘆したものでした。マイコンが普及し、OA革命がやってきた現代にマッチしたもので、すっかり時間の経つのを忘れてしまいました。今後視聴覚教材としてマイコンが使われる時代も間近かな気がしました。葦名先生からは、経済分野を取り上げた授業での直面した問題についてのレポートを発表。私、幸田は公開授業の時のレジユメを持参し、それをもとに報告させていただきました。

10月21日（木）第4回は都立教育会館にて第1分科会と合同。吉澤、木村両先生より発表がありましたが、第3分科会からは、葦名先生だけが出席されました。

11月14日（木）第5回は都立九段高校にて第2分科会と合同。斉藤先生（松原高校）の授業の実践報告。豊富な資料を持参され、参会した一同にご披露して下さいました。第3分科会からは辻先生と私が参加しました。

12月9日（木）第6回、都立教育会館にて3分科会合同で催されました。

第3分科会からは和田先生、辻先生、私の3名が出席。十余名の先生方が節走の忙しい時期に集まり、多くの発表がされました。蛭田先生からは現代社会のアンケートを中心の発表、また和田先生からは、「マイコンを使った授業」として研究授業の報告がありました。渡辺先生(青山高)は生徒の意識調査を、そして私はグループ研究の報告をさせていただきました。

今年度、分科会として独自に2回もたれ、あと4回は合同という形で行なわれ、活気あり、意欲に満ちた先生がたの研究を見てたいへん刺激を受けた次第です。世話人として、分科会に所属された先生方に十分なサービスができなかったことが心残りです。不慣れな世話人を助けて下さった先生方に感謝するとともに、来年度、ますます分科会での活動が活発となり本年度以上の成果がありますことを心よりお祈り申し上げます。

## 「ルネサンス時代の理想人 —万能人レオナルド・ダ・ヴィンチ—

私立玉川聖学院高等部 幸田雅夫

### I ねらい

2年程前のことであつたか、校長室に用があつて呼ばれたことがあつた。校長室の中は殺風景でたいしたもの置いてなかつた。私の目にとまつたものといへば、1枚の「モナ・リザ」の複製の絵であつた。学校時代に行ったことがあるパリのルーブル博物館の「モナ・リザ」を思い出した。ルーブル博物館における「モナ・リザ」の扱いは他の作品とは一段違い、ガラスケースのようなものに入って、湿度調整がされている。しかも、「モナ・リザ」の前には人が群がっている。ルーブルにおいて「モナ・リザ」は貴重な財産で、行方不明になつたこともあり世を騒がした。

同じ2年位前、学校の廊下に「最後の晩餐」が飾られていた。折角飾られてあるのに、生徒達は興味を示さず素通りであつた。「モナ・リザ」同様、ダ・ヴィンチを有名にした名画である。ダ・ヴィンチという天才のことがルネサンス期の

理想人である万能人として教科書に出ている。何とかして生徒に関心をもたせたく思い、授業案をつくり、これらの作品を教材として授業をやってみたが、生徒の反応は予想以上のものであった。

1982年1月、都倫研分科会（都立九段高校が会場）にて発表させていただいた。出席された先生からは、数々のご指摘、またご指導をいただいた。それをもとに、少々手を加えて、再度本年度の「倫理・社会」の授業にとり入れてみた。

中世から近代へ、人間の発見の時代にと変わって、ダ・ヴィンチという人間についてのことを書かせていただく。生徒達の反応などがつかめていただければ幸である。

## II 展 開

- a. 目 標 「近代精神」の誕生より、神中心から人間中心へと変わっていったことについての理解
- b. 指 導 計 画
1. ルネサンスとは
  2. ルネサンス時代の理想人……本時
  3. 人文主義運動の展開
  4. アルプスを越えて
- c. 本時の目標 ルネサンス時代の理想の人、万能人ダ・ヴィンチを通して自由な人間の生き方について学ぶ

	学 習 活 動	学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点
導 入  展  開	<ul style="list-style-type: none"> <li>•ダ・ヴィンチの業績について</li> <li>•絵に対する質問</li> <li>•ダ・ヴィンチの人に対する観察眼</li> <li>•「手記」を通して彼の仕事に対する考え方(画家とは)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•ダ・ヴィンチについて知っていることを述べさす。</li> <li>•構図(遠近法)に関しての観察、イエスの位置、ユダの位置について</li> <li>•「聖書」の晩餐の箇所を引かせてみる</li> <li>•絵を書くという仕事の偉大さについて「手記」を通して考える。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>•「最後の晩餐」の絵を掲げる</li> <li>•四福音書の比較</li> <li>•「手記」の抜き刷りの配布</li> <li>•「モナ・リザ」</li> </ul>

	学 習 活 動	学 習 内 容	指 導 上 の 留 意 点
ま と め	<ul style="list-style-type: none"> <li>● モナ・リザのとらえ方</li> <li>● ルネサンスはたんに古典の再生ではなく人間の可能性を求めている。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「モナ・リザ」についての考え方</li> <li>● 中世の人間観とルネサンス期の人間観の違いについて</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 「モナ・リザ」に関しての詩</li> <li>● ギリシャ時代とルネサンスの時代の理想人について触れる。</li> </ul>

## 1. 「最後の晩餐」に関して

「魂の画」といわれている「最後の晩餐」はミラノにあるサンタ・マリア・デレ・グラッチェの食堂に依頼されて書かれた。1493年末頃より書きはじめて1498年までの長い年月を費したそうである。ダ・ヴィンチが聖書に精熟し、弟子達を書いたことは構図を見れば良くわかるが、ダ・ヴィンチが一番苦心したのはイエスの顔であったようだ。

生徒達に「ユダはどこにいるんだろう」と聞いてみると、「あの人、この人」と指す。大部分は当てもなく言っている。「ユダは金でイエスを売ったから…」とヒントを与えると、ユダがどこにいるかを当てる者もいるが、意外であったようだ。当校はミッションスクールであるため全員が聖書を持っている。この授業で大変役に立った。「聖書のどこに書かれているのかな」と問うと、一斉に聖書を机の中から出してめくり始める。四福音書の中に書かれてあるが、マタイ伝のものをダ・ヴィンチは書いたそうである。生徒に聖書を読ませた。

また『手記』の中での「晩餐」に関するメモを読ませた。彼の人物に対する考え方がこの『手記』を通してよく理解できる。

尚、「最後の晩餐」は現在修復しているそうだが、現在あるものは、後世の画家が書いたもので、ダ・ヴィンチが書いたものに加筆されている。彼が書いていた時から絵具が悪く混色していたそうである。

## 2. 「モナ・リザ」

ダ・ヴィンチが最後まで持っていた絵のひとつである。1503～05の頃に書かれた作品のひとつであり、制作年月に関しては疑問が多いとされている。当時の女性の地位、また化粧の仕方や服装によって、女性の扱われ方がわかるそう

だ。写真が無かった当時としては、肖像画は貴重なものであった。特に肖像画として書かれている女性は数が少ない。「モナ・リザ」のモデルであるジョコンド夫人とは親しい仲であったことが想像される。ダ・ヴィンチがジョコンド夫人を書いた時にかなりの苦心をしたそうで、彼女を微笑ますために、道化を呼んだり、また音楽を奏たりしたとのことである。このようなエピソードからみると彼は紳士的好人物といえそうだ。

「モナ・リザを見てどんな女性だと思う。美人かなそれとも……」と質問してみたところ賛否両論。絵の印象から現代の女性とどこかが違うことには感じているらしかった。「顔を見て何か気がつくかな」「眉毛がないや」と返ってくる。モナ・リザには眉毛が無いが、模写した画家の中には眉毛をつけた者もいるようだ。「せめて高校にいる間は、モナ・リザと同じ真似はやるなよ。今のところ見てみるといえないようだけど……。」この一言で身をのりだして絵を見る者もでてきた。

「モナ・リザ」はひび割れがしている。しかし顔が崩れない。あの微笑みといひ神秘的な部分が多い作品である。「魔女」という仇名がついている。生徒達もあの魔力にとりつかれたようであった。「モナ・リザ」をとらえる印象は人によって違う。まとめとして、「モナ・リザ」に關した詩をプリントして配った。村野四郎と高村光太郎の詩であったが、両詩人の「モナ・リザ」のとらえ方があまりにも違うのには驚く。

### 3. 「手記」

ダ・ヴィンチのメモ魔は有名な話で、メモをまとめたものが『手記』とされている。一部を生徒達に披露した。彼の観察眼の鋭さは、現代の社会を鋭く見なくてはいけないという我々の眼に必要なものだと思う。梅棹忠夫著の『知的生産の技術』の中にもダ・ヴィンチのメモ魔のことは書かれてある。授業の中では『鳥の飛翔について』の項の原文もプリントして渡した。ダ・ヴィンチの字は右から左へと書かれてあり、普通では読めない。そのことを話すと早速鏡をとり出して写している者もいたが、読めなかったようだ。この変わった天才に対していくらかは生徒達もわかったようであった。

### III まとめ

1時間の授業でやってみたが、「あっち見て」「こっち見て」で生徒にとって

は少々テンポが早かったような気がした。私の授業の中で絵を持って行って話しをしたのはダ・ヴィンチが初めてである。スライド、ビデオ、OHPなどの視聴覚教材が多い中で、絵を使うのはクラシックかもしれないが、生徒達の反応は私が予想していたものよりはるかに上であった。特に「モナ・リザ」や「最後の晩餐」といった名画は身近かに感じられるようで教材に使用し易い。

この授業の前の時間に「君達が理想の人間像はどんな人かな」と質問したが、答えとしてでてきたものは、「何でもできる人」「一生懸命やれる人」といったものが圧倒的に多かった。文武両道が理想的人物である。女優であり、歌手であり、小説家であり、映画監督であり、主婦であるといった人が注目されるのは当然なのだろう。いつの時代においても、自分の手がけているものには一応の能力を発揮し、世に認められたといったニーズはある。それを実現したダ・ヴィンチはまさに理想の人である。

授業をやったおかげで生徒達の観察力が鋭くなったのか、職員室前の廊下に掲げてあった「最後の晩餐」の絵を素通りする者も少しは減ったような気がした。

#### 《参考図書》

- レオナルド・ダ・ヴィンチ 草思社 ロバート・ペイン著  
レオナルド・ダ・ヴィンチの手記 岩波書店  
レオナルド・ダ・ヴィンチ研究 美術出版社  
世界の巨匠シリーズ レオナルド・ダ・ヴィンチ 美術出版社  
レオナルド・ダ・ヴィンチ論 筑摩書房 ポール・ヴァレリー著  
日本の詩歌 高村光太郎、村野四郎 中央公論社  
世界の博物館 レオナルド・ダ・ヴィンチ博物館 講談社 ほか

# 「現代社会」の授業への パーソナル・コンピュータ導入の試み

都立四谷商業高校 和田 倫 明

## 1. はじめに

本校ではNECのパーソナルコンピュータPC-6001(本体、カラーディスプレイ、プリンタ、データレコーダ)を理振予算で11組導入した。これを教科の壁をこえて活用しようという声若手教員の中で上がり、私もそれに加わるようになった。メンバーは理科1名、商業科2名、それに私であり、まとめ役として電算のベテラン教師と教頭のバックアップを得、都の「特色ある学校づくりの研究推進校」の指定も受けて研究を始めることになった。

もちろん、私はそれまでパソコンなるものに触れたことすらなく、一年間の研究期間で他の仕事をこなすかわら、実際に授業で使うことができるようになるかどうか、多分に不安ではあったが、同僚教師の「なに、たいしたことはないよ」との励まし(?)のこたばに乗せられた形で参加した次第である。後で聞くと研究校指定の際も社会科の参加が興味をひいた様子もあり、研究授業も引き受けてしまうことになった上に、自宅にも別のパソコンを据えつけて楽しむようになってしまったのであるが……。

## 2. 「現代社会」へのパソコン導入の視点

従来のCAIというと、必ずといってよいほどにいわゆるプログラム学習的な使われ方をしてきた。このような観点では、社会科にパソコンを導入するといっても限界があると思われる。いっぽう、パソコンの機能は近來ますます多様化し、ビデオ機器との接続ができるようなものも現われてきているが、導入された機種もカラーで図や絵が描けることや、音楽演奏ができること、気軽に小型プリンタが使えることなど、従来のコンピュータに対するイメージとは違った親しみ易さ、便利さを備えている。これだけの機能が机の上に十分置けるサイズにおさまっているのだから、活用しない手はないのである。

また、生徒の環境をみても、白黒の画面を見ながらコンピュータの指示に従って黙々と勉強するよりも、音が出た色がついたと楽しみながらパソコンに触れていくことがより相応しいものではないだろうか。今年『現代社会』を学ぶ高校一

年生は、カラーテレビと同じ年齢なのである。

そして何よりも、『現代社会』は生徒がこれからの時代を生きていくうえで考え、行動していく力を養う科目であり、人口問題や資源エネルギー問題などの項目は彼らが生きていくまさに近い未来を考えるために欠くことのできないものなのであるが、これらの項目ほどコンピュータと深く結びついた内容もない。ローマ＝クラブの『成長の限界』の中では、コンピュータによるシステム・ダイナミクスが活用されている。パソコンのレベルでこれを試みながら授業ができるならば、生徒の興味関心をひきつけながらそれらの問題の重要性に気づかせることができるのではないかと考えたのである。

### 3. プログラムの開発

ここでいうプログラムとは、いわゆるプログラム学習のプログラムではなく、コンピュータに作業を指示するためにコンピュータに理解できる言語（パソコンではBASICという言語を使う）で書かれた処理手順である。コンピュータを動かすには、目的にそったプログラムを作らなければならない。

そこで春休みに集中的に、パソコンをいじりながらまずBASICを独習した。学期中にはとても十分な時間は持てないだろうと考えたからである。そして一学期半ばには簡単な棒グラフや折れ線グラフをカラーで描くプログラムをいくつか作れるようになった（使う目的のはっきりしているだけに、学習の効率は良好であった）。そして夏休みには、まず人口ピラミッドを作るプログラムを完成し、修正を加えるいっぽう、簡単な人口予測ができるプログラムも研究した。後者は結局、数学オンチの悲しさで統計的処理を十分にこなせず、ある程度妥当な結果が得られるという段階で満足しなけりばならなかつた。

#### 〈人口ピラミッドプログラム〉

入力するもの…タイトル（年号）、男女別5歳別人口

出力するもの…①人口ピラミッド～人口データを入れる毎に画面に棒グラフが（画面・プリンタ）描かれていく（修正も可能）。すべて描き終わると、プリンタからコピーが出る。

②人口構成表～人口ピラミッドのデータをもとに、老齢人口、労働人口、年少人口、老齢人口指数や年少人口指数が作表され、プリンタからコピーが出る。

③老齡・年少人口の図解～同様に、老齡人口一人当りの労働人口、年少人口一人当りの労働人口が、人間の形をした絵で描かれ、やはりコピーが出る。

• いずれの場合もカラーや画面構成を工夫し、テレビゲーム的な音を楽しみながら作業できる。プリンタのコピーは必要に応じて何枚でも取れ、すべての作業が終わってから三枚の画面を切り換えて見ることができる。

#### 〈人口予測プログラム〉

入力するもの…予測したい年の年号（5年おき2080年まで）、その年の出生率（夫婦一組当りの平均子供数で）、その年の男女別平均寿命。

出力するもの…その年の男女別5歳別人口（プリンタに入力データとともに出力される。これをもとに人口ピラミッドを作れる）。

• パソコンの記憶容量の限界から、あまり画面に変化がないので、その分音で楽しめるようにした。例えば出生率を入れるときは結婚行進曲、平均寿命を入れるときは葬送行進曲をコンピュータが演奏するようにしてある。やや不謹慎かとは思いが…。

• 結果が出るまで（コンピュータとはいえ）時間がかかる。あとどれくらいで計算が終わるか、表示するようにしてある。

#### 4. 授業での使用

以上のような二本のプログラムが完成した時点で、次のプログラムを作成するか、完成したプログラムを手直しするかを考えたが、結局プログラムの操作性を高め、また授業の流れの中にどのように組み入れるかを検討することにした。

二学期は帝国書院版教科書を再編成して①環境問題・②人口問題・③資源エネルギー問題・④科学技術問題に大別し、②人口問題の中で使うことにしていた。結局進度の都合で人口問題が11月末にずれ込み、担当の一学年の3クラスで、それぞれ3時間をあててパソコンを使用することにした。

人口問題の授業は、人口理論と社会状況を歴史的に概観したのちに、日本社会の高齢化を中心に進めていた。そこで①1955年、1968年、1981年の人口ピラミッドを作る・②2000年の平均寿命と出生率を予測し、人口構成をパソコンで計算させ人口ピラミッドを作る、という2種類の作業をさせて、高齢化がどのように進み、これからどうなるのか、どうすればよいのかを考えさせようとした。

当初、生徒が十分にパソコンを使いこなせるかどうか不安であった。というのは、パソコンの電源を入れてからプログラムを動かすまでに、いくつかの手順をふまねばならないこと、英文タイプ以上の数のキーがあって、実際に使うキーは数字のほかAとZ、それにいくつかの特殊キーだけなので、誤操作が多いのではないかということ（もちろん思いつだけの対策をプログラムに施してはあったが）が気になっていたからである。確かに、これらの点で多少のトラブルはあったものの、いったんコツを覚えてしまうと、生徒はこちらの予想をはるかに上回る興味を示し、すぐに操作にも慣れてしまった。四人で一台のパソコンを使うわけだが、誰か一人に頼るといってもなく、誤操作をたまにしながらも2時間でこちらの手順をこなしてしまった。研究授業の時はあるクラスの3時間目であったため、プリンタのコピーを見学にみえた先生方に配るほどの余裕であった。

使用を終えてみて、学習効果としてどれほどのものが上がったかという判定はなかなかむずかしいが、テストやまとめのプリント（プリンタのコピーを貼付してコメントをつけて提出するもの）を見ると、決して無意味ではなかったと思う。生徒が楽しく授業に参加できただけでも、わずか一年足らずの研究にしては有用であったと考えている。

### 5. アンケートの結果から（上は男子、下は女子。数字は%）

① あなたはコンピュータをよく操作しましたか？

A. よくした  $\begin{Bmatrix} 41 \\ 51 \end{Bmatrix}$  B. すこした  $\begin{Bmatrix} 48 \\ 46 \end{Bmatrix}$  C. しなかった  $\begin{Bmatrix} 11 \\ 3 \end{Bmatrix}$

② コンピュータの操作は楽しかったですか？

A. たのしい  $\begin{Bmatrix} 60 \\ 83 \end{Bmatrix}$  B. まあまあ  $\begin{Bmatrix} 38 \\ 17 \end{Bmatrix}$  C. つまらない  $\begin{Bmatrix} 2 \\ 0 \end{Bmatrix}$

③ 操作の仕方はどうでしたか？

A. やさしい  $\begin{Bmatrix} 26 \\ 19 \end{Bmatrix}$  B. まあまあ  $\begin{Bmatrix} 53 \\ 65 \end{Bmatrix}$  C. むずかしい  $\begin{Bmatrix} 21 \\ 16 \end{Bmatrix}$

④ コンピュータが音を出すのはどうでしたか？

A. 音を出した  $\begin{Bmatrix} 80 \\ 99 \end{Bmatrix}$  B. どちらで  $\begin{Bmatrix} 20 \\ 1 \end{Bmatrix}$  C. 出さないほう  $\begin{Bmatrix} 0 \\ 0 \end{Bmatrix}$   
           ほうがよい 99                   もよい                   うがよい

⑤ コンピュータの画面についてはどうでしたか？

A. カラーのほうがいよ {  $\begin{matrix} 95 \\ 99 \end{matrix} \}$       B. 白黒でよい {  $\begin{matrix} 5 \\ 1 \end{matrix} \}$

⑥ コンピュータを四人で使ってみて、どうでしたか？

A. 何人かで使う {  $\begin{matrix} 61 \\ 74 \end{matrix} \}$       B. 一人で使いたい {  $\begin{matrix} 29 \\ 26 \end{matrix} \}$

⑦ コンピュータを使う授業を……

A. もっとやってほしい {  $\begin{matrix} 92 \\ 100 \end{matrix} \}$       B. もうやらなくてよい {  $\begin{matrix} 8 \\ 0 \end{matrix} \}$

全般に好意的であるが、女子のほうが男子以上に興味を示したのには驚かされた。ある女生徒は人口予測の計算が終わって画面にけいさん しゅうりょう！\*おまたせ！！\*と表示されると「かわいい！」と声をあげていたが、女性の機械ざらいとはもう言えなくなっているのか、あるいは私のプログラム作成の感覚が女性的なのかもしれない。

## 6. おわりに

以上、本年度に手がけてきた研究を報告させていただいた。パーソナルコンピュータを社会科に導入するならばどのような可能性があるかを考えてきたつもりだが、結局①新しい視聴覚教材としての使い方と、②統計処理の便利な道具としての使い方に落ち着くのではないかと思う。もちろん用語や年号を覚えるためのプログラム学習的な使い方もあるが、そのような使い方はいささか悲しい使い方ではないかと思う。

ただし、もちろんいくら便利といっても道具は道具であり、これをいくら研究したところで社会科の、あるいは『現代社会』の本質に迫るものではない。私自身、『現代社会』の理念に照らして、たまたま手元にあったパソコンが有用であると判断したから使ってみただけに過ぎない。これはあくまで「方法」である。「内容」の論議考察を深めずして「方法」を模索することが本末転倒であるのは論をまたない。この両者を並行して深めていくことは、これからの『現代社会』の授業実践を通じてなされるべきであろう。

# 「倫社」を通しての授業観

都立田無工業高校 辻 勇一郎

## 1. はじめに

「倫社」にたずさわって、今年で8年となった。本年から新課程では「倫社」が廃止され、「現代社会」が登場してきた。さまざまな当惑と問題をはらみつつも、ともかく「現代社会」が歩みはじめたわけである。新設「現代社会」のかかえている問題は、「倫社」発足当時も同じであったろうし、また「倫社」授業実践にはじめてたずさわった者だれしも直面した問題でもあったろう。そこで、「倫社」での私の軌跡をたどることにより、「倫社」とはどんな授業実践であったのかを検討し、今後とりこんでいく「現代社会」は私にとってどのような授業実践であるべきか、をさぐっていく手がかりとしたい。ここでは、「倫社」をとおした授業そのもののあり方に的をしぼり、①私と「倫社」とのかかわり、②授業実践へのとりくみ、③授業のあり方と今後、を取り上げて記していくこととする。

## 2. 「倫社」とのかかわり

はじめて「倫社」授業をおこなったころ、そこで直面した場面は“立ち往生”という言葉に尽きる。授業がほとんど成立しないのである。私にとっては、「倫社」の授業はもちろん、工業高校生という対象もまったく未知のものであった。教育実習で授業のまねごとはしたものの、現場では役立たない。実際、生徒への対処のしかたをはじめとして、授業にどうとりくみ、どう創造していくのかということも皆目わからなかった。「倫社」授業とのかかわりは、このようにすべてにおいて“無からの出発”であった。その時点では、まず授業を成立させていく創造が必要であった。しかし、どこから手をつければよいのか、糸口がなかなかみつからない。授業のイメージもつかめない。生徒の把握もできない。

その当座おこなわれていた「倫社」授業といえ、教科書にそった、一方通行の、堅くちごこまった授業であった。生徒も自分も全くみえない授業であった、といえる。

「倫社」にかかわりだしたころ、授業実践を「人間世界を倫理的、社会的に認識する力をつちかう時間」と位置づけてみた。「認識力」なしには「理解力」も「実践力」もあるまいと考え、「認識能力育成」の場として設定してみた。けれ

ど、当の授業は成立さえ問われるような事態であり、みごとに生徒から反発され、さんざんな目にあったりもした。

実践一年目が終了するころ、授業全体を改めなくてはにっちもさっちもいなくなり、授業そのものへの反省が痛感された。そのため、授業の形態、実践のしかたに強く関心をもつようになった。

### 3. 授業実践への取りくみ

授業としての「倫社」はむずかしい。そのむずかしさは、ひとつには内容にかかわっており、他方では指導方法、指導技術の問題にあろう。前者では教材研究、後者では授業の実践のしかたが問われよう。最初のころ、教材研究中心の実践であり、実践のしかたを検討する余裕などほとんどなかった。しかし当時、とにかく数年間は教材研究の基礎づくりと思い定めて、教科書を研究する形ですすめていった。このことは、「倫社」内容のワク組を理解するのに役立った。授業にいきづまったころ、授業実践の問題に関心をもち、実践をどうすすめていくべきかが課題となってきた。そのためにまず、実践のための台本＝脚本ともいべき授業案の創造にとりくんだ。

#### (1) 授業の創造

授業案づくりは、具体的な場を念頭においてとりくまれる。私の場合、対象の生徒は工業高校3年生である。工業高校生についてはいろいろ説明するまでもなく、学習、生活態度において多くの困難な問題をかかえている。中学時の評定平均2という生徒がほとんどあり、基礎的な学力はほとんどなきに等しい。こうした生徒にぎりこんでいける授業案がなによりも必要となる。

私は授業実践を劇とアナロジーしてみた。教師、生徒のおりなす劇的世界と設定してみた。そのため、授業案の構成に「序・破・急」という段階リズムをおいた。つまり、日本人がむかしから慣れしたしみ、われわれの日常生活の基底をなす「破調のまとまり」をおいてみた。というのは、授業実践はクラスという一つの生きものを対象になされるのであるから、そこでは全体の呼吸をつかむことが大切である。その呼吸の劇的な流れを「序・破・急」として構成できないかと考えたからである。そして、授業全体を通してひとつの大きな深呼吸をなし、新鮮な「空気」をとり入れていくこと、そんな風に授業をイメージしてみた。

また、授業案は発問形式を中心に構成し、生徒を活動させていく内容をこころ

みた。導入部にはとくに心をくだいた。出だし、きっかけは大切であり、授業成立いかんもほとんどこのところで決まると思うからである。

授業案づくりは具体的な場を設定しておこなうが、具体的であるとともに、その内容の一般性をこころがけた。そのことによって、授業実践の基本的なワク組をつくりだそうとも考えたからである。

どの授業でもそうであろうが、一定の実践をおこなっていくとそこにある種の型がうまれてくる。私の場合、この型の形式（パターン化）は実践数年後よりでてきた。しかし、このことは経験のつみかさねによってなされたというよりむしろ、パターン化を目的意識におこなっていったためといえる。授業は基本的に一定の形をとって成立するのであり、その形さえ全くなかった当時には型の創造は必要不可欠であった。また型が型としてでき上る段階を授業成立の基礎的段階とも考えた。この基礎ができなければ授業はどうにもならないだろうし、その後どんなに経験をつんだところでよい授業はむずかしいと思った。さらに「倫社」授業を通じて得た授業パターンをもとにして、授業実践の一般論を構成できないものかとも考えてみたりもした。

授業のパターン化をめざしているときには、さまざまな試みが追求され授業全体が緊張しているが、一定のパターンができ上がり型が形式化していくと実践における新鮮さが乏しくなる。「制度成って内容ほろぶ」ということだろう。したがってパターン化のあとにおとずれるこういう事態をどう克服していくかが課題となる。現在のパターンを発展させ、よりダイナミックな形態をつくるべきか、それともあたらしい形態を創造していくべきなのか、そんなときに「現代社会」の登場である。私にとっては「現代社会」という新しい型をつくるべきの時期でもあろう。そのことを通じて授業案づくりのあり方をさらに問うていこうとも思っている。

## (2) 授業実践の力量にかんして

授業案はそれがよく実践できてはじめて生きてくる。その実践がまたたいへんむずかしい。指導のしかた、力量が問われることになる。

授業を成立させるために、はじめのころ私のとった方法は、授業内容外の強制力による立場であった。内容そのものによって生徒をひきつけ、授業をすすめていくなどまるで期待できなかった。その反省にふまえて、その後授業を通して生

徒の動きをみていくことをこころがけた。生徒の動きを観ることによって、そこでの全体像、雰囲気把握しようところみたのちにこのことはたいへん重要であると気づいた。つまり、授業においては生徒はクラスという場で呼吸しており、一定の呼吸のリズム・テンポがある。クラスは一つの生きもので独自の運動をしている。こうした場の雰囲気、性格をとらえ、それにふまえた授業がたいせつである。したがってまず、クラスのいま呼吸し動いている姿を把握することを目指した。このことによって授業成立も可能となっていき、内容そのもので勝負する授業の創造が切実の課題となってきた。授業内容で勝負するとなると、内容にかんする指導技術の問題、指導の力量がただちに問われることとなる。

授業での指導力量は、目的意識的な実践、経験のつみかさねから得られるものであろうが、そこで私がこころがけてきたことを2、3記しておこう。授業には、その時間の授業案を頭に入れ、主体化して臨む、現場には授業案は一切もちこまない。発声も大切である。声ひとつで生徒の反応がずいぶんかわるのだから。またなるべく身体表現を使うこと。それに“きれいな”言葉を使用する。言語表現ひとつで全体のリズムをくるわせてしまうこともある。とにかく、どれもこれもむずかしい課題である。だがこうした努力なしには、よい授業実践は困難であらう。

#### 4. 授業のあり方と今後

授業実践においては、だれでもよい授業をめざす。いったい「倫社」授業にかんする“よい授業”とは、どんなことをいうのか。少なくとも、生徒の心のどこかを動かさない授業は、“よい授業”とはいえない。たんに知識の伝達にとどまっている授業も、そうであらう。「倫社」が「倫理的価値」「倫理実践」「人格の形成」をおつかっている性格上、とりわけそうであるといえる。他方、“うまい授業”という言葉もある。うまさはなによりもテクニックの問題にかかわる。しかし、“うまい授業”かならずしも“よい授業”とはかぎらない。テクニックの巧みさだけではなにかが欠ける。なにが欠けるのであろうか。“よい授業”を実践しているとき、そこには生徒と教師とのたましいのふれ合い、交流がうまれる。奥深い心のごきがある。技巧だけの場合、そのテクニックの巧みさゆえに生徒はかえってその技巧に目をうばわれ、表面にあらわれる形にとらわれる。その結果、授業はうまく展開するが、その円滑さ、スマートさゆえに表面を流れ

てしまうことが多い。生徒の感動がうすいといえよう。

一般的に授業にかんして生徒は、「楽しさ」「面白さ」「わかりやすさ」をのぞんでいる。そして“よい授業”はそれらの内容をどこかにもっている。教える側からいえば、「楽しさ」「面白さ」「わかりやすさ」などのよいテクニックを媒介とした「よい授業の創造」をめざしたいものである。そういう授業実践ではクラス全体のすがすがしい呼吸がもたらされるであろうし、生徒・教師ともに心の中にわきあがる力づよいなにかを感じることであろう。

「倫社」はいろいろな意味で、たいへんむずかしく、またやっかいな科目であった。と同時に、そのことはやりがいのある実践でもあった。

「倫社」授業の実践にかかわって、ようやく愛着のでてきたこのごろである。すでに「現代社会」の時代へと入ったが、「倫社」授業実践の反省にふまえて、よりよい「現代社会」づくりをこころみていきたい。また、そのことを通じて、今後とも授業について考えていこうと思っている。

## 「汝自身を知る」授業 ——本年度の「現代社会」の授業から

都立豊島高校 章 名 次 夫

### 1. はじめに

「先生は、早口で間がないので聞いていて疲れるよ」と、教員3年目のはじめに生徒に言われた。テープレコーダーに自分の授業を録音して聞いてみると、確かにせきこむような話し方で、生徒は聞いていてしんどいだろうなと思い愕然とした。「なぜ2年間、こんなことに気がつかなかったのだろう！」倫社で、ソクラテスの無知の知について語り、「汝自身を知れ」と説きながら、こんな単純なことに気がつかないのだから、アイロニーそのものである。それ以後「気づかずにひとりよがりの授業をしていることが多いのではないか」ということが常に気になっていた。また、10年間、同じ科目を続けて担当していると、自然に授業の発想や型が固定化しマンネリとなっているのではないか、という思いも強か

った。

しかし、本年度から「現代社会」が始まり、いやおうなしに、緊張と戸惑い、ゆらぎと模索の毎日となった。何しろ1週4時間、十分な授業案もできぬまま教壇に立ち生徒に語りかけねばならなかったからである。

このようなあわただしさと戸惑いの中で「現代社会」の1年目も終ろうとしている。しかし、一方では、いろいろ見えなかったことに気づき、得るところも大きかった。いや、戸惑いの中で模索せざるをえなかったので新鮮な驚きと発見があり、さまざまな工夫や試みを行なう必要に迫られたともいえる。

たとえば、このようなことがあった。「現代社会」と「倫理」の内容が重複しては困るので、ともかく今までの倫社と異なるアプローチを試みる必要性に迫られた。そこで思いきって内容を少数のテーマに絞り、そのテーマについて生徒の意見や感想を手がかりに、逆に切りこんでいくような授業を時間をかけて行なってみた。すなわち、「学ぶことの意義」の項目では、“ソクラテスの問答法が聞いけるもの”と題して、対話編の一部を抜粋し、それに対する生徒の感想と意見をもとにK・J法を用いてまとめ深めていく授業を、集中的に行なってみた。紙幅の都合でくわしいことは別の機会に譲りますが、次頁の図表は、その内容を板書したものである。→(矢印)の左側が生徒の生の言葉をできるだけ短かい表現で示したものであり、→(矢印)の右側が、それを私が受けて、「それはこのようなことかな」とまとめ直していったものである。この生徒の発言を受けつつ切り返していく瞬間が、私自身の思考を促し、それまで思いもつかなかった問答法の意義について気づかせられることも多かった。“事前の筋書きのない即興的な応答”だけに発見が多かったのかもしれない。

また、次のような収穫もあった。「現代社会」の初年度の授業でもあるので、自分の授業をテープにとり、できるだけ聞くように心がけた。その結果、一つ一つの話し方、問のとり方、問いかけ方、事例のあげ方など今まで気づかずにいてハッとすることが多く、いきいきとした活気ある授業への課題について考えさせられた。

(次の、2 [これからの授業の課題] でとりあげた内容は、その際気づいた課題のいくつかを記したものである。⋮の内容は、授業のふんいきがわかるように、できるだけ話したものをそのままのせるようにしてみました。拙

い冗長なもので紙幅をとり恐縮ですが以上の趣旨からあえてのせてみました。)

何でもいえる → 発見がある  
 何を言ってもいい → 自由ないきいきとした  
 みっつらうなから → 思考  
 いい感じ → 対等な話し方  
 共に考えようとしている → 討論とは共同作業  
 何でもいえる → 地位や権力にとらわれない  
 向い處しない クバーがない  
 相手の話をよく聞く

**A. 自由な精神の躍進かとしての問答法**

別の面から 問う  
 違う角度からものをみる。  
 異なる意見を述べていく  
 いろいろな見方を示す。

→ 相対化する  
 → 多面的 → ハッパ  
 → 多面的にもとめる → 気づく  
 → 柔軟な思考 → とらわれない  
 → 独断的にならない

**B. とらわれからの解放、をめざす問答法**

あげ足をとる。  
 必ず逆をいう  
 違うよといつづける → 困らせろ → 探究しつづける  
 いつも反対のことをいう → 思考を刺激する → 考えさせつづける  
 相手のいうことをくり返す → 驚きと発見 → 思考が  
 "おかしい! 変だ!" → 矛盾に気づかせる → 深堀  
 矛盾している! といつづける  
 NO! と 否定し続ける → わからない → 未知のみもろうさ  
 ↓  
 白命のおかしさに  
 自由で気づく。自分を否定することによる  
 (アイロニー)

**C. 戸惑わせハッとさせる問答法**

**F. よい生き方の探究**

|||| 患いをきく。  
 人間の生き方を問う → "倫理"を問題  
 裁いている感じ → よい正しい  
 何が大切かを問題にする → 生き方は何か

# 問答法とは何か

— その特色と意義

臨機応変だ  
 おく切り直す → の、いる  
 相手の話を受けつ → 魅入ら  
 死んでいく → いきいき  
 即興的に → 木の7777.  
 芸人的 (飲はん!) → おもしろさ  
 ↓ 開かれていく感じ  
 OX式みたい  
 二着振 - Yes → 話か  
 NO → つか

D  
 いきいきとのも  
 よもしろさ

話ぐどい、細かい → 厳密な話のすすめ方  
 理屈づめの → 論理的  
 一步一步筋を追う。 → ち密さ、あまじ  
 違いをはっきりさせる → 正確さ、論点を明確にする  
 ↓ 客観性  
 ことばの意味を問題 → 概念の発見 → 普遍性  
 定義しながら話す → 共通に理解できる意味  
 辞書みたい  
 具体的なこと → 抽象的に → 概念を問題に  
 身近なたとえを多く使う

E, 論理的  
 合理的な  
 思考

## G. ソクラテスは、 傲慢か

自信がある  
 えびている  
 ごうまんだ  
 うめぼれている  
 見下している  
 意志が強い  
 攻撃的だ

? ?

ひとりよがりだ  
 何かごまか  
 されている感じ  
 気がどっている、  
 クール  
 尋尊尋問だ。  
 ヤテニにかけている  
 強引につれていく感じ  
 答をすでに知っていて  
 押しつける  
 ソクラテスの相手の人は  
 ロボットであやつり人的  
 みたい

私が強い

何かごまか  
 されている感じ  
 ひとりよがり

このようにみえてくると、しんどいことの多い一年ではあったが、逆に思いかえしてみれば、自分の今までの授業の型がゆさぶられる困惑の中で、いろいろ気づき模索していくという点では、「無知の知の自覚にもとづく汝自身の授業を知る」よい機会だったのかもしれない。また、3～4年すれば、困惑から安定へ、それなりにまた授業の発想や型が固定化し、マンネリに陥ることも多いに違いない。苦しいけれど、「これも1つの機会」と思い直して、努力していきたい。

## 2. これからの授業の課題

### (1) ハッとする問いかけを、どう見出し、創造していくか

「川の水はなぜなくならないか」という問いかけから「水と緑と土」が人間にもっている意味の重要性を、富山和子氏は『川は生きている』などの著書で強調されている。そして、この素朴な問いかけを切りこみ口として、人間と自然の根本的な関り方にまで次々と深められていく。このようなハッとしながら内容も深まっていく問いかけを、いろいろ見出し、工夫していきたいものだ。

#### 【例1】時計がなかったら、現代社会はどうなるか？

〈生徒〉西武の電車が動かない。デートもできない……

そうだ、学校も工場も時計なしには動かない。腹がすいてきたからそろそろ授業も終わり、というわけにいかない。時計はきちっとした約束やとりきめの象徴なのだ。人々がそのとりきめや約束どおりに行動することによって、制度や組織をつくるのが可能になる。私たちが時を「切り、節約し、打ちあわせ、追われる」そのような“不自然な生活”が複雑な組織社会を生きる現代人の宿命なのだ。「悠久の時を生きる」文化圏の人と比較して、果してどちらが幸せなのだろうか……

### (2) “未知なる謎とき”の要素をどう盛り込むか

「一見わかりきったあたりまえのことも、よく考えてみるとおかしいのでは？」という形で、生徒の常識や思いこみをひっくりかえすようなアプローチをできるだけしていきたい。推理小説のような“未知なる謎とき”の要素があれば、生徒の思考もより多く刺激され、授業のリズムもいきいきとした活気あるものになる

だろう。

【例2】「危ないと叱るより手を引こう」の標語はどこがおかしいか

ある週刊誌で、アメリカ人が「危ないと叱るより、手を引こう」の交通標語は、「手をひくより、危ないと叱ろう」の間違いではないか、と指摘していた。この外国人は、どういうふうにおかしい、変だつて言ったのか、わかるかな。

《生徒》どこことっておかしくないのでは……。

そのアメリカ人曰く「手をひかれつづければ、いつまでもどのような時が危険かを判断できなくなる。教育でいえば、手をひいてくれる人に頼り、責任をかぶせて、自立することが困難になる」……。確かにそういわれてみると、自立を重んずるアメリカの個人主義からみると、日本のしつけや教育の「甘えと過保護」の構造がよくみえるのかもしれないね。何をよしとするか、価値の基準や文化の違いを示す一例だ。

(3) みえにくいものを、どう浮きぼりにしていくか。

「一つの原理や抽象的な理論によって、ふだんみえにくいものを、ある角度からくつきり浮かびあがらせる」そのようなことができれば素晴らしい。一つの視点や角度からスポットをあてることで、いろいろ広く、深くみえてくるという楽しい経験を、少しでも多く創り出すことはできないだろうか。例えば、マルクスの「資本主義において労働力は商品である」という現実から抽象された理論が一つの側面から社会と人間のあり方を照らし出すように。

【例3】私たちは、自分の労働力の商品価値を常に高めようとする?!

経済学——特にマルクス経済学の見方では、就職するとは、君たちの働く力、労働力を売ることだ。だから、君たちの労働力にはそれぞれ値札がついて、その値札に応じて賃金（給料）をもらうということになる。法律を学んだ、英会話やコンピューターの操作ができる、あるいは、日本では「学歴」も働く力の値札が高まるという信仰があるので、人々は、自分の労働力の商品価値を自分の努力で日々高めようとする——「受験競争」もそのあらわれ

の一つとみることもできる。資本主義の経済は、皆が自分たちの労働力の価値を不断に高めようとする刺激や力が、内側から強く働いているしくみでもある。それが、あの生産力の異常な拡大をもたらした秘密でもある。しかし、今言ってきたことは、あくまでも一面で、ちょうどレントゲンのようにある側面を抽象的に浮きぼりにしたということだけれど……。

#### (4) 既存の知識にどうゆさぶりをかけていくか。

教科書の政経分野では「憲法ではこう定められている」とか「このような経済の制度が確立している」という書き方が多い。一義的に明確で、客観的な知識を正確に伝えると共に、その規定や制度にこめられている意味や根拠をじっくり考えていく授業を工夫したい。いわば、その客観的な知識をいろいろの形でゆさぶって、その規定や制度に秘められているからくり、知恵・工夫、なぞなどが浮かびあがっていくような授業を試みていきたい。

ww

#### 【例4】国会は、国権の最高機関か？

憲法の条文を頭にピタリ張りつけて丸暗記しただけでは、社会はみえてこない。ある学校の実状を知るのに、校訓や校則、生徒会規則を読んだだけでは不十分なように。

「国会は国権の最高機関である」という内容も、ちょっと考えてみるといういろいろな疑問がわいてこないかな。「なぜ、そもそも、国会・議会というものがあるんだろう。いつ、どんな時代でも議会があったらどうか。議会に集まる議員はどんな人達か。なぜ僕たちの生活の枠組や方向を決める強い力を持っているのだろう。「国権」とあるけど国家やくって何だろう。国の権力——すべてをまとめて方向づけていく権力がなぜ必要とされるのだろう。こんなおそろしい権力を、僕たちはコントロールできているだろうか。国会は本当に最も強い力を今の日本で持っているだろうか。国会は最高機関といっても、いろいろな問題を解決する力が弱く頼りなさそうに見えるのはなぜだろう。その理由は？……」

(5) ゆらぎや困惑の中から模索する授業をつくるには？

ソクラテスの問答法のおもしろさは、問答の中の「ゆらぎや戸惑い、矛盾や困惑」のたゆたいにあるように思う。「困惑は探究の母」とすれば、第2部の人間の生き方に関するところでは、ゆらぎや困惑がひき起される中で考えを深めていけるような取り扱い方を工夫することも必要だろう。人間の生き方に関しては、「答は一つ」ではあるまい。時には、教師自身の迷いや困惑を率直に提示することが、生徒へのよき刺激となるのではないか。（具体例は省略）

(6) 自分のことばで、何をどう語るか。

授業では、結局は、自分なりのことばで語るしかない。たとえば、NHKの講座の内容が素晴らしいとしたとしても、私がそれを借用して一字一句同じことを授業で語っても何か授業のいのちが、味わいが失われてしまうのではないか。「自分の生きてきた経験が、思考するうえでの最良の素材であり、その経験を幾度もかみしめ吟味することが、思考を実り豊かにするものだ」とは、政治学者神島二郎氏のことばである。私の生活経験が貧しくとも、自分が感得し、自分の生活経験の中からくり返し考えてきたことを自分なりのことばで語る時に、生徒の心に響くものが生じるかもしれない。もちろん「私小説」的に語ることが必要であるとか、好ましいということではない。しかし、ある場面では、「私の人生と経験から、私はこのように考えている」と、はっきり語ることが大事なことのように思う。

【例6】なぜ、美しい新緑の世界に今まで気づかなかったのか。

漱石もドストエフスキーも「この現代に生きる倫理」の内容である「目にみえないけれど大切なもの」——たとえば、真理、善、聖なるもの、人間の尊厳などを渾身の力をふりしぼって追求した人だ。しかし、「大切なことなのに目にみえない、わからない」ということは実に多い。僕の例だけれど、君たちと同じ年代に入院したことがある。体調悪くどうなることかと不安だったがよくなって退院した時がちょうど新緑の季節だった。逆光に透き通る若葉のきらめきは実に美しかった。「あ～、こんなに美しい新緑があったとは、どうして今まで気づかなかったのだろう」と思った。それまで新緑ということばは頭の上では知っていたけれど、15、6歳になって、はじめて新緑の世

界を発見し、気づいたわけだ。だから、僕たちのまわりには、いろいろ素晴らしい美しいものがあるのに気づかないということは大変多いに違いない。修学旅行で、仏像をみても「木のかたまり」とみるか、「精神的なつくしみやすらぎ、救い」とみえるかでは、全然違う。「目に見えない大切なこと」にどれほど気づくかで人生の豊かさと味わいが違って来るはずだ。

### (7) いきいきとした授業を行うには？

授業は、脚本、演出、演技などをすべて兼ねる、一つの舞台で演ぜられる劇とはいえないだろうか。舞台では、優れた脚本（授業案）が必要だが、それを棒読みしても、人の心をうつものとはならない。いきたことばとして心にしみる語り口や、印象的な味つけのしかた、抑揚や間のととり方、当意即妙な即興的な応答などが、舞台での劇（ドラマ）に活力や精彩を与えるといえよう。その点では、落語家の話しぶりや、優れた司会者の語り口に学ぶことが多い。

今まで授業を行なってきた、私なりに気づいた点をいくつか列挙してみたい。（素材は、かつて行なったギリシャ思想に関連したものである）

- 1) 抽象的な漢語よりも、歴史の風雪の中で語りつがれた「やまとことば」の方がスーと心に入るようだ。（例 ギリシャの思想は“色男でもなく力も金もない”、あらゆるものから見離された人間の問題を切り捨てている。）
- 2) 印象的な記憶に残るユニークなことばが不正確という面はあるが効果的だ。（例 「水虫の足をかくのは快ちよい。しかしそれで幸福か《プラトン》」という言葉には、快樂即幸福という考え方に対する批判がある）
- 3) ふだんの日常的な話しことばに言いかえてみることも一つの有効な方法だ。（例 ものすごく寒くて心まで凍りそうより、マイナス10度の方が客観的で分析的なことばだ）
- 4) ユーモアや笑いを誘う形に脚色してみると楽しい。（例 逃げる途中の泥棒が赤信号を守ってつかまった話は、習慣の根強さをよく示す。）
- 5) 逆説的な機知に富むアイロニカルな形に創作できれば効果的である。（例 高名な人生問題評論家が自らの悩みを解決できない。この人の人生

は一体何なのか。)

- 6) 劇的な形に誇張してドラマ化することも、かえって物事の一面をよくとらえうる。(例 ソクラテスは、なぜ楽しげに悠然として遠足に「いってきまーす」というように死ぬことができたのか。)
- 7) 対比的に単純化してパターン化することも、理解を助ける。(例 ソクラテスの論理的・合理的な線の論理を日本人はくどいと感じず。以心伝心の点の論理の世界に住んでいるからだ。)

### 3. おわりに

以上、本年度の『現代社会』で気づいてきた点を述べてみた。しかし、最も大事な「生徒の興味や発想を出発点として構成し、生徒が意欲的に関ってくる授業となっていないのではないかと、おそれる。

たまたま、先日、本年度の研究例会で、教育相談に造詣の深い木村正雄先生の「生徒と共にある授業」を拝見し、秋川高校の舎監長を経験された現会長の佐藤勇夫先生の「生徒の顔がみえてくるということ」というお話を聞き、心にしみわたる思いがした。

果して私はどれほど、生徒の顔がみえ、生徒と共にあるのだろうか。「今ここで生きている一人一人の生徒の生活経験はどのようなものなのか、何を悩み、考え、問題としているのか。学校での生活と授業にどのような思いをもって、日々過しているのだろうか」——それらを本当に私は理解しているのだろうか。授業は私のひとりよがりの独演会となっていないだろうか。

「生徒と共にあり、生徒の顔がみえてくる」あるいは「生徒を授業の主体としてどうとらえ直すか」が尽きることのない課題である。

特 集

現 代 社 会 へ の 試 み

— 倫 社 へ の 想 い —



# 神の問題

都立鷺宮高校 佐々木 誠 明

「倫理・社会」への思いとして、一つは神の問題に触れてみた。かつて書いたこともあるので、若干の推稿をして、まとまりのある文章にしてみた。大方の精読を乞うや切である。

## 1. 神の予感の一例

「神はあると思う」、いや「神なんかいない」などと甲論乙駁。そのうえ、日本の教養ある知識・文化人は、こと神に関してはいたって冷淡だ。高校生の意識調査によって見ても、そのほとんどは宗教に無関係である。そのような背景のなかで、神の問題を考えることは、まことに困難なことに属する。...

しかし、神の存在を前提しないでは、キリスト教を語ることはできない。この場合、「神は……がゆえにある」、「神とは……ものだ」という知的認識だけでは、キリスト教の理解にとって大きな意義はもたないだろう。なぜなら一般に宗派の知的認識は、生徒の人生観、世界観形成の上では、その効果を発揮し得るもとは考えられず、神の問題は、すぐれて信仰の問題であるからである。そこで大事なことは、聖書の告げる神の存在を、なんらかのしかたで、生徒に予感させる方法をくようしてみることである。

## 2. もう一つのくふう

それゆえ、神の問題からでなく、むしろ罪の問題からズバリと切りこむほうが、生徒にはわかり易いではあるまいか。なぜなら、それは、指摘されてみれば、誰でも肯定せざるを得ない点を多分にもっているからである。もっとも、かたくなな心の持主には、かえって躓きの石となるであろうが、だが、そこにこそ、キリスト教でいう罪が露呈されているのだ。

ここに見られるのは、潜在的な利己の心である。新約聖書「マタイ伝による福音書」第20章1～16節「ぶどう園の労働者」のたとえ話は、キリスト教の罪とは、こうしたエゴegoの主張にある点を理解させるための好箇の資料の一つである。しかし、そのためには、教師自身がegoの魂であることを謙虚に認め、キリスト教でいう罪人に己れ自らが該当するものであることを告白する勇気をもたなければなるまい。恐らく、キリスト教の理解を困難にさせる重要な一因は、こ

うした態度を抜きにして、罪の概念を一般的な用語解説の一つとして語ることに  
あるのではなからうか。

罪はたんなる悪事とは違う。どんな真面目な道徳家といわれる人にも、しばしば、内心では自己を誇る様子がかいまみられる。ここに罪があるのだ。かくされた自己賛美の本心がここには潜在している。では、なぜ、それが罪なのか。

ここで神が登場する。キリスト教では、天地・万物いっさいの創造者は神であり、人間もその例外ではない。その人間が、自己の存在根拠である創り主を無視して、自分を誇る時、そこに罪があるといわれるのは、むしろ当然のことではなからうか。では、神とは……。

### 3. 神の問題—キリスト教の神観

「神の怒りは、不義をもって真理をはばもうとする人間のあらゆる不信心と不義とに対して、天から啓示される。なぜなら、神について知りうる事柄は、彼らには明らかであり、神がそれを彼らに明らかにされたのである。神の見えない性質、すなわち、神の永遠の力と神性とは、天地創造このかた、被造物において知られていて、明らかに認められるからである。したがって、彼らには弁解の余地がない。」

まず、神の見えない性質は、被造物によって明らかであるといわれるが、それを理解するためには、旧約聖書詩篇、19篇の「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はみ手のわざを示す……」の箇所を参照するとよい。私たちは、しばしば自然の巧まざる美しさに感動し、天体の運行の素晴らしさに驚愕する。神秘的とも思える天然の美に心うたれる瞬間をもたぬ者はいないであろう。にも拘らず、それを成立させた根源の力をどうして考えないのか。自然科学は、事物の因果関係をよく説明するが、自然の美しさに意味を与えたもの—神—については何も語ろうとしない。

思うに、神を認めないということは、人間の眼が曇っているからではないからか。歪んだ眼、濁った我欲の持主である人間のほうに、神が見えない原因があるのではないのか。この点について深く考えてみるのが、神の問題に接近する一つのポイントになるものと私は思う。

第二に、このような曇った眼が人間の現実であるならば、神が見えないのも無理のない話で、一向に人間の責任ではないという反問がはね返ってくるかもしれ

ない。しかし、注意すべきことはこの句の真意である。すなわち、慎重にこれを読むとき、「被造者によって明らかに知り得るはずになっていたのに、それを知らなかった。だから弁解の余地がない。したがって人間に責任がある。」と、いっていることがわかるはずである。

上の説明の秘密を解く鍵は、じつはキリストの十字架と復活である。人間が生来の自然的人間に止まる限り、自己中心にすべてを考え、自己を神とする罪を免れないというのが、キリスト教人間観の特質であった。そうした人間の罪からの救いを成就するために、キリストの十字架があったわけである。それは罪に対する神の怒りであり審きであった。しかし同時に、はかり知れぬ神の恵み、神の愛でもあった。つまり、キリストの十字架と復活の事実を通して、神は人間を罪から解放してくれている!! だとすれば、人間の眼は明らかになり、神の見えない性質もわかるはずなのである。しかし、なお見えないというのであれば、それは、もはや人間の責任でなくてなんであろうか。

ww

したがって、キリスト教の神認識は、じつは神への信仰を前提として始めて成りたつものであり、しかもキリストの贖罪の事実を通じてでなければ、不可能であるといわなければならない。キリスト教の指導の困難な点は、まさにここにあるといっても過言ではあるまい。

## 倫社の授業と倫社を語る喜び

都立小岩高校 小川 一郎

### 1. はじめに

今年度で「倫社」が終る。やはり、さびしい。30代の前半から20年このかた「倫社」とともに過してきたし、「倫社」がとりもつ縁で、いろいろの人を交わってきた。その人たちと議論したり、酒を飲んでおくれた青春を楽しんだといえる。「倫社」は語り合うのによい科目であった。それは、いろいろな意味でそういえた。まだ、科目の骨格が固っていなかったし、授業内容や方法も各人各様で、まさに自主編成でやっていた。また、人生観・世界観を内容とするので、哲

学しつつ議論し、議論しつつ哲学したともいえる。議論のなかから授業についての理論や倫社論らしきものを構築していったといえる。

## 2. 公開授業の傾向

「都倫研」は、月例研究会で必ず公開授業することから、生きた研究会だと言われた。従って、公開授業を拝見させてもらう機会も多かった。そのなかで授業形態としては、発表形式のものが多かった。講義式、対話式、資料式などいろいろあったが生徒の発表する形式が多かった。それも思想家をテーマに取り上げたもので、ソクラテス、シャカ、イエス、ルソー、カント、サルトル、親鸞など取り上げられることが多かったように思う。

「倫社」に対しては批判があった。大人が読んでわからぬ哲学者、宗教科の思想を生徒が理解できるのだろうか。先生のなかには原典主義など唱えて、原典など読ませていたので余計そんな批判があったのだろう。プラトン「ソクラテスの弁明・クリトン」が最も読まれた原典ではなかったが、たしかに理解させることはむずかしかったが、それでは、生徒が全く興味を示さないかというところというわけではない。生徒は興味を示すのである。それは教師の熱意があったからだ。教師は教材研究に熱心に取り組んだ。そこに発見があり、感動があり、喜びがあった。それが生徒に伝わらない筈はなかった。

発表の授業は、生徒に事前に材料を与えるところから始まる。生徒が発表の柱を発見するために努力する。その努力のない発表はみじめなものになる。発表の授業にも20年間にはいろいろの変化があったように思う。生徒に発表する思想家を選ばせるのだが、最初のころ人気のあったマルクスやサルトルは少しずつ人気を失っていき、イエスやシャカや親鸞などが人気を得てきた。時代の変化を反映したのである。また、生徒は、自分で積極的に発表の柱を発見する作業をしなくなり、質問も少なくなっていくように思う。与えられたことは、よくやるが自分から問題を発見する積極性が失われたように思う。私の授業も、発表のさせ方も変えていかざる得なかった。グループ発表から個人発表へ。思想家を一人与えることから思想家のなかの発表項目をいくつか探し与え、それを10分ぐらい発表させるというような方式をとった。「倫社」は、生徒を主体的に動かすことなしに成果をあげることはできないが、問題提起をさせ、講義方式を相当使うようになった。生徒の変化ばかりではないと思うが、私の授業は、そのようにな

っていった。

### 3. 学習授業要領の改訂と「倫社」の変化

今回の改訂で「倫社」はなくなり、「現代社会」に吸収されたが、「倫社」発足から今回の改訂以前に、2回ほど学習指導要領の改訂があった。その2回の改訂には都倫研、全倫研の意向はかなり反映されていると思う。最初の改訂では、現筑波大学教授の梶哲夫先生が文部省の教科調査官をしておられ、改訂に努力されていた。心理学・社会学のミニチュア版としての寄せ集めの「倫社」から、一科目として筋の通った「倫社」にする。小中高と一貫した道德性を高める科目として高校に「倫社」を位置づけられたのではないかと思う。

次の改訂では、現文部省主任視学官斎藤弘先生が、教科調査官として改訂にあたられた。主なねらいとしては、「現代と人間」「人生観・世界観」の二部より内容がつくられ、現代という観点が強く出されたように思う。「人生観・世界観」の中項目に「現代と思想」があり、思想家にとらわれず、私たちの課題を解決するための思想を学ぶという面が強く打ち出されたように思う。「七つの基本的なものの考え方」などが打ち出されてきたのもこの改訂である。

ww

そこで今回の改訂になるわけだが、文部省教科調査官金井肇先生が「現代社会」の発足にあたっては、大変努力されて本年度の実施を迎えたわけである。私はこの「現代社会」をテーマ学習ととらえている。身近なところから出発する。生徒に問題意識をもたせ、具体から抽象へ導くようにする。残念ながら今年は「政経」の授業しかもてず、「現代社会」を行うことはできなかったが、いろいろの試みがなされ、定着されつつあるのは喜ばしい。

### 4. 「倫社」を「現代社会」にどう生かすか

昨年度から本年度にかけて、全倫研大会が追求されたことの一つに、この「倫社」の遺産を「現代社会」にどう生かすか、ということがあったと思う。「倫社」は、従来の社会科がややもすると社会のしくみや人間の外の世界に眼が向いていたものを、人間の内部に眼を向けた。生徒も新鮮なものとして、人間としての生き方をこの科目に学ぼうとしたのである。

「倫社」の実践では、生徒の内面を掘りおこしたものが多。生徒が自分の内面を考察したいろいろの文がつくられ、人の目にうつり、人の口にのぼった。現代社会の社会事象を認識する場合でも、人間との結びつきから把握するという視

点を見失わないということも、「現代社会」を学ぶにあたって忘れてはならない遺産だと思う。「倫社」で培ったテーマ学習や発表学習、教材の自主編成なども「現代社会」の学習に大いに生かされねばならないと考えている。

## 倫社への思いー「倫社」の精神で生かし続けたいもの

都立葛飾商業高校 浅香育弘

倫社教育 20 年の歴史を省りみて、いまわれわれは多くの反省を迫られている。現行倫社教科書で欠落し、偏っていた部分は無かったか。たとえ網羅的に載っていたとしても、それを選択し教えるわれわれ教師の側の力量不足なり好みで、偏よることはなかったか。そもそも倫社学習でなにを教えようとしたか。教師の側で一貫したものがあっただろうか。人間本来のあり方からして、現代日本人が失ってしまったものはなにかを十分に反省し、応ええたか。受験科目としての「倫社」になって倫社学習本来のねらい・意義がゆがめられ、失なわれてしまったことはないか……等である。

現行「倫社」は、青年期や現代社会の諸問題をふまえつつ、先哲の学習を通し、7つの主要テーマの学習を大きなねらいとして来た。従って倫社は系統的な哲学・倫理思想史なり、社会思想史それ自体を学び、或いは個々の先哲の思想内容の基本的事項を学ぶことで、終ってしまうものではなかった。

基本的事項を学び、知識を身につければ、あとは自然と応用力・判断力が出てくるという考えもあるが、“知識、誥達主義や暗記主義だけでは、今の生徒にそのような能力を期待しても無理だろう。すぐれた人の本来の教えはなんなのかを、謙虚にそして感動をもって学び(学)、自ら深く反省し考える態度を身につけ(思)、自らの人生観を形成し人格向上に資しうよう教えを習っていく(習)という学・思・習の一体化こそが倫社学習本来の意義ではなかったろうか。

以下「倫社」の精神で、今後の「現代社会」学習なり、選択「倫理」の学習なりに、生かし続けたいものを二・三参考にあげておきたい。

### 1. 学ぶことの本来の意義を求め、学ぶ態度を身につけること

111

学ぶことの本来の意義はなにか、を問い続けることこそ「倫社」の精神の要諦であり、今後とも生かし続けたい緊要事である。

人間はともすると技業・末節の知識（異端）を攻究することに専らて、人間の根本的・本質的あり方を求めることが疎かになりがちである。そして人間の原点というか、どうあるべきかがわからないために、迷うと共にそれへの具現の方法がはっきりしないために、猶一層迷うことになる。

現実の人生や社会をみつめ、その反省の上に立って、自己や社会がどうあればよいか、それをどう実現していくかを求めることは、古今東西の先哲いずれもが求めたことである。そこにおいてわれわれが学ぶべきことは、先哲達がなにを説いたかを識り、おぼえるに止まらず、先哲達がいかに学び、生きたかを学び、自らの生き方に資することにある。倫社・現代社会・倫理を1年間学んだが、あとあと何も身につけなかったというのでなく、生徒各自の人生に大きな変革・影響を与えるような学習であることをわれわれは願っている。そこで問われるのは、学習内容の量より、生徒に深い感動・肝銘を与えるような質が、問題になるのではなからうか。

## 2. 人生における芸術の意義を自覚させること

わたしは倫社の授業の中で、孔子・兼好・世阿弥・宣長・漱石・ゲーテ等の芸術観や、文学論に、できるだけふれるよう心掛けてきた。

それは、倫社学習における主要なテーマの一つに掲げられながら、教科書に占める分野も少なく、都倫研等の研究テーマに載る率も少なかった。授業でも余り重要視されなかったことが察知される。

しかし現代において、このテーマを考えさせ、求めさせることは、非常に重要な意義をもつと思う。現代は合理主義・理性主義が重視されている時代であり、それは科学・技術や産業・経済等の急速な発達をもたらした。その反面、人間にとって大事なもの——自然環境や、人間性を失ないつつあることも事実である。

孔子が「君子ハ器ナラズ」（いくら知識・技能がすぐれても、それだけでは君子とはいえない）とし、徳・仁を抛りどころにして、君子としての教養（六芸・詩書礼楽など）を身につけるべきことをすすめて、世阿弥が生涯、芸において花をを求めるべきことをすすめて、本居宣長がもののおわれを知る心を重んじ、ゲーテが「頭がすべてだと考える人間の哀れさよ」「美は知に走る心に生命とあたたか

さを与えてくれる」と説いたのも、人間にとってなにが大事か、普段われわれが忘れがちなことを指摘している。

この分野は、今までの倫社教育において、最も欠落していたと思うので、今後の検討が要請される。

### 3. 愛について

本当の愛とはなんなのだろうか。仏陀は慈悲を、孔子は仁を、ソクラテスは愛知を、プラトンはエロスを、イエスはアガペーを、本居宣長はものあわれを、ゲーテはいつも変らぬ二人の愛を、その他すべての先人は、愛についてそれぞれに説いてきた。

しかし現代は、社会環境なり、家庭環境なり、教育環境がわるいのか、文学・マスコミ・宗教等が十分に役割を果たしていないからか、それとも世界を蔽う時代風潮なのか、積年の人間の業なのか、自己中心的な考えの者がふえ、他人の痛みを痛みとして、思いやる心（怒）が次第に薄れてきつつあり、それが社会のいろんな事件の増加となって、あらわれてきていることは、哀しむべきことである。

どうしたら現代人は、失ないつつある人間性の大事な要素の一つである愛——人を思いやる心を回復することができるのだろうか。

私を離れた広い愛に目覚めるためには、真にすぐれた先人の愛についての教えを、謙虚に素直に深く学びとっていくことが、大事なのではなからうか。

### 4. 政治思想について

プラトンの理想国家論、ホッブス・ロック・ルソーの社会契約説に基づく国家論、カントの永久平和論、マルクス等の説く社会主義国家論等ほどの倫社教科書も扱い、授業でも取上げられてきたといえよう。

しかし、釈迦・アソカ王・孔子・老子・孟子・聖徳太子等の東洋や日本の政治思想について、果たしてどの程度取上げられてきただろうか。

政治の基本原理・しくみ・現代政治の問題点等についての検討は、政経の分野であるが、政治はどうあるべきかの政治思想や、平和論・自由平等論の検討は倫社の分野でもある。

西洋の政治思想の特色は、社会の変革を通して、社会を構成している国民の自由・平等を達成しようとする説が多いのに対し、東洋や日本の政治思想の特色は、「政ハ正ナリ」で、為政者が徳を治め、自らを正すことを通して、国民を徳化・

匡正し、社会を正そうとする点にあったといえる。儒教の政治思想をはじめ、東洋・日本の政治思想は、封建社会のためのもの、過去のもので、現代には通用しないと、一般的に考えられているが果たしてそうだろうか。今の民主政治が衆愚政治化し、形骸化の危険を辿っているとき、ファシズムに走らないためにも、政治意識の見直しが望まれるのではないか。平和の維持や、自由・平等の確立と合わせ、検討すべき大きな課題だと思う。

## 5. 人生における宗教の意義を自覚させること

われわれは生徒達に、人生における宗教の意義を、どのように考えさせたらよいのだろうか。

教育基本法は、公教育で特定の宗教のための宗教教育なり、宗教的活動を行ってはならないと定めている。しかし一切の宗教教育を否定しているのではなく、ww  
「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しなければならない」とし、宗教教育は教育の現場において、むしろ尊重すべきだとしているのである。

だが今の学校教育において、宗教教育は尊重されているだろうか。またどんな宗教教育がなされるべきなのだろうか。倫社では、日本の思想の授業を通し、日本人が古くから神・仏を、どのように崇敬し、信仰してきたかを学習して来た。

しかし現代では、日本人の中に潜在的意識ではともかく、自分が無宗教で、信仰心をもたないことに対し、なんのはじらい・反省ももたない人が増えている。だが一方で、経済生活の向上にもかかわらず、精神的不安が増大し、なにかにすがって救われたいと思い悩んでいる人が、年令を問わず増えていることも事実なのである。

その際、迷信・邪教的なものにおぼれたり、あやしげな予言・占い等に一時的気安めを求め、ふりまわされるのでなく、人間の本来のあり方を教え、安心と感謝の心を与えてくれるような、宗とすべき根本の教えとして、正しい意味の宗教の果たす役割は大きいといわなければならない。真剣に学ぶ態度も、美意識も、無私的愛も、自由・平等の意識も、平和への願いも、求道心なり、信仰心を根底とし、或いはそれらと結びついて発達してきたことを考えると、宗教は阿片であるとする批判は、される方に問題があるか、する方に問題があるかのいずれかであり、真実の宗教にはあてはまらないと思う。

われわれは、この問題について、むずかしい、面倒、或いは不必要なこととして、避けてきた嫌いがある。しかし神・仏を崇敬し、畏敬する心をもつことが、すぐれた人々を心から尊敬し、ひいてはすべての人々を尊重しようとする人間尊重の精神や、自然尊重の精神を養い、深めることになることを思うと、宗教教育のあり方を模索することが、現代の緊要な課題の一つであると、更めて考えざるをえない。

以上、私自身の倫社教育に対する反省をこめて、平生考えていることの一部を述べてみた。

## 今年最後の試み

都立府中高校 永上 肆朗

最後の倫社といえば聊か感慨めくが、実感である。しかし徒らに感傷に耽ったり、回顧的ロマンテチズムに没ることは許されない。第一、それに値する私の如何なる努力があったであろうか。そのことよりも、倫社指導の経験から自分なりのパラダイムをどう掘んだらいゝのか。このための悪戦苦斗であった。もともと指導の方法には画一的な手法はありえない。他人のどんな授業を見て感心させられても、借物は必らず失敗するから奇妙である。それより、この視点なり観点をどう抱え日常の授業展開に組み込んでいくか、こゝに教師冥利につきるものがある。今年最後の試みといっても決して大仰なものではなかった。それは「倫社新聞」の作成である。「日の下に新しきものなし」といわれるように、新聞をつくることそれ自体は何も新しい試みでもない。しかし、「現代社会」への布石として展望したときこの方法は生かせようだといういささかの確信をえたというまでのことである。

### 1. 「倫社新聞」をめぐる

従来、私はプリント発表学習ではいわゆる研究発表的視点から、人と思想にかゝわるものを主眼にやってきた。しかし、これは生徒の負担に過ぎるようになった。そのため勢い妥協的で中味の薄いもの、しかも出来合いの資料集の丸写しが

111

続出するようになり、況して討論ともなるとグループ発表の悪弊が裏目に出て、結局、全部こちらでやり直すという「いたちごっこ」であったように思う。数年前前からこの反省に立ち、1～2のテーマを選ばせて、新聞スタイルの問題提起に切りかえみた。するとこの方がはるかに生徒に密着した生徒参加の授業形態となり、当番の生徒も、このことを楽しみにしている。そこで今年は以下のように継続的に進めてみた。

## 2. 発表の時期

- ①青年と自己探究のところで ①号 "若者文化を考える"  
②現代社会のところで ②号 "家族の人口問題を考える"  
④宗教と人生のところで ③号 "宗教を考える"  
⑥善と幸福のところで ④号 "道徳を考える"  
⑩日本人の生き方をめぐってのところで⑤号 "日本人を考える"

何れも全体の流れの中で授業に節目をつける意味でも効果があり、それぞれの単元の導人や動機について生徒に意欲と関心をもち上げる上で役立つている。テーマはなるべく、ジャーナリスティックな観点も加味して総合的に広い視野から設定する。

## 3. 新聞作成の方法

57年 月 日

○号

テーマ名又は新聞名

○メインテーマ(適切な切抜き、マンガ、イラスト、アンケート etc も含む)

責任作成者

A 具体的内容・事例(第1資料)

B 識者の見解(アフォリズム)  
(第2資料)

以上の参考資料

C われわれの主張・提案

○サブ・テーマ

D 発展・関連テーマについて

○その他

3人グループ、発表30分、プリントは1~2枚、課題テーマによる、問題提起し討論する。B面あればその補足又は追加とする。

コラムはいわゆるミニマムの要素を加味し、A~Dを充足するよう努力。

概略以上の通りである。作成と発表では初め、生徒側の質問相次ぎ(例えば「若者文化」をどう捉えるかなど)困ったが、とにかく作成させてみることによって軌道にのせていった。生徒がとり上げた項目には以下のようなものがあった。

- ①号・今の若者と昔の若者についての討論 ・小・中・高生から見た非行・非行の実態 ・はらじゆくローラ族 ・「活動の傍観者」である若者達 ・ボランティア活動のスケッチ ・シラケ派の若者達 ・「エーッ、幼稚園からの自殺願望？」の記事 ・非行と自殺 ・シンナー遊び ・TV・ラジオ・流行語(その傾向-複合する言葉が多い、短縮することがある、しゃれっぽくなる)の調査、総理府による若者の特徴(1.公共心が薄い 2.社会に強い不満 3.仕事に生きがいを感ぜない 4.ひ弱で、自立心が乏しい)
- ②号・現代の家族問題 ・家族の歴史 ・家族の形態 ・家族の未来像 ・老人問題 ・家族の役割の評価 ・核家族化の問題点 ・家庭は平和・明るいこと→条件(①両親が仲良く・寛大であること ②家族が精神的・肉体的にも健康 ③経済的にも余裕→カネ)
- ③号・近代の宗教 ・現代人の宗教意識 ・宗教の人間に及ぼす影響 ・宗教とは ・宗教の種類 ・宗教心とは ・宗教的行為について ・私の宗教に対する考え ・日本人と宗教 ・青年の宗教意識(私たちは、宗教をどう考えたらよいのか、本当に私たちは宗教心を持っていないのれろうか) ・日本の神さま
- ④号・もっと思いやりを ・修学旅行の模範添乗員 ・道徳とは ・常識と道徳(常識=道徳という世の中にしてゆく、自分の良心を確立していく、常識を行える勇気をもつ) ・ホテル・ニュージャパンの横井 ・先生方の考える道徳 ・親切とその技術 ・障害児を見守る人の道 ・電車の中のマナー ・おもいやりードロハネ・交通弱者に配慮を・知恵おくれの子に暖かく接して、二兎火中通行人助け出す。(以下略)

# 江北生と歩んだ「倫・社」15年

都立江北高等学校 宮崎 宏一

## 1. 保健室での会話

先日、保健室に一年生の女生徒が、胃の具合が悪いと入って来た。直ちに私の判断で投薬をし、しばらく安静にしているうちに、どうやら落ち着いてきた。私もホッとして『次は、何んの授業?』と聞いてみた。『ハイ!!ゲンシヤです』(新設「現代社会」の略称のようである。)と歯切れのいい声が返ってきた。『先生は、何んの先生?!』とポンときた。『あゝ、ボクかい?ボクはね、リンシヤ……………そうだ、今の一年生とは縁がなくなってしまったけど「倫理・社会」という科目なんだよ』と言葉を返した。すると、その生徒は、『リンシヤって、高校生にはむずかしすぎて、哲学とか、思想とか、わけのわかんないようなことを教えるんで、つぶれるんですってね!! あんまりむずかしいことを言ったり、考えたりするの、今の高校生には無理だし、第一、授業がつまらなくて、飽きちゃうんじゃないかな? ……………』

私は、ただ啞然として、その一年生の女生徒を見入ってしまった。と、ちょうどその時、私のすぐ横で、熱を計っていた三年生の女性徒が、ギクッと身体を起すなり、話した。『とんでもない。わたしは、倫・社がすごく好きで、授業も楽しかったですよ。先生!!「倫・社」がなくなるなんて信じられません。現代の高校生にとって、欠かせない内容だと思います。……それにグループ研究で、苦勞したことは、一生忘れませんヨ!! 共通読書とか、個人読書とかで、無理矢理に本を読まされたのも、今思うとよかったと思います。……………』いやはや、何んともありがたい助け船であろうか。そして、さらに『先生は、来年何を教えるんですか?』とまで、思いやってくれた。一年生の女性徒も、ほのかな笑顔を手浮かべながら、教室の方へ向った。

私は、昭和43年の4月に、本校に着任したので、この3月でちょうど15年になろうとしている。江北生と共に歩んだ、倫・社15年……………生徒が去り、保健室にただひとりになったとき、数々の思い出がどっと押しよせて来た。先程の2人の生徒との会話の中に、「倫・社」のもっているある面を、痛切に教えられたようでもあった。

## 2. ソクラテラスの思い出

江北に来て、二年目を迎えたころ、質問箱（授業のときに、わからなかったことなどを、自由に質問できる箱を、持って回っていた。）の中に、「ソクラテラス先生へ」という手紙が入っていた。はじめのころは、かのソクラテスとばかり思っていたのであるが……。ある教室に行ったとき、黒板に、ソクラテラスと書いてあった。それが、私のニックネームであることを、その時知った。私は、思わず自分の広いオデコをたゝいて、大笑いしてしまった。生徒達も、大喜びで、その時の授業は、いつになく私ものってしまった。学校のスキー教室でも、ソクラテラスのかえ歌までが、とび出すほどであった。

私は、10年ほど前の、全倫研の紀要に、「はじめの一時間」——ソクラテスの胸像がとりもつ縁——というテーマで、次のようなことを書いている。「何年前からであろうか、本校の正面玄関ホールには、石膏で作られた古代ギリシャの哲人、ソクラテスの胸像が、超然として置かれている。無愛想なあの目・あの口・あの鼻・あの頭……本校の生徒ならば、1度や2度は、あのオデコを親しげに触ったことがあるであろう。

すっかり江北の生徒達のアイドルになっているその「ソクラテスの胸像」こそ、私の、倫・社授業にとって、欠かせない、貴重な教材の一つになっているのである。……」と。

何年前かの、体育祭では、ニューモード（仮装行列のようなもの）に、かり出され、「ソクラテラス」というプラカードのあとを、哲人氣どりで歩かされるはめになってしまった。まったく、江北の生徒は、面白いことを考えだすものだと苦笑しながらトラックを一周し、笑いの渦に巻きこまれてしまった。

## 3. 倫・社から現社へ

冒頭の保健室での生徒との会話にもでてきたことであるが、昭和57年度より、新教育課程になり、今年的一年生より、この「現代社会」が置かれている。いよいよ「倫理・社会」最後の年となってしまったが、これまで積み重ねてきた貴重な研究とその成果は、この新科目『現代社会』に受け継がれ、高校教育の基盤となるものと確信している。

授業での主役は、生徒でなくてははいけないという。生徒が生き生きと目を輝かせて、食いついてくる「現代社会」の新しいねらいは、どこに置いたらいいので

あろうか。現代に生きる、生徒の立場に立って考える授業が望まれているようだが、それは容易しいようであり、最もむずかしいことではないだろうか。私にとっても、この現社は、非常に不安である。しかし、これまでの江北生の積極的な、主体的な学習意欲によっては、理想的な学習効果をあげることができるのではないかと、信じている。

『江北高校は、21世紀に生きるたくましい人間を育てる』という本校の教育目標を、いくらかでも達成しうるためにも、この『現代社会』は、大切な科目のひとつになると思う。

——江北生と歩んだ15年——「倫・社」が新たに衣更をして、生れ変わる時がやって来た。これまでの私のささやかな体験をどう生かし、発展させていくか。また現代の高校生にどう対応していくか、重要なスター・ドラインに立たされている思いがしてならない。

この時こそ、都倫研・全倫研の仲間が、よき支えとなるであろう。でもさわやかに見送ろう。……………さらば!!倫・社よ!!……………と。

## 「倫社への思い」

都立野津田高校 河野速男

### 1. 倫社への思いを綴るにあたって

現任校の旧課程から改訂への移行の処置から現代社会について本年度は地理の先生と1年の担任が主に担当することになったので、来年度から現代社会をもつことになって、今年も倫社を担当して1年の大半が過ぎようとしている。その関係で現代社会について語るよりは今なお関わりつづけている倫社についてあれこれ思うままに綴る方がよいと判断して、9年のながきにわたって携わってきた教科について書こうと思う。

### 2. 思い出として書くこと

はじめて倫社を担当して以来、常に私を悩ませてきたものは、倫理思想を自分が「いかに理解し」生徒に「いかに理解させるか」ということであつた。全力を

いて倫理思想と対決したのは現任校に着任して以来であって、自来6年、「わかりやすい授業」という学校全体の目標に合わせて、高度な思想の平明化と取り組んできたつもりではいるが、どれ程の成果があったかおぼつかない。恥を忍んで書くと、着任5年目にクラス経営にいきづまり衝突した生徒と話し合った時に「クラスの指導には不満があるが授業には不満がない」といわれた。悲しんでいるのか喜んでいいのかわからない気持がしたがその言葉には私なりに一部の救いがあった。6年目に全然勉強しない生徒から「授業はわかりやすい」といわれた時はさすがに嬉しかった。それでも舞い込んでくる生徒の年賀状などをみると授業の内容はまだ難解なようで、私の研鑽への斗いはまだ続くといわねばならない。従って、いかに平易明快に授業をしたか、ここに陳述する勇気をもたないので、かわりにこの倫社を担当している間授業を媒介にして生徒との触れ合いで楽しかった幾つかの思い出を書いてみることにする。

#### (イ) anecdote について

思い出を書くのであるから内容の軽薄をお許しいただきたい。かつて世界史を担当した時にしきりに anecdote (逸話・ハナシ) を聴きたがる生徒がいて自分も無駄話が好きなので好んでアトランダムに anecdote を語ったが、歴史の萌芽がそこにあるにしても、よし、かえて歴史の本質がそこにあるにしても(どちらにしても歴史のことはわからないが)歴史の基礎(歴史の流れ)を教えるには適当ではあるまい。逸話をもって倫社の話をする時もある程度これはあてはまるのであって、これから示すように anecdote を理解することが生徒を喜ばせたからといって、倫理思想理解の効果があがったとはいえないであろう。その点は充分承知の上で(授業の本筋としてでなく)「あくまで思い出として」残っている倫社でした anecdote について語りたい。

#### (ロ) 「慎しい伴侶」(anecdote)

現任校に至るまで合わせて二校より体験がなく、かつとも異質の学校であるからもとより普遍的な話ができないが、どちらの学校でも生徒の関心を強く惹きつけた anecdote がある。倫社は2単位であるからどうしてもクラスを多くもつのであるが、その話はほとんど一クラスももれず100%近く生徒の興味をひきつけた。私は菊池寛という人について多くを知らない。それにもかかわらず「思磐の彼方に」「無名作家の日記」という短篇集は学生時代に愛読した。その内「無

名作家の日記」（間違ったらごめんなさい）の中に「慎しい伴侶」という短篇がある。運命の冷酷な戯れとでもいおうか伶俐に生まれながら醜く生まれついた女性と同じ運命の手中にあって同じように醜く貧弱な故に苦しまねばならなかった男性が結ばれる—その間の消息を描いた話である。これは結婚の話である。しかし明治大正を舞台に展開される所から私は当時の人にとって充分恋愛の話として通ると思った。私は「青年期」の授業で拙い「恋愛」の論理を弄する代りに授業のテーマの表現としていつもこの話をしたのである。問題点は三つあった。一つは人に指摘された事だが、もし生徒の中に顔に悩みをもつ者があれば心を傷つけはしないかという事である。成程その配慮は多感な時代に生きる彼らにとって必要であろうと思った。注意をしながら話を進めたが「今までの所」彼らは案外ドライで、女性徒も「キビシイ」とか「キツイ」とか喚声をあげながら喜んで聴いていたようである。二つ目は話が長くなる場合があつて一時間では終らないで次の時間にもちこされてしまう可能性が高く彼らの方で次の時間には興ざめてしまうか忘れてしまうかも知れないという危惧の念であつた。しかし彼らにこの話がどんなに興味深かったかの証拠になるのであるが、次の時間教場に入っていくと話がどうなるのか、興味そのものの顔があちこちから自分の方へ必ずといっている。生徒の熱い視線が自分に集中される位教師冥利につきることはあるまい。あまり熱心なのでどうかすると自分が創って話す様な錯覚さえる。これ程効果のある話を創った菊池寛という人は偉大な人だと思う。三つ目に戦後の性道徳の変化と性的退廃の中でその流れに巻き込まれている生徒達が、こうした古色蒼然とした話に興味を持つかという、これは上に示した通りである。恋愛に対する本質的関心はいつの時代もかわらないものとみえる。（ここに恋愛について考えるべき深いテーマがあるような気がする。）

#### （ハ）「生きる」 （ anecdote - II ）

私は大体一学期に青年期や心理の機制の話をして、二・三学期をかけて倫理思想の学習をするようにしている。一学期で人間とは何について話し二・三学期で思想史を通して人間はどう生きるべきかを話す。従つて二学期のはじめに、倫理思想をなぜ学ぶかをまず話すのであるが、その anecdote に使うのが「生きる」である。「生きる」は大方の御存知のように黒沢明の名画の一つである。敗戦後の混乱期に生きる方向を見失っていた大衆に闇に照る光明の如く現われた作品

であった。ここには人生の一つの厳肅さがある。前任校でこの話をした時には水を打ったように生徒は話をきいた。授業を終ってある教室から出てきた私をわざわざ一人の女性徒が追ってきて、息をはずませて、「私も見ました!!」といって眼を輝かせた時、私はその生徒と人生の厳肅を幾分分かちあったような気がしました。(人生の厳肅を真に自分が理解しているかどうか今なお疑問ではありますが)

しかし、授業はいつも聞かれるとは限らない。(正直にいうと)前任校でできた「話」も現任校ではきかれない。確か三年目の時、オシャベリをする生徒がいる中を、それを制止する時間を惜んでわずかに耳を傾け、こちらに注視する生徒の視線の漂いがちなので、絶望的な気持でそれでも最後までストーリーを話し終えて肩を落して教室をでた時、やはり一人の女性徒が後から追いかけてきて、「それは本になっていますか」といわれた時の複雑な気持は今も忘れられない。その生徒も卒業し新しい生徒に向って話をしている自分であるが私は今もなおその女性徒の目の大きな浅黒い健康そうな顔をハッキリと思い出す。「生きる」は anecdote というより倫理(ここでは生き方の意味に用いるが)そのもののような気もするのだが、話すこと、それが通ずること、そうした人間の営みのすばらしさを私は皮肉な状況の中でこういう話をする事によって強く感じたものである。

## (二)「聖ジュリアン」 ( anecdote - II )

gustave Flaubert は、19世紀フランスが生んだ文豪である。「ボヴァリー夫人」「サララボー」「感情教室」等の数々の傑作を後世に遺した。そのフローベルが晩年に推敲を重ねた上書き遺した短篇集に「三つの物語」(Trois Contes) というのがある。その三つの物語の二つ目に書かれているのが、フローベルの故郷の伝説「聖ジュリアン」の伝説である。父親に勇将になることが、母親に聖人となることが予言せられた王子ジュリアンが自ら人語を発する白い鹿より父母の殺害者なることを予言せられ、その予言から懸命に逃がれんとするが、まず勇将となり、ついで父母の殺害者となり、悔恨にさいなまれながら贖罪のため川の渡し場の守人となった時、キリストに矢にあげられ、聖人となり、悉く余言が実現される。宿運の人を描いたこの話を私はキリスト教思想の枕として使った。キリスト教において贖罪がどんな罪深い人の前にも開かれていることを西洋

人がどんな型で信ずるかを示す導入例としてである。この話は構造の複雑さと話の長いこともあって自分としてもそう何度も話さなかった。例によって一時間で話し終らなかつたのと全体の計画との関係で途中まで中断したクラスもあった。所が、ある集会が講堂で開かれて集会も終り、生徒達がぞろぞろと各H・Rの教室に長い廊下を通して帰っていく時に私も職員室へ向って生徒の群れの中を歩いていると後から袖をひくものがある。振り返ると一人の小さな女性徒が是非「この間」の話を知りたいという。今ここで話せといわれて躊躇したがすぐ決断して、横目で物珍らしげに眺めながら通っていく生徒の群を見やりながら暗い廊下で話を最後までし終えるとその生徒は「これで胸のつかえがおりた」といってニッコリと笑った。三学期の最後のテストの用紙の裏に「教科の中で倫社が一番好きだった」と書いてきたのもこの生徒であった。(もっとも残念ながらこう書く生徒はこれからはじめて終りである。)とまれ今でも暖かい気持でそのことを思い出す。現任校のこれも3年目のことである。

#### 4. 倫社への思い

今ここで話したことはいずれにせよ、一・二人の生徒の反応でどの先生方も体験するだろうごく平凡な授業の風景に過ぎない。mass - education のこの時代にとって重要なのは大半の生徒がどう内容を把握し、どのように自らの思考力で発展させるかである。かりに anecdote にしろもしこれらの生徒が無関心でほんの一握りの生徒の関心しか惹起しならば、これらの思い出は損われるであろう。しかし関心を惹起された生徒が一人でも二人でもいるならば思い出としては貴い思い出にちがいない。求められているのは「倫社への思い」であって「思い出」ではない。しかしこうした貧しい思い出の中に自分の「倫社への思い」が話されているとしても、大方の御諒解がいただけるのではなからうか? 私としても倫社は思い出多い教科なので、「思い出」の羅列をもって「思い」とすることを許されたい。

# 教えることも学ぶこともできないものへ

亀田 文保

## 1. 疑問と反省から

一人の人間の生涯において、プラトンを、デカルトを学ぶということは、一体どのようなことなのであろうか。私はこの問いに対する答えを出すに到ってはいない。しかし、少なくともそれは、イデアとは、コギトとは何かということを理解するようなことではないであろう。ところが、それが授業となると、教科書の説明や理解という仕方では扱われる態のものになっているのを見る。果して、説明や講義に基づき、「思想」を理解したことが試される。そのような「思想」を「知る」仕方ではどれ程の意義があるのであろうか。私は「思想」をそのような「知識」として扱うことには、懐疑の念を抱かざるを得ない。

昨年、大学に進学した卒業生が私を訪ね、彼の携えていた一般教養の『倫理学』の受講ノートを見せてもらったことがある。その時、私は驚異と失望を感じないではいられなかった。ノートには、本人が理解してもいないという「倫理学を学ぶ意義」が、さらに「重要」、と板書通りの注までもが書き写されていたからである。このような「知識」としてでしか「思想」を捉えることのできない状況は、私自身反省すべき課題として、何をすべきか、また何ができるのか、問われる立場から『倫理・社会』を進めざるを得ないものとなった、それが今年度の授業である。

## 2. 自己表現としての作文

一定の思想家の紹介、その解説、さらに徒らな新しい知識の蓄積、そしてそれらの理解を測る試験という、予め教師が設定する枠に生徒の思考を嵌め、特定の答えを導く仕方ではなく、自らの生を反省する精神を促すことを念頭に置き、授業の展開を目指した。まず、『狼に育てられた子』、『夜と霧』を選び、それぞれ主要箇所を十数枚のプリントにし、感想文を課し、それはさらにプリントし、各自が考える材料とした。次に遠藤周作のエッセイ『人はなぜ愛するのか』をプリントし、「愛」について作文を課した。これらの作文の主眼は、観念から出発することなく、自分の立場を表現することにあつた訳であるが、内容的には自分の立場を置いての「観想」的発想が多く、その事態を打開すべく、生徒に比較的

知名度の高い福沢諭吉、ガンジー、シュバイツァーの生涯と思想を簡略ではあるが提示し、「思想」というものが、各人が生きていく上で形成されてきた意義あるものであることを、生徒自らの歩みを振り返ることと合わせ、作文により表現させた。このような自分自身の人生を「思想」の当体とし、その表現を目指す授業は、自由課題の「卒業論文」作成へと収斂するに到った。

### 3・自らが問うしかないということ

今年度の授業が、一教師による独断に過ぎないものでしかなかったか、それとも「思想」の断片でも表われていたものであったかどうか、それは生徒の立場に依る他はない。当然扱うべき思想家を取り上げなかったり、社会の要請する「知識」を万遍無く学習させなかった責任は問われるであろう。しかし、私としては、そのようにしか「思想」を扱うことができなかったのである。何故なら、アイデアもコギトも、それらはいずれも一人の人間がその生涯において到達し得た極みであって、出発点として学ぶことなど決してできないものだからである。

生徒に、自ら考えよ、思索する過程こそ大切である、とは『倫理・社会』にあつてはよく聞くことである。しかし、それは生徒に説く以前、教師自身が行なうべきことであると言わなければならない。何故なら、人間が何故生きるのか、如何に生きるべきか、という人間の核、「思想」の出発点は、決して人が教えたり、人から学んだりすることからは得られないものだからである。自らが行なうより他にない、自分の生き方を問うことを、もし私が忘れ、安易に教科書の陰に隠れ、授業を行なうような時、それは、私がソフィストに墮する時である。

## 東京都高等学校倫理・社会研究会規約

1. (名称) この会は、東京都高等学校倫理・社会研究会といます。
2. (目的) この会は会員相互によって、高等学校社会科「倫理・社会」教育を振興することを目的とします。
3. (事業) この会は、次の事業を行ないます。
  - (1) 「倫理・社会」教育の内容および方法などの研究
  - (2) 研究報告、会報、名簿などの発行
  - (3) その他、この会の目的を達成するために必要な事業
4. (事務局) この会の事務局は原則として会長在任校におきます。
5. (会員) この会の会員は次の通りです。
  - (1) 正会員 学校またはその他の研究団体に所属して、この会の目的に賛成する者
  - (2) 賛助会員 この会の目的に賛成し、会の活動を援助する団体または個人
6. (顧問) この会に顧問をおくことができます。
7. (役員) この会の役員は次の通りです。任期は1年ですが留任を認めます。
  - (1) 会 長 (1名)
  - (2) 副会長 (若干名)
  - (3) 常任幹事 (若干名)
  - (4) 幹 事 (若干名)
  - (5) 会計幹事 (若干名)
8. (総会) 総会は毎年6月に会長が召集し、次のことを行ないます。
  - (1) 役員を選任
  - (2) 決意の承認、予算の議決
  - (3) その他重要事項の審議
9. (年度) この会の会計年度は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終わります。
10. (経費) この会の活動に必要な経費は、会費その他の収入でまかない

ます。

会費は次の通りです。

- (1) 正 員 学校または研究団体を単位として年額  
1,500円
- (2) 賛助会員 年額 1口 2,000円

- 11. (細 則) この会の規約を施行するについて、幹事会は必要な細則を作  
ることができます。
- 12. (規約の変更) この会の規約は、総会の議決によります。

#### 附 記

- 1. この規約は昭和37年11月20日から施行します。
- 2. 昭和42年度総会で、会計年度と会費の変更がみと  
められた。
- 3. 昭和55年度総会で、本研究会の名称を「倫理社会」  
研究会から倫理社会研究会に変更することがみとめ  
られた。

## 事務局だより



都立三田高校 海野省治

細谷から事務局を引きついで、一年になろうとしています。事務局の、会員の先生方のさまざまな御協力をいただいて何とかやってまいりました。事務局の先生方は次長の蛭田先生、研究部長の葦名先生をはじめとしてそれぞれの部門での積極的かつ、自主的な活動によって私が存在していただけると思っております。

都倫研という組織は、一度足を踏み入れると何かそこから出ていくことの出来ぬ、何とも奇妙な力というか、魂力をもった集団です。それは何か明確にはつかみかねていますが、集団というのは、人によって成り立っていることを考えてみれば、都倫研に集う先生方一人一人に何か言葉では言いきれぬ人間的な魂力があるが故でないかと思えます。

こうした都倫研の魂力を更に増していくためにも研究会活動を活発にしていきたいと思えます。今年度は、そうした点をふまえて主として「現代社会」の授業展開例を公開授業という形を通して研究してまいりました。菊地先生（日野台高校）、及川先生（江北高校）、小川先生を始めとする清瀬高校の先生方、そして大森東高校の木村正雄先生、それぞれの先生方には公開授業のためにいろいろ御無理をお願い致しました。ここで改めてお礼申し上げます。

新しい科目としての「現代社会」の一年目は模索の時ではなかったかと思えます。それぞれの先生方のさまざまな授業展開の試みを次年度には又沢山出させていただき、より望ましい「現代社会」の授業のあり方を追求していきたいと思っております。又今年度盛り上りを見せた各分科会の活動も、研究会活動の原点として来年度へ引きついでいきたいと思っております。今後も先生方の御協力をお願い致します。

## あ と が き

「都倫研の伝統」 — 研究部の仕事に携らせていただいて、この言葉をしみじみとかみしめた一年でした。

「現代社会」が実施され、「倫理・社会」が「倫理」へと変わる転換期に、研究部の活動をどのように進めていくか、緊張と戸惑いの出発でした。しかし、実に多くの先生方から御助言、お力添えをいただきました。「主題設定をどうするか」 — 何人もの先生から貴重な意見や知恵が次々と寄せられます。「初めて参加される方に研究部活動をどう知っていただくか」 — たちまち昨年度の分科会のプリントが多く集まりました。その他、分科会の会場を快く提供して下さいました先生、分科会での発表を積極的に引き受け下さった先生などの顔が次々と浮かびます。「力を結集して会を盛り上げていく」都倫研の伝統を心から有難いと思います。

なかでも、世話人の先生方 — 三宅、関根、工藤、斉藤、鈴木、幸田の諸先生方には並々ならぬ御尽力をいただきました。お蔭で、ほとんどの分科会での話し合いは食事もとらず8時迄に及び、その後の「trinken」の会では、アルコールを交え、人生・教育・家庭など話は発展し、ますます熱気を帯びたものとなりました。「学び合い、語り合う」都倫研の伝統は脈々と生き続けているようです。

さて、本年度の紀要には、そのような多くの先生方の意気込みと情熱が反映されているものと思います。「現代社会」で意欲的にさまざまな試みをなされている先生、「倫社の良さを是非伝え発展させていきたい」と熱い思いを語られる先生 — この紀要の一頁一頁に、それらの先生の語る声が聞こえてくるようです。学校の授業や生徒指導、また研究部の運営にいろいろ困難があっても「力を結集し合い、学び合う」ことによって道も開かれていくのでないか、そんな気持ちを強く持ちました。

最後になりましたが、各分科会にお忙しい中お集まりいただいた先生方、原稿をお寄せいただいた先生方、そして研究授業をお引き受けいただいた先生方にあらためてあつく御礼申しあげる次第です。

(研究部) 葦名 次夫、 渡辺 潔、 小嶋 孝、 和田 倫明

昭和57年度 都倫研紀要 21.

発行 昭和58年3月25日〔非売品〕

発行者 東京都高等学校倫理・社会研究会  
代表 佐藤勇夫

印刷 (有)稲谷印刷所  
東京都千代田区麴町3-1  
電話(03)234-7851~2

事務局 東京都港区三田1-4-46  
東京都立三田高等学校  
電話(03)453-1991

発行者 東京都高等学校倫理・社会研究会

11

11

11

11